

第14次

パレスチナ医療・子ども支援活動 報告集

期間 2022年8月5日～9月5日



Hokkaido Medical Service for Palestine (HMS4P)

北海道パレスチナ医療奉仕団

目次

第14次パレスチナ医療・子ども支援活動

はじめに	4
第14次行程	5
第14次パレスチナ医療・子ども支援活動」の記録	
北海道パレスチナ医療奉仕団 猫塚 義夫（団長 整形外科医）	6
パレスチナ人から投げかけられる問いに向きあおうとすること	
清末 愛砂（室蘭工業大学大学院教授）	24
第14次支援活動報告	
細川 佳之	26
第14次パレスチナ医療・こども支援活動に参加して	
清末 国夫	31
パレスチナとのかかわり方が変わっても	
山村 順子	33
第14次パレスチナ・こども支援活動報告	
相澤 依里	35
第14次パレスチナ医療・こども支援活動報告	
齋藤 育	39
「後方支援チームとしての課題とやりがい」	
香山リカ	41
資料	
パレスチナ医療・子ども支援活動経過	42

アフガニスタン紀行

「アフガニスタン紀行 2023年2月」

北海道パレスチナ医療奉仕団 猫塚 義夫（団長 整形外科医）	46
アフガニスタン視察	
清末 国夫	65

はじめに

終息が見えないコロナ禍の中で、私達は2019年11月以来中断していた現地パレスチナ、ヨルダン川西岸とガザ地区での「第14次パレスチナ医療・子ども支援活動」を実施いたしました。

この間、パレスチナでもコロナ感染の拡大下にもかかわらずヨルダン川西岸ではイスラエルの軍事支配と入植活動が先鋭化し、特にイスラエルのネタニヤフ極右政権の再登場により、パレスチナへの弾圧は史上最悪な状況になっています。

また、17年間の封鎖が続く「ガザ地区」では2021年5月にイスラエルによる軍事侵攻が図られ300名の死者と多くの被害者が出されました。現地からは多くの支援要請の声が届けられ、私たちは皆様のご協力で第14次の支援活動を実施することができました。

今回、その内容を報告集にまとめましたのでお届けいたします。今後ともご支援をどうぞよろしくお願いいたします。

実施要項

期 間：2022年8月4日～9月1日

場 所：東エルサレム、ヨルダン川西岸、ガザ地区、ゴラン高原など

<活動内容>

診療活動：運動器疾患・総合診療・障がい者医療

- ①東エルサレム・シュファット難民キャンプを中心に診療
ヨルダン川西岸、ベドウィン集落への出張診療
- ②ガザ地区、国連UNRWAの診療所での診療・コンサルタント
- ③両地区でのコロナ禍の状況と地域精神状況の把握へ接近する。

子ども支援活動：日本と現地の子供の共同作業、ガザ現地教師との懇談

- ①「平和の壁画」、障がい児と交流活動、絵画・アート活動
- ②バレーボール普及・指導とガザ地区のスポーツの現状視察

同時に、エルサレム旧市街地での定点観測をはじめ、西岸・東エルサレムでのイスラエルによる軍事支配の実態、イスラエルによる完全封鎖で「緩慢な死」を強制されている「ガザ地区」の人々の現状を視察し報告いたします。

派遣メンバー： 猫塚義夫（団長：整形外科医）細川佳之（副団長：高校教師）
清末愛砂（副団長：大学教授）山村順子（副団長：通訳・安全担当）
斎藤 育（中学校教師・特別支援）植村和平（総合診療医）
相澤依里（看護師）清末国夫（社会運動家）以上8名

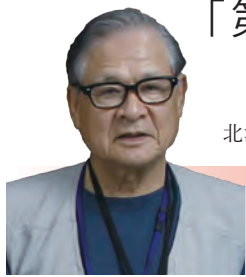
在札本部：

宮島豊副団長（本部長）、高崎暢弁護士、香山リカ、松本一敏、西岡利泰、井上智美、
石崎龍之介、米林嶺、上西潤

なお、本報告集の最後に2023年2月に訪問した様子をまとめた「アフガニスタン紀行」を掲載しましたのでお目通しく下さい。2021年8月15日タリバン暫定政権成立後の現地の状況視察と診療、そして何より私たちの活動を強く後押ししてくれたベシャワール会・故中村哲先生の活動現場を訪問しご冥福を祈ることが目的でした。

第14次行程

	猫塚義夫	齋藤 育	植村和平	細川佳之	山村順子	清末愛砂	清末国夫	相澤依里	
	医師	教師	医師	教師	通訳・安全担当	大学教授	秘書	看護師	
	団長			副団長	副団長	副団長			
8月4日		日本発	日本発	日本発					成田集合時間：
8月5日		パレ入国	パレ入国	パレ入国	パレスチナ在住				
8月6日	日本発								診療 (S1) シュファット パレーボール(V)
8月7日	パレ入国								診療 (S2) PM幼稚園 V.
8月8日									診療 (S3) PM子供活動・
8月9日									診療 (S4) ・子供活動・V.
8月10日	ガザ入域	ガザ入域	ガザ入域	ガザ入域					診療 (G ①ベイトハヌーンRC) ・子供活動・V.教育局懇談 (以後、宿泊SHAWAA)
8月11日	ガザ出域ガザ入域	ガザ出域ガザ入域	ガザ出域ガザ入域	ガザ出域ガザ入域					診療 (G ②プレイジRC) ・子供活動・V. 朝日新聞取材
8月12日									ピリン村 シェイクジャラデモ PCR検査 CXZ
8月13日									南ヘブロン
8月14日		イスラエル出国	イスラエル出国						AMシュファットRC (S5)
8月15日		日本着	日本着						診療ラマッダ・①AMアマリRC、 ②PM (シャラゾーンRC) 小児検診
8月16日									PCR検査 ③ベドウイン集落
8月17日									終日 ゴラン高原
8月18日				イスラエル出国					④シュファット メディカルセンター FAFFA へ.....
8月19日				日本着					休日
8月20日									休日
8月21日						日本発	日本発	フィンランドから	
8月22日						パレスチナ入国	パレスチナ入国	パレスチナ入国	⑤ベドウイン集落・ベイトヤール (ジェリコ) PCR検査
8月23日	ガザ入域				ガザ入域	ガザ入域	ガザ入域	ガザ入域	PM買出し 診療⑥サブラヘルセンター 子ども
8月24日									診療④ラファRC、ワッフア病院回診 子ども・幼稚園etc.
8月25日	ガザ出域				ガザ出域ガザ入域	ガザ出域ガザ入域	ガザ出域ガザ入域	ガザ出域ガザ入域	診療⑤ジャバリアRC
8月26日	ライブ報告								ライブ報告会13:00
8月27日	学会								第63回社会医学学会報告
8月28日									ヨルダン渓谷ラシード氏 (JVS) 絵画 メディカルセンター夕食 PCR検査
8月29日									診療⑥カランディアRC 絵画
8月30日	イスラエル出国					イスラエル出国	イスラエル出国		
8月31日	日本着					日本着	日本着		



「第14次パレスチナ医療・子ども支援活動」の記録

北海道パレスチナ医療奉仕団 猫塚 義夫 (団長 整形外科医)

その日々の現地の状況と私たちの活動内容を報告いたします。

2022年8月4日から始まる「北海道パレスチナ医療奉仕団」による「第14次パレスチナ医療・子ども支援活動」にあたり、その日々の現地の状況と私たちの活動内容を報告いたします。

私は、新型コロナウイルス感染疑いで、パレスチナ行を2日遅れで成田空港を発ちます。(精密検査では陰性を確認)

8月1日から始まったイスラエル軍とパレスチナ(イスラム聖戦)との確執は徐々にエスカレートしています。8月5日にはガザ地区への唯一の入り口であるエレズ検問所がイスラエル軍により閉鎖されてしまいました。ガザから80Km以内はイスラエルの交通規制がなされ、ガザ地区に近寄ることもできません。

8月5日にすでに到着している3人のメンバー(細川、斎藤、植村の各氏)から状況が寄せられてきます。そして、私たちと友好関係にあるエルサレム慈善協会のSalim医師とともに、東エルサレムでの「医療・子ども支援活動」が開始されています。

それにしても、イスラエルによる軍事支配が続くヨルダン川西岸と東エルサレムと2007年以降完全封鎖が続く「ガザ地区」……どちらでも私たちの難民支援活動への要望が少なくありません。今回もガザ地区ではUNRWA(国連パレスチナ難民救済事業機関)が私達に多くの援助をしてくれると同時に支援活動を公式に取材する旨の申し込みがありました。

私自身がコロナ感染を経験し、その身体的な恐ろしさとともにその社会活動に及ぼす影響と心理的な負担を感じ

ざるを得ませんでした。しかし、こうしたことがパレスチナの難民の皆様が置かれている状況からするととてつもなく小さく感じてしまうのです。日本にいる時よりも現地ではもっと多くの難民が明日への希望を持たずに暮らしているのですから。

私は、難民キャンプやUNRWAの診療所、砂漠の遊牧民であるベドウィンへの往診などの医療活動、難民の子どもたちへのかかわりなどを通して現地の状況を自分に目で見て皆様にお届けすること。同時に、延べ8名のメンバーを危険から守り無事日本へ帰ることに責任を持つことを心にパレスチナへ向けて8月6日成田空港を後にしました。

8月7日(日)

午後、先着した3人と現地活動家で「医療奉仕団」の盟友ガリコ美恵子さんの4人で、3年ぶりの再会を喜び合いました。その後、東エルサレム・シュファット難民キャンプ、エルサレム慈善協会理事長で医師のSalim先生のご一家の訪問を受け、明日からのスケジュールを確認いたしました。

これから9月11日までの期間ですが、ご意見・ご提案などよろしく願いいたします。

パレスチナ自治区ガザ地区 イスラエル軍が空爆…5歳児含む10人死亡

<https://www.youtube.com/watch?v=5tXCegwWKDc>

イスラエル軍がガザ地区空爆、武装組織司令官ら10人死亡 少女が犠牲に

2022年8月6日

<https://www.bbc.com/japanese/62432958>

8月8日(月)

昨日23:30日にガザ地区イスラム聖戦とイスラエル軍との停戦協定がなされました。

しかし、ガザ地区に入域できるのは、ジャーナリストと外交官のみとのこと。

私たちは、予定を変更し東エルサレ



写真1 シュファット難民キャンプの検問所

ム・シュファット難民キャンプでの難民の診療と子ども支援活動に切り替えました。Salim先生のお迎えで宿舎を出て、難民キャンプへ……。 (写真1)

慈善協会理事長のサリム先生方の事前宣伝が効いたのか40名近くの人々が受診に見えました。今回は、総合診療医である植村和平先生も参加されています。これまでの私一人で診療活動をこなしていた時と比較して、身体所見のみならず、難民の方々の仕事や生活背景まで聴くことができ、また私自らリハビリの方法を教えたりなど、これまでの診療活動から一歩前進したように感じました。特に傍にいてくれたガリコ美恵子さんが患者さんの生活背景を教えてくれたのが重要でした。また、四年前に札幌で研修を受けた理学療法士のラベバさんが独自に疾患指導パンフを作成して患者教育に取り組んでいました。

その後、サリム先生たちと昼食をしながらここ8月末までのスケジュールの調整を行いました。

ガザ地区に入域できない時に、パレ

スチナの首都ラマラ近くの難民キャンプ、西岸で最も厳しいといわれるカランディア検問付近の難民キャンプ、そして医療施設も学校もない砂漠の遊牧民でイスラエルからの弾圧が激しいベドウィン集落にも行く事になりました。

昨夜、ガリコ美恵子さんと連れ立って21:30から夜の旧市街を散策。あの有名な祈りの壁は混雑し、さらに横に回り「小さな露の壁」まで行くことができました。この通路は、イスラエル兵がアルアクサモスクで不当逮捕したパレスチナ人を大衆の目から逃れて連れ出そうとする所謂「隠れ通路」のように細いうねりの中で作られています。

また、22:00を過ぎても旧市街のあちこちには重装備したイスラエル兵が目を見せ、ダマスカス門に集まるパレスチナ人を弾圧する警察官たちが集まってくるのでした。

翌朝聞くと、私が宿舎に戻った後にイスラエルが側からの「銃撃」があったそうです。

どこまで、イスラエルはパレスチナ人たちを弾圧するのか……

今回の「支援活動」でもパレスチナの置かれている実態をつぶさに観察し報告する予定です。

8月9日（水）

本日も昨日に続き、東エルサレム・シュファット難民キャンプでの診療と子ども支援活動に時間をかけました。

相変わらず、イスラエル兵と入植者がパレスチナ人を検問することが続けられているのです。まさにイスラエルの軍事支配にあえぐパレスチナ人の断面を診療活動でも明らかにする必要性を感じながら公共バスに揺られて難民キャンプに出かけました。

本日は、昨日の5名に山村女史が加わり、アラビア語の通訳と私たちの活動の行程の臨機応変な組み立てに多大な力を発揮してくれているのです。

その活動の最中に、国連UNRWAの担当者から明日のガザ入城の許可が下りたという連絡が入りました。細川・斎藤・植村の各メンバーに知らせ、サリム先生と相談し明日からの難民キャンプでの活動に若干の変更を加えたのです。

そうした中での診療と子ども支援活動なので、自然と熱が入りました。

昨日と同様に40名以上の患者さんが難民キャンプ以外からも受診に来るのです。ある患者さんは、イスラエル南部にあるネゲブ砂漠から、車で2.5時間かけてやってくるのです。日本からシュファット難民キャンプに日本から「医療奉仕団」が来ていることをヨルダンの友人から聞いてきたとのことでした。

また、相談・診療内容も一度手術を受けたがその後のことや、家庭環境に問題がありそうなお婦人など、私たちの活動もこれまでの身体的な診断と治療の枠を超える内容に深化しているように感じるのでした。

途中、電源が切れてスマホの明かりを寄せ集めて行う診療は、私が12年前にパレスチナ支援を決意した「携帯電



写真2 シュファット難民キャンプで、停電下の診療の検問所

話の明かりを集めて手術をしていた」電気不足が恒常化しているガザの病院の有様を彷彿とさせるものでした。患者さんの協力もあり、無事本日の診療を終えることができました。（写真2）

その後、サリム先生のご自宅でお茶をいただいているその時に、ガザ地区国連UNRWAの担当者から電話が入り、明日7:30に宿舎からガザ地区に向

かう旨の具体的打ち合わせが行われました。

さあ、いよいよガザ地区に入る時が来たのです、しかも8月1日からの「イスラエルのミサイル攻撃」で子供5名を含む46名以上が殺戮された直後なのです。大変な緊張の中で行われる「医療・子ども支援活動」ですが、安全第一として医療・子ども支援活動を行いつつ出来る限りガザの状態を把握することに尽力することを心の中で誓いました。

8月10日（水）

いよいよ今回の「支援活動」で、予定より2日遅れてガザ地区に入城する日となりました。昨夜は23:00眠ったつもりが緊張のあまり早朝4:30AMに起床し、前夜に準備した荷物を再点検して7:45に国連UNRWAの車でエzez検問所まで行きました。

これまでのガザへの入城は10回を超えますが、イスラエルの進行直後の入城は初めての経験なので緊張したのかもしれません。

1昨日に開いた検問所は、待機する自動車が多少混んでいましたが、報道機関以外ガザへ入城する人は多くありませんでした。

ご存じのようにガザは数日前までイスラエルからの爆撃にあい子供15名を含む43名のパレスチナ人が虐殺されているのです。現在は、イスラエル軍に逮捕されたイスラム聖戦のメンバーが1週間以内に釈放されることが「停戦」の条件なのです。イスラエル側の誠実な対応がなければ再度の混乱が待っているのです。

入城後、直ちに行ったのはガザ地区北部にある Beit Hanoun 難民キャンプ診療です。そこには、2015年のイスラエル軍によるガザ侵襲で大変な被害にあったイマンさんが彼女の子供を連れてやってきました。1歳半の男児の診察とこれからの治療の相談にやってきました。UNRWA清田医療局長からの依頼があり診療所の院長、理学療



写真3 ガザ地区、ベイトハヌーン難民キャンプでイマンさんとの再会

法士、看護師さんたちとこれからの治療と経過観察について、イマンさんと相談いたしました。（写真3）

2015年のガザ侵攻時にお会いした当時は中学生でした。すっかりお母さんになったのを見て私の心が少し和やかになるのを感じたのです。

診療所の廊下では、斎藤育さん、細川佳之先生が平和の手形づくりやお絵描きを子供たちに教えて大盛況でした！！！！

ガザの町並みは、3年前と比較してラバに引かれた荷車の多さに、ガソリン不足をはじめ貧困に喘ぐガザ地区の住民の状況を想像せざるを得ませんでした。車窓から見た街中に5日前にイスラエル軍から爆撃を受けて破壊されたビルを見て、あらためてガザ市民への哀悼とイスラエル軍に怒りが湧いて



写真4 ガザ地区：1週間前の爆撃後のビル



写真5 ガザ地区、UNRWA教育局の皆さんと懇談

くるのでした。（写真4）

私たちは、医療支援活動とともに17年の「封鎖」下に置かれている「戦争を知らない子供たち」の心の状況に接近するため、アートやスポーツをとった交流を続けてきました。今回は、ガザ地区・UNRWA教育局の美術担当とスポーツ担当の方々とこれまでの経過とこれからのについて、ゆっくり懇談することができました。こうした懇談は初めての取り組みでしたが、これからも毎年行いたいと思いました。（写真5）

https://www.arabnews.jp/article/middle-east/article_73903/

イスラエルとパレスチナ組織の戦闘でガザはまたも悪夢にさいなまれる

8月11日（木）

今回のガザ地区での活動の2日目です。イスラエルによるガザ空爆で活動期間が短縮されたため、日程的にきつい行動にならざるを得ません。朝7:30に宿舎を発ちガザ地区中南部のブレイジ難民キャンプ診療所へ。いつもと違う道を国連UNRWA車が走ります。というのは、イスラエルからの爆撃が停止されているとはいえ安全第一で、車両で移動する経路が決められているからなのです。もし、イスラエルからの不発弾が放置されていれば事故につながりかねません。8:00からの診療開始予定に合わせて、院長先生自身が先頭にアラビア語～英語の通訳を買ってくれ

ました。もちろん、リハビリ部の技師さんたちは患者さんを中心に私の診察を見ながら、患者さんの治療方針を注意深く聞いてくれました。

受診される患者さんは、肥満で腰痛・ひざ痛を来すご婦人から脳性麻痺の3歳の女兒まで、ガザという限られた空間の中で医学を学び、医療状況を少しでも改善させるための努力を身に染みて感じたのです。（写真6）

一方、診療所のロビーで開かれていた子ども支援活動は、いつものように子どもたちでごったがいでいました。



写真7 ガザ地区北部、エレス検問所を出る4人

翻って私自身とその周りを見ていると、環境の違いこそあれ、限られた医療資源で最大限の努力を惜しまないガザの皆さんから学ぶことも多いのです。

10:30に診療と子ども支援活動を終了し、ガザ地区から出るために一路北部のエレス検問所へ向かいました。（写真7）

ここでのガザ出域は、イスラエル側からするとイスラエルへの「入国」といなります。



写真6 ガザ、ブレイジ難民キャンプ診療所の職員と

従って、検問所での検査はしつこく、入念に荷物をすべて開けられ、内容物はメッククチャなのです。さらに、今回はパソコンを起動されていました。（PC上の日本語が分かるのでしょうか）

青く澄みきった空には、イスラエルのバルーンがあげられガザ地区住民を監視しているのを見るとイスラエルの野蛮さにあらためて怒り湧いてくるのでした。

15:00過ぎ、タクシーをお願いして東エルサレムの宿舎まで、車の渋滞の巻き込まれながら帰ってきました。明日は、いよいよ、ビリン村へ向かいます……。

8月12日（金）

本日、14日に帰国する斎藤さん・植村先生が帰国前に行うPCR検査を施行。これが日本政府が出してる瀬戸際作戦のひとつです。7:00から東エルサレムにあるオーガスタ・ヴィクトリア病院のPCR検査所に行きました。由緒のあるキリスト教会つきの格式のある病院でした。

その後、タクシーを乗り継いで、あのビリン村へ……（写真8）

著名なフォトジャーナリストであるハイサムさん、車いすのラニーで知られる本人を訪問しました。ハイサムさんからパレスチナ問題を考える上での基本的なことを聞き、ラニーさんには、褥瘡の治療材料をお渡ししました。また、ハイサムさんは、固い鋼線

による造形美を紹介してくれました。「これらの作品は、私の心」と彼は語ってくれました。

16:00からのエルサレム市内・シェイクジャラ通りで、金曜恒例のパレスチナに自由を求める集会が開かれました。70～80名のパレスチナを支持するメンバーとそれを弾圧しようとする、15名の入植者とそれを警護するイスラエル警察がこの通りを中心に対峙しています。一触即発の状態が1時間以上

続けられました。その中での暴力的なユダヤ人が盛んにパレスチナを支持する人々を挑発するのです。（写真9）

8月13日（土）

本日は、午前4:00起床、5:30に宿舎を出発し南へブロンへ朝もやの中をイスラエルの人権団体の人々と一緒に出かけました。へブロンも入植者とイスラエル軍からの暴力的支配のひどい街ですが、南へブロンもイスラエルによる土地の収奪と家屋破壊が進行している地域です。その実態を見るためにも新しく参加した植村先生も含めて5人のメンバーで参加したのです。

パレスチナの実態を自分の「目」で見ることともに、今回の訪問の目的は、約2年半前にイスラエル兵に気管と血管、頸椎部を撃たれながらも一命をとりとめたハルーン・アブラムさん（受傷時24歳）の往診をかねてのいるです。

ハルーンさんの状況は、イスラエル



写真8 ビリン村のハイサム氏・ラニー氏と一緒に



写真9 東エルサレム・シェイクジャラ通りで入植者に抗議するパレスチナ

軍 (IDF) と入植者たちによる家屋破壊で、現在は洞窟での生活を強いられてきた9人家族の長男です。IDFの銃撃により、高位頸髄損傷と気管損傷・呼吸困難でほぼ寝たきり状態なのです。右は下腿からかがと、左はかがとのみ、そして、仙骨部には深い褥瘡が生じていました。風通しが悪く空気が淀み、湿度も高い洞窟内での生活には劣悪だと直感したのです。同行したサリム先生・植村先生と一緒に両下肢の褥瘡部を観察し、今回は「湿潤療法」を行うこととして創洗浄後、持参したサランラップで創をラップいたしました。(写真10-1)

また、気管切開後、気管カニューレで挿入されており、奥様が頻回に喀痰の吸引を行っていました。

…これらを洞窟内で行うのです。今まで私自身も初めての経験でした。現代の文明社会で、なぜこのパレスチナ人が「洞窟生活」を強要されるのか……

それは、パレスチナ人がイスラエル兵に家屋破壊されたとしても、洞窟生活を選んでまでも自分の土地での生活を続けようとする……



写真 10- 1 ハルーンさんの褥瘡の処置を施行



写真 10- 2 援農作業、ズッキーニ畑の雑草処理

このように、農民たちが土地への「執念」と人権破壊に立ち向かう姿から、私は、自分がこれから生きてゆための『軸』・『立ち位置』を再確認させられたのでした。

その後、5人のメンバー全員で、南へブロン住民への支援として 羊小屋に羊の糞でできた床の厚みを解消するための土＝糞の除去、休憩をはさんでズッキーニ畑の雑草取りなど、援農的な支援もヨーロッパからの活動家たちと一緒に汗を流したのです。(写真10-2)

今の時期に農作業なのでからあまり要領が良くなく、パレスチの農民に迷惑をかけたかもしれません。こうしたパレスチナへの支援をイスラエル兵が高所に陣取った小屋から監視をつづけていました。

8月14日(日)

朝から東エルサレム・シュファット難民キャンプでの診療です。いつもの様に慈善協会で運動器疾患を中心とした診察が続きます。診断や治療上の相談に来られる難民の患者さんは、レントゲンやCT、MRIなどを持参してきます。それを動きの良くないデスクトップで再現し、要望に応じた結論を出すまでに時間を要します。その間、患者さんの仕事や生活状況などについてお話しするのも大切であり楽しいものです。

本日で、斎藤育さんと植村和平先生が帰国する予定です。しかし、二人と



写真 11 乗り合いバスから降りてチェックされるパレスチナ人

も出発予定時刻ギリギリまで、子ども支援活動と診療に力を発揮していました。

前日は、総括会議とご苦労さん会を開きこの間の総括とこれからの活動について、前JVC(日本国際ボランティアセンター、エルサレム駐在)の山村順子さんも加わり行いました。そこでは、大変貴重な意見と提案がされました。

皆さんが共通して指摘されたのは、今回で14回目となる活動の継続性でした。私は、私達の活動を支えてくれた友人や職場の同僚、家族、そして様々なアドレスをくれるキリスト教関係者や中東問題の専門家の皆様への感謝で胸が熱くなったのです。

そして、ガザ地区での活動をサポートしていただく、国連UNRWA/清田明宏医療局長と現地教育局の吉田美紀さん、東エルサレム・シュファット難民キャンプのサリム医師には本当に助けられました。心から感謝なのです。

「1年に一度、定期的に診療と子ども支援活動にやってくる」日本の医療チームの存在が徐々に西岸、東エルサ

レムとガザ地区」広まっているのも患者さんの出身地から予想できるのです。

14:30頃、活動を終えてシュファット難民キャンプを出るとき、いつもの様にパレスチナ人が乗り合いバスを降ろされ、列を組んで人ひとりIDをチェックされ、車内に残った私たちは、自動小銃を抱えた女性兵士と入植者にパスポートをチェックされるのをする。この状況を経験するとパレスチナがイスラエルの軍事支配下に置かれていることを目の当たりにし、イスラエル兵士にチェックされるパレスチナの青年たちの無念な思いに心を寄せ、1日も早いパレスチナの解放を願うのでした。(写真11)

夕方から、サリム先生の案内でパレスチナにある「世界文化遺産」のあるバティール村へ・・・ここは、ローマ時代に作られた階段状の耕作畑があり、それを潤う水(泉)がコツコツを湧いているのです。夏は冷たく、冬は暖かい水がローマ時代から続いているのです。パレスチナ人にとっては「心のよりどころ」になっています。

しかし、パレスチナとユニセフからの強力な反対にもかかわらず、イスラエルはここに電車を走らせ、遺産の破壊が続けられているのです。(写真12)

8月15日(月)

本日から当面細川先生、山村順子さんと私の3人での活動になります。

パレスチナ自治政府の首都・ラマラ

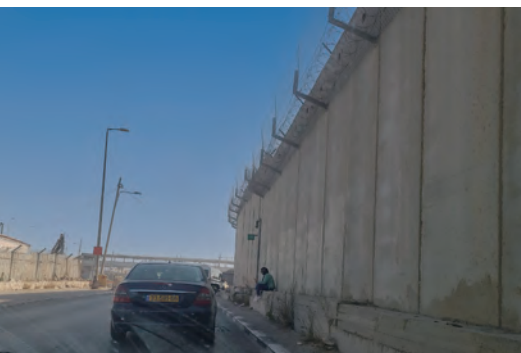


写真13 ヨルダン川西岸でパレスチナ人社会を分断する分離壁



写真12 世界文化遺産となっているローマ時代からの段々耕作地者に抗議するパレスチナ

にある都市型のアマリ難民キャンプにある慈善センターへサリム先生の運転で出かけました。

ラマラに近づくにつれて悪名高い分離壁が迫ってきます。その分離壁に沿って走るのです。西岸中に全長約650kmが網の目のように張りめぐらされ、パレスチナの住民の人権や生活を根本から阻害しているものなのです。

(写真13)直線距離にすると東京から広島市まで届く距離なのです。仕事に行くにも、学校へ行くにも分離壁とともに建設されている検問所をイスラエル兵の「許可」のもとで移動が許される?のです。どの国でも移動の自由は、現代の人権擁護の視点からも許すことはできません。

まづ、ラマラにあるアマリ難民キャンプへ到着。ここも他の難民キャンプと同様に狭い道路(通路)をはさんで、肩を寄せ合うように家々が密集しています。

ただちに診療を開始・・・続々患者さんがやってきて、腰痛・肩こり・ひざ痛など訴えます。時には、持参したCDをパソコンで開いて画像で確認することがあります。また、股関節疾患や分娩麻痺の少年、脳性麻痺の女性など私たちを待っていたかのような受診するのです。総計、45名の診察を終えると午後2時でしたが、札幌ではこうした外来患者さんの混雑はいつものことですのであまり苦にはなりません。

ん。

今回、一緒に活動している山村順子さんの活躍が素晴らしかったのです。時間のかかるPCでの画像の立ち上げ、診療記録作成を援助していただきました。彼女がいなければ午後2時には終わることはできませんでした。

また、アラビア語の堪能な順子さんは、患者さんの問診や生活や仕事の状況を的確に聞き取るのです。ある女性患者さんは、息子さんがイスラエルに逮捕・勾留が長引き、それによる精神的苦悩を涙して私たちに訴えてきたのです。それを見て山村さんは、患者さんの傍に寄り添い一緒に涙していたのです。このことを見て、私は「奉仕団」のもつ質の深化と難民患者さんとの信頼関係の構築がまた一歩前進したと感じたのでした。

一方、細川先生は、この診療時間にロビーで会場にやってくる子供たちと球技で汗を流していました。「医療・子ども支援活動」がシュファット難民キャンプへの支援活動を通して、英国・イタリアなどのNGOと連携を模索し始めています。継続されている私達の子ども支援活動も国際的な関係の構築が待っています。帰国後、英国のNGOから私たちとの協力関係の構築の希望が届いています。

さて、午後3:00ラマラの北部約10kmにあるジャラズーン難民キャンプへ出かけました。そこでの診療は、小児整



写真 14 ベドウィン集落での検診



写真 16 ゴラン高原と隣国シリアとの国境

整形外科にかかわる疾患に特化した診療を行いました。

主に外反足や内反足、O脚や股関節疾患などでした。これからもこうした疾患を限って医療支援の在り方も検討したいと思います。

8月16日（火）

朝だけは、多少涼しさが出てくるパレスチナ・エルサレムの街です。やがて陽が上がると一気に気温が上がります。湿度が低い分だけ何とか活動に支障はありません。

本日は、砂漠の遊牧民であるベドウィンの集落で行われる無料検診と子ども支援活動です。イスラエルが建設する「入植地」間をつなぐ道路を縦横無尽に結ぼうとするため、ベドウィンの人々は、羊やヤギを放牧しながらの移動を禁止・制限され、その生活は貧困を極めています。ここパレスチナでは、「パレスチナVSイスラエル」のほかに「ベドウィンVSイスラエル」の構造的暴力的支配があります。

サリム先生のお迎えで、東エルサレムからさらにジェリコ方面の東に向かい、アブファラ地区にある集落を訪ねました。ベドウィンには一夫多妻制が残っており、この集落の主人には3人の夫人がいるのです。従って子供が多く、聞いたところによると現在23人の子どもたちが暮らしているのです。細川先生がボールを使った様々な球技でその子供たちにその楽しさを教えていました。（写真14）

その一方で、私が山村さんとともに成人や子供たちの診療を進めました。隣ではサリム先生が必要な方に無料で薬を渡し、私が次の診察を行います。成人は、腰痛やひざ痛ですが、医療へのアクセスが難しい彼らは、病院へ行く機会も多くはありません。

脊髄障害の子供は、後日シュファット難民キャンプに来ていただき、リハビリを含めて長期的な治療戦略を立てることにしました。また、足に熱傷の男児には湿潤療法を教え、持参した抗生剤軟膏を手渡しました。すでに、このベドウィン集落を訪れるのは3回目となり、人々の表情も何かしら親しみを感じていただけたかもしれません。

夜は、サリム先生の案内でオリーブ山（標高800mあまり）に行き、夕闇から夜にかけての旧市街をゆっくり眺めながら、弾圧されるパレスチナ人の心や貧困の中で二重・三重に苦汁をなめさせられているベドウィンのこれからの私の頭を巡っていました。（写真15）

8月17日（水）

私達は、毎回の支援活動でその幅・場面・内容を一步一步深化させることを考え実践してきました。今回の活動では、8月13日の南へブロン行と本日のゴラン高原行を考えました。

ゴラン高原は、私が2008年2月にイラク戦争難民視察目的でヨルダンとシリアを訪れた時のことです。ヨルダン・アンマンからシリア・ダマスカス

へ向けて砂漠を北上していた時、左側にゴラン高原を見ていました。また、2011年1月初めてのパレスチナ行の時関西空港からのフライトでPKOの任務でゴラン高原へ出動する日本の自衛隊員と同乗していたのです。そのころから、機会があれば一度この目で今日のゴラン高原の実態と政治的意味付けを確認する希望が心の中にありました。

今日は、これまで支援活動をしていたエルサレムを離れ、イスラエル最北にあるゴラン高原へのPolitical Tourを計画しました。明日、日本へ向かう細川先生がパレスチナにいる間に実現できて本当によかった！！

ヨルダン川を挟んでパレスチナとヨルダンが接するヨルダン川とその横に広がるヨルダン渓谷（略称：渓谷）を国道90号線を一気に北上するのです。片道250km、所要時間片道3.5時間を要します。

渓谷は、肥沃な土地でイスラエルも多くの入植地を作り、家屋破壊とパレスチナ人の土地の収奪、そして、イス

写真 15 夕闇のエルサレム旧市街地にたたずむ、イスラム教の岩のドーム



ラエル空軍基地の存在など西岸地区でも緊張の著しいところです。（活動の後半に詳細な活動を計画しています）

パレスチナ北部に位置して、ヨルダン川の源流ともなるガレリア湖の東岸を通り抜け、午後1時近くにゴラン高原の中心地Majdal Sgamsの街に到着しました。

途中、多くの入植と少なくとも35個以上の風力発電装置が設置されていました。

イスラエルは、入植地建設で侵略の既成事実を積み重ねながら、高原のみならず電力産業も利益追求の場としているのです。現地のイスラム教ドルーズ派も参加しているArab Human Rights Center in Golan Heights（ゴラン高原アラブ人権センター）の事務所で、代表の弁護士・カラマ氏からゴラン高原の歴史と現状の説明を受け、直ちにフェンスで分けられているシリアとの国境へ……（写真16）

1963年第3次中東戦争以来、イスラエルがシリア国内に軍事侵攻し占領されてしまったのが、ゴラン高原の現状の始まりです。また、依然として地雷が住民と動物への被害が出ているのです。しかし、高原内にあるレーム湖をみはらす高台に上がるといかにゴラン高原の緑が豊かなことか……イスラエルは、この肥沃な土地の収奪を考えているのは今も全く変わりません。

これまで見てきたように、イスラエルが1948年に侵略的国家建設をはじめ、同時にパレスチナ難民を作り出したのが今日のパレスチナ～イスラエル問題の始まりです。しかし、イスラエ

ルの侵略性は、「国内」でのパレスチナへの軍事支配とともに国外的にはシリア領を侵略的領土の略奪を行いながら「国家形成」をしていることがここゴラン高原の現状を見てよく理解できるのでした。

まとめると……イスラエルが弾圧しているのは、国内ではパレスチナ人と砂漠の遊牧民・ベドウィン、そして隣国シリアのイスラム教ドルーズ派の3方向に弾圧と侵略の国家政策を進めていることが鮮明になりました。

紛争地における国境地帯は、どこも異様なものです。高い山の頂上からはイスラエルの軍事基地がおかれ、シリアとゴラン高原の人々を監視しているのです。

しかし、ここでも若い精悍な青年弁護士のカラマ氏が、語った人権の保障を具体的な形にする活動に身体ごとぶつかっているのを見ると、私達の様々な政治・社会活動への不十分さを自覚せざるを得ませんでした。（写真17）

そうした自覚を帰国後の自らの姿に重ね合わせ、実践できるかと自問しながら溪谷の夕陽に見送られて帰路につきました。

もの凄く勉強になり充実した「ゴラン高原への一日旅」でした。

8月18日（木）

再び、活動の場を東エルサレム・シュファット難民キャンプに戻りました。実は、この難民キャンプの中に国連UNRWA診療所のほかにもう一つ新しい診療所がオープンしました。それは、タカムル診療所でパレスチナ人の

篤志家が寄付する形で建てられたのです。

場所はキャンプの入り口で、イスラエル軍の侵攻で火事になったマーケットでしたが、その2階の内部を改装しメディカルセンターとして出発したのです。内科・小児科、産婦人科、歯科、リハビリ科などが開かれているのです。

パレスチナ難民キャンプでも劣悪な環境にあるここシュファット難民キャンプにこのように新しい診療拠点ができる事はこの上ない喜びです。（写真18）

そこで、サリム先生を通して私に運動器疾患の診療依頼が届いたのです。若者から成人まで腰痛・ひざ痛の方の診療が続きます。運動療法のやり方を教えるのは札幌でも研修した現地のラビベ理学療法士さん、診察後、薬の処方や検査の依頼、専門クリニックへの紹介状は私が担当いたします。やはり、すでに手術を受けた方の相談も持ち込まれました。また、ごく少数ではありますが、関節穿刺もせざるを得ませんでした。

診療の合間に屋上に案内していただき、シュファット難民キャンプの全景、特に遠くまで連なる分離壁を見ると、ここでもイスラエル軍によるパレスチナ人への差別と弾圧、軍事支配の現実が私達の前に迫ってくるのでした。同時に、キャンプの入り口に目をやると抗議行動に際の黒い煙の煤がついた監視塔も上からめることができました。東エルサレムに位置するシュファット難民キャンプは、ことがある

写真 17 ゴラン高原アラブ人権センターの事務所で、代表の弁護士・カラマ氏と



写真 18 シュファット難民キャンプに新設されたタカムル・メデイカルセンター



写真 19 シュファット難民キャンプを囲む分離壁





写真20 メディカルセンターから記念品が贈られた

とイスラエル軍が侵入してくるところなのです。(写真19)

診療の一方で、細川先生と山村さんが国連UNRWA診療所内の壁に、斎藤育さんが子供たちと作成した『平和の手形』の展示に出かけてくれました。もう6年以上も継続している、平和を求める子ども支援活動なのです。

本日の診療が終わると、パレスチナではどこでも昼食が用意されます。と・・・その時、メディカルセンターの設立者から私と「奉仕団」に記念となるモニュメントの送呈が待っていました。(写真20)感謝・感激です!!!パレスチナ難民の皆さんの「心」が私たちに届けられたように感じました。イスラエルからの差別と弾圧の中でも他者への思いやりを忘れずにいるこの広くて深い思いやりがどこから養われてくるのか・・・私自身には宿題が与えられたような気がして、今日のシュファット難民キャンプを後にしたのでした。

8月21日(日)

本日も快晴のエルサレムです。本日は、サリム先生と二人でジェリ市の近くにあるベドウィン族が住むアユジャ村へ無料検診に出かけることになっています。

ジェリコといえば、2011年1月に私たち医療奉仕団が初めてパレスチナで医療活動をはじめた街です。

また、そこで副所長をされていたの

がサリム先生でした。また、私たちが使用していたアパートも残っておりあらためて活動を開始した原点をかみしめながらの行程でした。

ジェリコといえば1万年前に歴史上初めて作られた都市なのですが、その発祥地がエンスルターンという地区です。

まさに歴史的遺産の中を通り抜けて、本日の無料診療を行うアユジャ地区に到着・・・ジェリコ市からは15kmの地点で、人口が約100名でした。(写真21)

住民からのお話では、ここでもイスラエル軍と入植者による侵略が続いていました。水は、イスラエル企業が掘に掘って井戸水を枯らしてしまう。現在の水の購入価格は2ガロン(約8ℓ)で40シェケル(1,500円)、近くに水が流れているにイスラエルからの規制のため使えません。

また、入植地の拡大でベドウィンの土地が狭められ、生活の糧である羊やヤギの食糧が減少し、ついには死亡＝生活手段の消失へと繋がっているのが現状です。

また、数か月に一度はイスラエル軍と入植者による家屋破壊が行われているのです。

こうした負の連鎖がベドウィンの貧困化を加速しているのです。

診療が始まると、村中から大人や子供たちがやってきます。ほとんどは体



写真21 ジェリコにある灼熱のアユジャ地区、ベドウィン集落である

の使い過ぎ・・・といってもそれが彼らの生活なのです。特徴的だったのは、1日150匹のヤギの乳しぼり自分で手で行う若いお母さんでした。こうしたことが生活実態なのです。

また、半数の子供たちは裸足ですし、簡単なけが人出てもしかるべきでした。

診療の横で集まった子供たちに絵をかくてもらいました。各人思い思いの絵を描いていましたが、一人の女子がパレスチナの旗とイスラエルの旗を描き、その後イスラエルの旗を描いた絵



写真22 絵画教室でイスラエルの旗を描き、それを破る少女

をビリビリ破り、別の女子がそれを踏みつけていました。それを見ると子供の心の底までイスラエルへの憎しみを醸成させるほどのイスラエルによる軍事支配の酷さを感じさせられました。

(写真22)

気温を聞くと40度、額から汗がだらだら流れ目に入ります。こうした灼熱下での診療経験はあまりありませんが、これがベドウインの人たちの生活環境なのです。来年もここに来ることを心に語りかけて、ベドウインの村を後にしたのでした。

8月23日（火）

今日は、「第14次支援活動」の中で、2回目のガザ入域です。

私の他、清末愛砂先生、清末国夫氏、相澤依里看護師、山村順子女史の総勢5名です。

朝8時に国連UNRWAのワゴン車で、一路ガザへの入域地点であるエレズへ向かいました。入域方法は前回と変化があり、ガザ側でも私の荷物を調べられました。中に入っていた小型デジカメと風邪薬のチェックを受けたのです。これまで、ガザ側でこうしたことはありませんでした。先日のイスラエル軍によるガザ攻撃後でありハマス政権の緊張感が伝わってきます。

そのまま、UNRWが運営するサブラ診療所へ直行しました。そこで待つ

ていてくれたのは、院長先生とリハビリスタッフでした。院長の率直で詳しい診療所の状況説明が行われました。人口7,000名を超える難民キャンプですが、2年前に改築されて清潔感あふれる診療所となっていました。案内されたリハビリ部門には、理学療法士と作業療法士など10人がカーテンで区切られた12か所の診療ブースに分けられ様々なリハビリが行われていました。また、30分に5名程度の患者さんを予約制で行い、待ち時間短縮はもとよりコロナ禍の中で、患者さん同士の距離を確保することを実践していました。

(写真23)

ガザ地区には子どもが大変多く、この診療所にも小児整形外科の子供が来ています。特に目についたのは分娩麻痺で、出産に伴い一側上肢の麻痺が残るものです。そのほとんどがリハビリで経過を見るのですが、彼らは電気刺激を加えて筋萎縮を予防したり、さまざまな取り組みに挑戦していました。ここのリハビリ部門には、そもそも他の病院で手術を受けた後のリハビリを施行しているのも特徴です。ある左膝前十字靭帯断裂の手術後でリハビリ中の若者に会いました。手術を受けた病院を聞くと「ヨーロッパガザ病院の膝専門・ガッサン先生です」とのこと。ガッサン先生は、私が2018年にその病院に手術支援に行きその時同じ医師チームで働いた大変優秀な先生

でした。

次に訪れたのは、リハビリ専門病院のワッフア病院です。4年前も短時間立ち寄りしましたが今回は、以前から子供の診療を依頼されていたのです。

(写真24)

ここも湾岸諸国の支援で病院がリニューアルしましたが、一方で2021年5月にあったイスラエル軍のガザ攻撃で病院の一部が破壊されたのです。

(実は、もっと以前にも同様な爆撃の被害を受けていたのですが・・・)

にもかかわらず、そこから立ち上がってくるガザの医療関係者たちの「不屈さ」を感じました。

男女各50床の病院です。イスラム社会では、病棟を分けるのに男性・女性という分け方をします。この100人の患者さんを一緒に丁寧な回診をしてくださいました。(写真25)脳血管障害や認知症の患者さんをリハビリスタッフも総出で診療にあたっていますが、医師たちは褥瘡の発生に悩んでいました。しかし、私たちのチームの相澤看護師さんからは、処置とケアの方法への意見も出され、私も同感でした。(相澤さんのレポートを参照してください)

高齢者の多い病院で20歳代の若い頭部外傷とその後の手術で重症麻痺と意識障害の若者に会いました。昨年5月に行われたイスラエルによるガザ攻撃

写真 23 SABRA 診療所のリハビリ



写真 24 ワッフア病院で魚鱗症の子供の診療カルセンター



写真 25 ワッフア病院での回診・議論





写真 26 2021年5月のガザ侵攻で頭部を受傷し、意識が混濁しているパレスチナ青年

で受傷し、頭部の手術で一命をすくわれたものの重度の麻痺と意識障害があるのです。その攻撃を受けた時に、彼以外奥様と二人の子供たちは、「爆弾で体がばらばらに飛び散り、拾い集めた」との状況を付き添いをしていたお母さんが必死に私たちに訴えてきたのです。(写真26)

イスラエルによる「天井のない監獄」であるガザ地区に攻撃することは、「戦争の不条理」とでも言わなければならない結果を残し、引きずってゆくのだとつくづく胸に突き刺さってくるのでした。一人の命が奪われ、家族が崩壊し、明日への希望も失せてしまう……そして、ガザ地区の人々の自由と人権を破壊してゆく……こうしたことは、ウクライナ以外でもアフガニスタンやシリア、ミャンマーやイエメンでも……

そして、1億人を突破した世界の難民問題に立ち向かい「決して、どこも見捨てない」姿勢をより一層強くして「パレスチナ難民支援活動」を一步、一步進めてゆく気持ちが熱く体の中に湧き上がるのを感じました。

8月24日(水)

今日は、第2回ガザ地区での活動の二日目です。朝8:00に宿舎を出発し、ガザ地区の南端のラファ市にある国連UNRWAが運営する診療所に向かいました。ラファ地区は、イスラエルから



写真 27 ガザ地区・ラファ診療所デ向カotte左ガ院長、右ガムハンマド看護師サン

の軍事侵攻があるときに必ず激しい爆撃を受けてきました。2週間前の爆撃時にも10名が殺害されましたのです。また、このクリニックがエジプトとの国境から200mしかなく、いわば「国境の町」となっているのです。ラファ診療所は人口90,000人を超える難民患者さんを診ているのです。

その時院長室に屈強な男性看護師さんが現れ「Dr. NEKOZUKAを知っている」と……、とっさに私もこれまでのガザ地区とラファでの記憶を大急ぎでたどりました。「2014年……」と言われた私の頭に鮮明に記憶が戻されたのです。2014年にラファを訪れた時、地元の病院の先生たちがガザとエジプトとの国境地帯にまで案内してくれたのでした。その時、ハマス兵士とともに車を出していただき、エジプト当局に海水注入で破壊された地下トンネルの残骸まで見せてくれたのでした。

その男性看護師さんの名はムハンマドさん、お互いにハグを交わし再会の嬉しさを表現しあったのです。(写真27)

その院長が、私を3人の常勤医師に合わせてからリハビリ室に案内してくれました。ここのリハビリも予約システムが導入されて、患者さんが密にならないようにスムーズな流れで診療が個別的に進められていました。しか



写真 28 ラファ診療所での診察

し、受診されるのは腰痛や外傷後の手術患者さんです。もちろん、出生数の多いガザ地区では先天性疾患の子供たちも受診します。

個々の職員の皆様に質問すると、疾患の理解や治療内容の議論が大いに深まりました。そして、彼ら自身もが大いに勉強していると感じました。(写真28)

その後、子ども支援活動としてThe Palestinian House Associationで、清末先生が中心となり、幼稚園の生徒に絵画による交流を行いました。前述したラファクリニックでも同様の子ども支援活動が行われました。その時には臨床心理士の方も最後まで参加し、子供の心理状態の把握などを次回の検討課題としなければならないと思いました。

夕食後、明日の子供支援活動に備えて、折鶴を50個、兜づくりの練習をして明日に備えて、ベッドに潜り込むのでした。

8月25日(木)

今日は、ガザから出域する日ですが……清末先生の発案で、昨夜遅くまでメンバーにより翌日に予定されている子ども支援活動に向けて「折鶴」の作成と北海道から持参した新聞紙を利用した「兜」の作り方を再確認しました。さー、今次ガザ地区での活動の最終日です。



写真29 ジャバリア診療所リハビリ部門で

午前10時のガザからの出域を逆算して、いつもより30分早くから行動開始、7時45分の宿舎発です。

場所は、ガザ地区北部にある人口10万人を超すジャバリア難民キャンプです。大きな診療所で、1日の外来患者さんは1,000人、出産・小児から成人・老人までこの難民化キャンプの健康を一手に引き受けているのです。

この日は私と相澤看護師さんがリハビリでコンサルテーション、清末先生、国夫さん、山村さんが子供支援活動です。ガザの出域時間の関係で、10:00までの活動でした。

診療は、理学療法士の方が前回ガザ中南部のハンユニスの診療所で一緒に仕事した中でした。子どもの骨折や若者の膝痛など様々なリハビリ患者さんについて相談を受けました。やはり診療場面では看護師さんの存在感が大切です。特にイスラム社会では、女性

や子供の診察には女性看護師さんのかかわりが重要なのです。初対面のパレスチナの患者さんとの間での信頼関係の構築にも看護師さんの役割が大きいのです。（日本でも同じです!!!）

（写真29）

一方、診療所の廊下で行っていたORIGAMI（折り紙）が大好評でした。正方形に採型した新聞紙で作られた「兜」は、好評です。すべてに人々が家に持って帰りました。新聞紙は日本語で書かれた北海道新聞で、核兵器に関する見出しが大きく載っていました。（写真30）

パレスチナでは、学校以外でのこうした支援活動には「お土産」が必要との意見がありました。そのために地元のお菓子や鉛筆などをあたえていました。しかし、私達「医療奉仕団」の基本理念として「お金やものではなく、人と技術による支援」を掲げて、この11年間活動してきました。今回も前夜に「折り鶴」を手分けして作り、子どものみならず当日参加したすべての人々に手渡したのです。効果が絶大で、多くの人々に喜んでいただきました。やはりこれからは、日本語で書かれた新聞紙の使用や国際的に認知されている「折り鶴」を日本の皆様にもお手伝い願ひ、パレスチナに持参したいと考えています。

無事、エルサレムに帰ってきた後、日本のメディアの方と懇談し「奉仕団」のこれまでの活動やパレスチナの実況の変化について意見交換をいたし

ました。静かで思慮深い青年記者と話している中で、これまでの私達の活動を総括しながら、これからの長い計画の中で一つ一つの事柄を大切にしていかなければならないことを学んだのでした。

8月26日（金）

今日は、6時間の時差がある日本～パレスチナを繋いでオンライン「現地報告会」を開催し、日本から参加者が90名を超えました。「医療奉仕団」のメンバーである香山リカ先生の爽やかな司会で、今回の活動に参加している8名の中から6名のメンバーから発言がありました。（写真31）

今回の参加メンバーで最も若い植村和平先生が淡々と初体験の感想が述べられていました。特に、「奉仕団」がこれまで10年以上継続してきたことの「重み」を実際の診療の中から感じ取っていました。

清末先生と斎藤育先生からは、子ども支援活動についての報告です。他のメンバーとも協力して折り紙や折り鶴を準備し、持参した北海道新聞を正方形に裁断して『兜』作成し地元の子供たちはもとより大人の方々からも大歓迎でした。2015年に行われた第6次支援活動から斎藤育先生が得意のアラビア語を駆使してパレスチナの子供たちの心をワシづ掴みしたのです。その後、清末先生が絵画を通した子ども支援へも拡大し、現在に至っています。

軍事支配と15年も封鎖が続くガザ地区では、大人はもとより子供たちの精神的抑圧が強制され、若者の自殺へと進む悲惨な事態を引き起こしているのです。そうした幼少児に対する支援も芸術を通して少しでも平和を想像し希求する子供たちを育てる手助けになればと考えています。同時に細川先生がバレーボールをはじめ各種のスポーツを通して身体的・精神的成長への手助けを始めてきました。こうした活動は、私たちの志ひとつで取り組むことができるものとか考えています。



写真30 持参した北海道新聞紙で作られた兜の折り紙



写真31 現地のオンライン報告会



写真 32 パレスチナンの家屋に入り込むイスラエル入植者

パレスチナでの経験が豊富で、アラビア語・英語を駆使して地元パレスチナに多くの友人とのつながりを持つ山村順子さんが現在のパレスチナの置かれている状況を的確に語ってくれました。

ご質問にもありましたが、この12年間のパレスチナの現状の変化にも触れています。私も感じるのですが、西岸では入植者の横暴がより陰湿に凶暴になっていることです。

例えば、エルサレムにおける家屋破壊と入植地の増大・・・地域を歩くと同じ建物でも表がパレスチナ人の家の入口、裏がユダヤ人に奪われた分の入り口など複雑に入り組んで入植地はパレスチナ人の地域に入り込む＝浸潤してくるのです。ちょうど癌が周りの臓器組織に浸潤しているかの様です。

(写真32)

私たちの活動中にイスラエル国内の7つのパレスチナ人の人権団体に代表者の出頭とさもなくば団体の解散命令が出されました。イスラエル当局がイスラエル国民に対してです!!! こうしたイスラエル・シオニスト政権が始めた自国民への弾圧は、軍事・侵略国家としての様相を露骨に現しつつあるのです。戦前の日本の天皇制政権が取ってきた「侵略のための国内弾圧」とイスラエルの「侵略、パレスチナ弾



写真 34 ヘブロン旧市街地の通路を覆う金網に入植者からのごみが捨てられている

圧・支配国家」への道が重なって見えにくくなるのです。

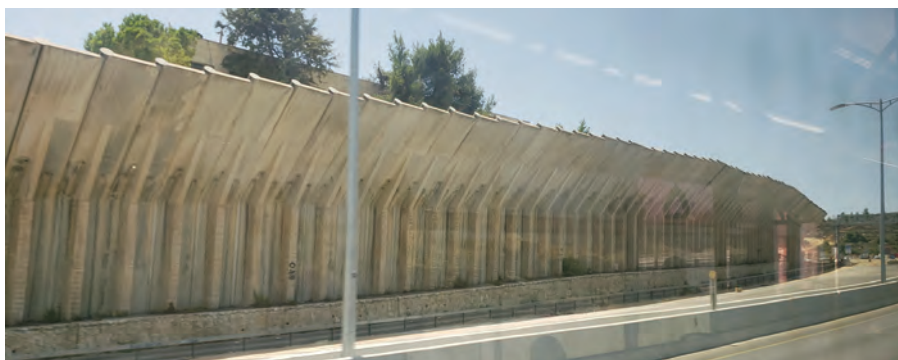
また、ヨルダン川西岸に外国からの入国をさせないなどの意見がイスラエルの中から勃興させえています。こうしてパレスチナの実態を外国の目からも見えなくすることを許したら、封鎖が続くガザ地区とあわせて暗黒のパレスチナになってしまうのです。

こうした歴史上これまでになかったイスラエルの野蛮な政策や国家政策に対して、国際的にも抗議の声を強めたいと思います。この場を借りて、皆様にもご協力をお願いする次第です。

なお、報告会の内容は、YouTubeにアップしましたのでご視聴ください。

<https://youtu.be/VRNeAVOJOrs>

写真 33 続く巨大分離壁



8月27日（土）

昨日の「現地報告会」に引き続き、今日は「第63回日本社会医学学会」への報告の日なのです。Wifi環境の良い American Colony Hotelのロビーをお借りして、オンライン報告となりました。こうした海外からの学会報告は初めての経験ですので、報告中にwifiが切れてはいけないなどと心配しながらの報告でした。報告を終えての質疑では、静岡の天笠先生から『子供の不安を緩和するために、ハグと手によるタッピングが有効である』との意見をいただきました。また、支援活動での資金についての質問がありました。私たちは、医療関係者と市民の皆様からの募金とメンバーの自己負担から成り立っていることを説明しました。（抄録の添付参照）

12:00に旧市街ダマスカス門に集合し、公共交通機関を利用してベツレヘム経由でヘブロンへ・・・途中、入植地や強大な分離壁に迫られながら、且つ又交通渋滞に会いながらなんとかヘブロン旧市街地へ着きました。（写真33）

ヘブロン旧市街地の市場（スーク）は、相変わらずの賑わいです。日用雑貨から洋服まで売られています。我々も声をかけられますが、ここはあくまでも見学して目指すシュハダ通りです。ここの建物のほぼ2階以上は、イスラエルの入植者にパレスチナ人が追い出され、占領されているのです。スークの通りの上に張られている金網には、2階以上に占拠する入植者が投

げつける空き瓶やごみが散乱しています。ここでもイスラエルによる占領の実態が見て取れました。さらに進んでゆくとイスラエル軍の監視所が現れます。そこには重武装のイスラエル兵が私たちを監視しているのです。(写真34)

ちょうどその監視所の前にお土産屋さんが数日前に入植者による焼き討ちにあったのです。そのお店は、近くに住むパレスチナ人が自作の民芸品などを持ち寄っていた共同販売所でした。従って、その店の焼き討ちによるパレスチナ人へのダメージに大きなものがありました。こうして、入植者の暴力支配は以前よりも進行しているように感じました。

ここを見ていると、ちょうどサリム先生親子に遭遇。実は、先日8月13日に南ヘブロンで訪問したハルーンさんがその後、病院に運ばれて下腿切断術を受けたとの連絡がありました。主治医はおそらく「敗血症」の危惧を抱いたのかもしれませんが。その後、サリム先生がハルーンさんへギヤージベット(上半身が起き上げることができるベッド)と応急処置に必要な医療セットを届けた帰りだったそうです。昨日から「できればヘブロンで会おう」と連絡を取りあっていましたが、こうした形でお会いできるとは・・・奇跡的でした。

さて、スークでいつもの婦人運動団体のお店でお土産を購入し、さらに旧市街を進むとイスラエル軍の検問所が待っていました。いつもの回転ドアを

通り抜けてゆくと目的の「シュハダ通り」に入ります。ここは、以前旧市街の中の繁華街でしたが、入植者の通り道となるため、イスラエル軍により「無人の市街地」にされてしまったのです。通りに面した入り口は、すべて鉄製ドアで閉鎖され窓は金網を張られまったく通りへ出ることはできません。この無人の通りに出降り口と中ほどには、イスラエル兵が歩哨として私たちをチェックしているのです。(写真35)

私たちの行き先は、ここでパレスチナの解放を平和的に戦っているイッサ・アムロが主催するYAS (Youth against settlement) の事務所です。そこに上がるとする階段の入り口にもイスラエル兵の検問所があるのです。私たちはパスポートのチェックを受けて事務所への坂道を上るのです。その事務所の周りにも入植地があり、イスラエル軍の監視所も隣接しているのです。

約3年ぶりに再会したイッサ氏は、お元気な様子です。早速、ヘブロンの状況を尋ねると、予想通りイスラエル軍の入植者とそれを守るためのイスラエル軍の横暴が続いているとのことでした。確かに、彼の事務所への出入りに際して監視所のイスラエル兵は、これまでないほどしつこく聞いてくるのでした。

腰痛と肩こり続くイッサ氏にマッサージが施され、いつときの安らぎを感じてもらいました。その時イッサ氏が用意していたのは、大きなパレスチ

ナ国旗だったのです。最初に彼とお会いしたのは、2011年1月にヘブロンの国立病院でした。パレスチナ医療支援を目指して、パレスチナ内の10か所の病院・診療所を巡り歩いていた時です。超多忙だったイッサ氏は、風のごとく現れ簡単な挨拶を交わしただけでした。その後、パレスチナへ行くたびに、必ずヘブロンとイッサ氏を訪ね入植者とイスラエル軍の弾圧とヘブロンを中心としたヨルダン川西岸・南部の状況を把握してきたのです。(写真36)

(そのイッサ氏から昨日私にメールをいただき、腰部椎間板ヘルニアの診断で手術を勧められ、その判断を求めてきました。当日の様子では、手術治療を選択しなければならない症状ではないかと判断していたのですが・・・)

エルサレムへの帰り道は、ベツレヘムの検問所を通過しなければなりません。ここは、前回と違い、検問自体がデジタル化しておりパスポートを所定の機器にかざすだけで、通行許可が出されたのです。しかし、これがパレスチナ人への対応になるところも容易だとは思いませんでした。

8月28日(日)

本日は、ヨルダン川西岸で特にイスラエル人による入植活動とイスラエル軍による弾圧の激しいヨルダン溪谷への視察です。これには、シュファット難民キャンプで活躍しているサリム先生からの同行の希望もあり一緒に行動

写真35 ヘブロン・入植者専用となり無人となったシュハダ通り



写真36 ヘブロン・イッサ氏からパレスチナ国旗を受ける



することになりました。

サリム先生は、1昨年にUNRWAの診療所所長を定年退職し、以前からかかわっていたエルサレム慈善協会の理事長として、シュファット難民キャンプのみならず、西岸全域を対象に難民支援活動の力を注ぎ始めました。今回の支援活動でもこれまでの活動範囲から大きく広がり、さまざまな難民キャンプにあるコミュニティセンターを中心に診療活動が展開されています。また、難民キャンプ以外にも民間のメディカルセンターにも出向いて診療活動の場を確保してくれました。

先日のゴラン高原にまで運んでくれたパレスチナ人が運転するワゴン車で、ヨルダン川渓谷をジェリコから国道90号線を北上するのです。途中、サリム先生の案内でヨルダン川を挟んで、パレスチナとヨルダンが最も接近する場所に立ち寄りました。その幅が10mもなく、ヨルダン側の人々と目を合わせることができる距離なのです。ここはキリスト教教会の敷地で、イスラエル兵が一人自動小銃を抱えて監視していましたが比較的平穏な環境でした。

この辺りは、死海が近く標高マイナス300mを超えて、朝から猛烈な暑さです。午前9時過ぎから既に気温が40℃となっているのです。水と太陽光を遮る帽子が必須なのがよくわかりました。

国道90号線を北上し、待ち合わせていたラシッド氏とお会いして渓谷の視

察の始まりです。途中、ヨルダン川の対岸にはヨルダンの家々が見える距離のところもありました。また、広い河川敷には電流の通った金網で囲まれているイスラエル空軍基地が垣間見えるのです。

私たちが初めてラシッド氏に会ったのは、2014年でした。その頃は、ヨルダン渓谷連帯

(Jordan Valley Solidarity)

<https://jvsj.wordpress.com/jvs/>

の一員として、私たちをヨルダン渓谷を案内していただきました。しかし、2019年3月に再度訪問した時には、渓谷の連帯運動のリーダーとして大きく成長していたのを鮮明に覚えています。そして、今回の訪問でした。前回は建設中であったJVSの事務所が完成しており、最近のヨルダン渓谷の状況のレクチャーが始まりました。

彼らの運動は、「To Exist is To Resist」(存在することが抵抗すること)のスローガンにあらわされるようにあくまでも平和的な抵抗運動です。

ここヨルダン渓谷は、ヨルダン川の水と降り注ぐ太陽光で農業に最適な土地です。その渓谷ではイスラエルが、パレスチナ人から水を収奪し、入植活動で土地そのものを略奪してきました。それに対して、イスラエルによる家屋破壊などに抗して存在し続けているのです。彼らが主張する「Water is Life」のスローガンも水の確保に苦悩する様子をうかがうことができまし

た。(写真37)

水といえば、アフガニスタンで干ばつが進む中で砂漠を緑の大地に変えた中村哲先生の姿が頭浮かびました。人間が生きてゆくうえで「水」の存在がいかに大切なのかは国境を越えて普遍的な課題であることをあらためて考えるのでした。

レクチャーの途中にパレスチナのメディアからの取材の収録があり、渓谷で戦い続けるラシッド氏たちJVSの存在感を強く感じました。

その後、ベドウィン集落に案内していただきました。ここでも水が制限され自ら居住する土地の地下から採取された水をイスラエルの水会社から購入せざるを得ない大きな矛盾に直面していました。この集落を見下ろす形で丘の上にはイスラエル軍の監視所があるのです。ここでも、集落の子供たちに呼びかけて絵画による「子ども支援活動」が開催され、10数名の子供たちの歓声が上がっていました。(写真38)

帰り道に運転手として渓谷を案内してくれた方にイスラエルの横暴を表す2か所を案内していただきました。

一つ目は、エルサレム郊外で彼が所有しているオリーブ畑がイスラエルによって何度も急襲されオリーブの木は伐採にあっているところです。その理由は、近くに国立公園の建設が予定されているということでした。日本で

写真 37 ヨルダン渓谷・渓谷連帯委員会のラシッド氏(中央)とともに



写真 38 ヨルダン渓谷・子ども支援活動





写真39 エルサレム郊外でイスラエルにより破壊されるパレスチナ人のオリーブ畑 写真40 イスラエル軍により破壊されたパレスチナ人の結婚式場跡

は考えられない当局の暴力的方法です。仮に必要なとしても市土地の所有者との話し合いが必要なことは自明のことです。しかし、イスラエルの軍事支配が続く西岸と東エルサレムでは、こうしたイスラエルの横暴が日常茶飯事なのです。彼は、オリーブの木が引き抜かれた後にまた、オリーブの木を植えてゆく・・・何度でも何度でも。今回私たちは、そのうえられたばかりの苗木に水を与えることを手伝わさせていただきました。(写真39)

二つ目は、さらに東エルサレムへ戻ってゆくと地域の結婚式場と会議場を兼ねた会館が1週間前に突然イスラエル軍がやってきて破壊されていた現場でした。その理由は、その近くに入植地ができたとか・・・確かに道路を挟んだ高台の入植地に家の新築が進んでいたのです。(写真40)

写真41 カランディア検問所



8月29日(月)

本日で「第14次支援活動」での診療活動がすべて終了の予定です。

以前から最終日はカランディア難民キャンプでの活動であることはサリム先生からお聞きしていました。

カランディアといえば、その検問所が嚴重であることは国際的にも有名です。私たちは、毎回の支援活動で何度も通過せざるを得ませんでした。特にピリン村への往復やラマラー・ヘブロン、ジェニンでの活動では必ず通るのです。最近はデジタル化しているとはいえやはり緊張感が増します。一度、イスラエル軍がパレスチナ人へ自動小銃を水平撃ちしている中をパレスチナ人が運転する車で走り抜けたこともありました。

こうしてパレスチナとイスラエルの緊張関係が激しいのは、このカランディア検問所がパレスチナ自治政府のある首都ラマラーとエルサレムの間にあるからなのです。

(写真41)

こうしたカランディア難民キャンプでの支援活動ですので自然に気持ちに緊張感が走ります。コミュニ

ティーセンターの3階に準備されていた会場は、既に待合スペースが準備されていて、以前から本日の診療活動が宣伝・組織化されていたことをうかがわせました。(写真42)

いつもと同じように、腰痛・ひざ痛・肩こり・手のしびれなどが圧倒的でしたが、中には障害を持った子供たちも親御さんとともに受診されました。その中には脳性麻痺や外反足、神経難病、歩行障害を来している子どもたちでした。一方、イスラエル軍から受けた銃創のある患者さんも・・・9:30から15:00までに78名の患者さんの診察でした。その間、サリム先生をはじめ難民キャンプ・コミュニティーセンターの幹部職員の方々がアラビア語～英語の通訳を買って出てくれたのでした。また、日本のメディアからの取材もあり、こうした診療現場を直接見た経験がなかったとのことで、私たちの活動への理解を進めていただきました。(写真43)

診療の一方、待合スペースでは折り紙や絵画での子ども支援が進められ、子供たちはもとより診療に来ていた大人の人々の参加で盛況でありました。

コミュニティーセンターの方々と遅い昼食を一緒に、次回の支援活動を約束してカランディア難民キャンプを後にしました。(写真44)

(メンバーの一人が右肩痛を発症し、夜間痛もあり結晶誘発性肩峰下滑



写真 42 カランディア難民キャンプでの診療・待合室の関jさんたち

液包炎（SUS）で注射療法を選択し、サリム先生が消毒薬・薬剤・注射器・注射針を薬局で購入してくれました）
夕食は、今次の後半での活動の反省を語り合いながらの夜でした。

8月30日（日）

さて、番外編として1）パレスチナでのコロナ事情と2）ウクライナ戦争について述べます。

1）パレスチナでのコロナ事情

今回の行程で、乗り継ぎのあったドバイ空港では半数の人々がマスクをしていました。しかし、イスラエルの玄関口・ベングリオン空港に降り立つとマスクをしている人々はほとんど見かけなくなりました。

パレスチナに入国後でも街で行き交う人々にもマスクなしです。診療現場でも患者さんはマスクなし、医療者の側では各自の判断でマスクONでした。もちろん、私たちは診療現場では

極力マスクをONにして診療、対話を進めました。

しかし、夏で40°Cを超える環境で常にマスクをする大変さも体験することができました。特に、ヨルダン溪谷やベドウィン集落での診療ではテント内の風通しも良くなく額から汗が噴き出す中での活動でした。

また、現地のイスラエルの病院のコロナ病棟で働く医師からもお話を聞くことができました。彼の話では、コロナに感染してもほとんど気にせず、症状が悪化したらコロナ病棟に入院し、治る患者さんはいいが、重症患者さんは厳しいです。」ということでした。

私は、コロナ感染における日本とパレスチナでの対応の違いの要因に、暑さという自然環境の下に

①中東・欧米と日本における「死生観」の違いを感じました。多少極端ですが、助かる者は助かり、死ぬのは死ぬと彼らは割り切っているのではないのでしょうか。そして、死を超えて神の御許に召されると祈るのかもしれませんが、ですから、自分の責任で感染を判断する、予後も自分で判断する社会になっていくものと思います。

②軍事占領下の西岸と戦乱が続くガ



写真 44 カランディア難民キャンプでのコミュニティーセンターのスタッフと



写真 43 カランディア難民キャンプでの診療活動

ザ地区では、コロナ感染予防よりも日々の生活や明日への命を優先する気風が勝るときがあるかもしれません。

この①と②が合わさってノーマスクの社会になっているのではないのでしょうか。特にキリスト教やイスラム社会での死生観との関係は、仏教が支配的な日本社会とは違うように感じました。

2) ウクライナ戦争

一方、パレスチナでの支援活動の前後もウクライナで起きているロシアの侵略戦争は、

ここヨルダン川西岸と東エルサレムにおけるイスラエルの軍事支配とガザ地区の軍事侵攻により多くのパレスチナ難民が虐殺されている現実を多くの点で共通性を指摘することができます。多少、飛躍するかもしれませんがウクライナを明日のパレスチナとしないためにこれらの点を今一度確認することが必要と考えました。

①国連憲章と国際法違反があること

です

ロシアによるウクライナへの武力侵略と南部4州の「ロシア化」は、パレスチナにおけるイスラエルの軍事占領、「入植地」と650Kmにわたる分離壁の建設、ガザ地区の完全封鎖と定期的軍事侵攻を思い出させます。

②軍事専制主義国家が隣国への侵略を進めています。

ギリシャ正教とつながるロシアのプーチン独裁体制下での反戦への言論封殺は、侵略戦争の推進の手段のひとつとなっています。イスラエルにおいてもユダヤ教シオニズムをよりどころにパレスチナ人への弾圧、人権侵害を容易なものにしています。

③市民社会への無差別攻撃とインフラ破壊

ウクライナでは全土でロシアによる病院・学校・住居やライフラインの破壊が進行しています。その様子は、定期的に繰り返されるイスラエルによるガザ地区への軍事侵攻で見ることができます。空爆やミサイル攻撃で市民、子ども、女性たちが大きな犠牲を負っています。

④戦争下での非人道的行為の横行

ウクライナでは、ロシアの侵略時に非人道的な虐殺や略奪などが伝えられています。同様なことがイスラエルにより西岸や特にガザ地区において行わ

れています。また、イスラエルは、ガザ侵攻を新しい兵器の実験場としてきました。

⑤核兵器使用を脅し的手段として「活用」

ロシアの核兵器使用と原発の標的化は、核抑止論の破綻と核兵器の危険性の次元を一気に引き上げました。イスラエルの核政策は、NCND (Neither Confirm Nor Deny) 政策です。実際には、ネゲブ砂漠に核兵器製作工場の存在は疑われているのです。

⑥頭をもたげる「どっちもどっち論」

ウクライナ戦争の当初からロシアと同時にウクライナも戦争するなどといった主張が見られます。パレスチナ・イスラエル問題では、これがイスラエルによる侵略的建国が原点であるにもかかわらず、それをイスラム教とユダヤ教の宗教対立へと本質を覆い隠す意味と同類なのです。

⑦両国内の反戦・反占領の世論と運動、PTSD (心的外傷後ストレス障害) の進行。

ロシアでは、侵略戦争開始前後から国内の反戦運動と世論が高揚しましたがプーチン独裁政権下で断され、予備役の徴兵が始まってから若者たちの国外脱出が続いています。パレスチナでもイスラエル社会の中から占領反対の世論が僅かではあるが増加しています。元将兵によるNGO「沈黙を破る」の活動は、それを紹介した土井敏邦監督の映画「沈黙を破る～part 2～愛国の告発」の中で詳細に述べられている。また、ガザ地で蓄積された「戦争・暴力・貧困ストレス」により発生したComplex PTSD (複雑性心的外傷後ストレス障害) は、ウクライナにおいてはPTSDの将来像として注意しておかなければなりません。

(ねこづか よしお)



パレスチナ人から投げかけられる 問いに向きあおうとすること

(室蘭工業大学大学院教授) 清末 愛砂

この構造そのものに挑戦せずに、パレスチナに
どうかかわることができるのか

途についた。

2. DVにおける非対称性から考 える

2泊3日で滞在したガザでの出張アトリエ活動を終え、東エルサレムに向かっている最中にふと頭に浮かんだものがあつた。それは、イスラエルによる苛酷な封鎖を強いられているガザとイスラエルとの関係性がDVの加害者と被害者の関係性に非常に酷似している、という、ひとつの気づきであつた。

DVは、簡単に書くと、配偶者間のような私的領域における親密な関係で起きる暴力のことをいう。その形態は身体的暴力に限られず、経済的暴力や精神的暴力も含まれる。DVや児童虐待を含むファミリーバイオレンスや職場でのハラスメントなどの暴力は、基本的に加害者が被害者との間にある権力関係を利用して加えられるものである。言い換えれば、加害者と被害者との間にある非対称性から、優位に立つ者が相手をさまざまな方法・形態で支配し、追い込んでいくことを意味す

1. 3年ぶりの訪問と焦燥感・絶 望感

2019年秋以来、約3年ぶりに訪問したパレスチナ。わたしは2000年以来、何度も現地訪問をし、占領下の状況を<観察>したり、現地で非暴力による抵抗運動にかかわったりしてきた。これらを通して、たくさんのいわゆる「悲惨な」状況を目にし、その状況をもたらす諸々の要因と構造を自分なりに見定めようとしてきた。法学研究者の一人として、イスラエルの占領そのものや、その継続のための数々の占領政策が国際法上の違法行為であると指摘することは、それほど難しいわけではない。事実、多くの論文や書籍、報告書などでそのことは指摘されている。そうであるにもかかわらず、なぜ占領が長期間にわたって継続し、国際法違反という指摘が無視され続けてきたのか。単純に違法な占領が継続されているわけではない。継続を通してそれが固定化されるだけでなく、それを終結させにくくする、または占領下にいるパレスチナ人に抗いにくくさせる構造が実に巧妙に構築され続けてきたというのが、現実の姿だろう。

今回の9日間という短い現地滞在を終えたあと、わたしは過去22年におよぶ定点観測の中で、かつて感じたことがないほどの焦燥感と絶望感を抱いた。前回の訪問から3年近い月日が経つなかで、①ヨルダン川西岸地区のイスラエルへの<事実上の併合>、および②封鎖・包囲を手段とする窒息作戦によるガザの人々の追い込みが格段と進んだこと(抗いがたいほどの深刻

さ)を痛感したからである。

このままだと、抑圧の構造を形作る層が増えるだけでなく、一つひとつの層が膨らんでいく。わたしが書くまでもなく、パレスチナ人はそれを十分すぎるほどわかっているがゆえに、それをこれ以上、一歩たりとも進ませないようにするための抵抗をしている。それに対して、わたしたちはどう動くべきなのか、今後、何をめざしてパレスチナにかかわるのか。わたしが北海道パレスチナ医療奉仕団の中で担当している、子ども支援活動の一環としての出張アトリエは、多重化しているこの抑圧の構造を「斬る」ということに対して、小さくであってもいかなる意味を持ちうるものなのか。焦燥感と絶望感とともに、これらを自問しながら帰



バルダラ村にあるヨルダン渓谷連帯委員会の事務所

る。相手に対する＜支配欲＞はその関係性を固定化する大きな要因になる。また、DV加害者の特徴の一つは、自分の行為に向き合うことをせずに、被害者に責任を転嫁させていくことにある。つまり、被害者の行為に問題があるため、自分はそうせざるを得ないのだというのである。

イスラエルによるパレスチナ占領問題も、すべてではないとはいえ、DVの構造を参考にしながら説明できる点が多々ある。例えば、北海道パレスチナ医療奉仕団が活動をしているガザは、1993年にイスラエルがフェンスにより封鎖を開始して以来、段階的に封鎖が強化されてきた地区である。とりわけ、2006年のパレスチナ評議会選挙でハマースが勝利すると、その「制裁」として人々や生活物資などの出入りが極めて厳しく制限され、事実上の完全封鎖の状態にまで置かれた。開いているのは空のみということから、ガザを「野外監獄」と呼ぶこともあるが、それはあながち間違った表現ではない。このように、人々の移動の自由を否定した上で、イスラエル軍は定期的に軍事攻撃を行う。大規模なものが起きると、海外のメディアは報じるが、「小さな」レベルの攻撃が頻繁に起きているのが現実である。

長年にわたりこのような封鎖や攻撃を行ってきたイスラエルであるが、それらを正当化する理由として、ハマースがロケット弾で攻撃したから、自衛が必要だと主張する。このような責任転嫁は、DV加害者のメンタリティと非常に似ている。相手の責任と言いながら、それを隠れ蓑にして自らの力を誇示し、その支配力を見せつけ、抵抗しても無駄だと思わせようとするのだ。

この論理は、東エルサレムを含むヨルダン川西岸地区での占領施策にも貫かれており、その結果が、現在のようなものはや抗うことが極めて難しいとすら思えるレベルの事実上の併合なのである。それでもなお、パレスチナ人は



ヨルダン川西岸地区の隔離壁

さまざまな方法で抵抗を続ける。

3. パレスチナに向かいあうために

DVの本質は、上述したように非対称性を利用しての「支配」にあるが、その支配の継続を可能にしたのが、悲しいかな、国際社会であった。「和平」という大きな誤解を受けているオスロ合意（1993年から1995年にかけて締結された一連の合意）に基づき、ヨルダン川西岸地区の内部は、パレスチナ自治政府が行政権を有するA地区・B地区（治安権に関しては、A地区はパレスチナ自治政府、B地区はイスラエルが持つ）とC地区（イスラエルが行政権と治安権の双方を持つ）に分けられた。それにより、ヨルダン川西岸地区内部は小さな島々に分断された。物理的な分断は、支配をしやすくするためイスラエルにとって都合がいい。抵抗者が出れば、暗殺を含む弾圧や軍事的措置により対処する。自分たちの力が明らかに優位にあることをわかっているからこそ、この差を利用しておさえつけようとするのである。

パレスチナ人に対するDVの多重な構造、すなわち一言で表したときの占領の加害構造に①国際社会が関わり、そして②イスラエルによる数々の責任転嫁を不問に付してきたという2点において、わたしたち自身の責任が何も問われないということにはならない。この構造そのものに挑戦せずに、パレスチナにどうかかわることができるのか。そのことは、長い間、ずっとパレスチナ人から問われてきたはずだ。この問いを活動の根底に据え、かかわりの意味を丁寧に考え直す。そのことを喫緊の課題の一つとして、各自が向き合っていくことが求められているのではないか。そうすることで、わたしたちの足元である日本、とりわけ北海道での活動と現地での活動の連関性を深めることができるようにもなると感じている。これが、わたしなりの「パレスチナに向かいあう」という基本的な問いに対する、現在までの答えの一つであると考えている。

（きよすえ あいさ）



第14次支援活動報告

細川 佳之

高校生などの若者たちに広げていくことはとても大切な活動の一つになる

今回の第14次支援活動は、新型コロナの影響で2年間の渡航自粛期間を経て行われた。私が主に取り組んできたスポーツ交流にとっては、過去3回は順調に取り組みが進んできた経過もあり、この2年間の空白は非常に残念な期間だった。しかし、何とか支援活動を再開できたことは素晴らしいことだった。とは言え、学校の夏休み期間中に行われたこともあって、学校での活動ができなかったのは残念だった。さらに、イスラエルによるガザ地区への爆撃もあって、当初の計画通りに実施できず、思うようなスポーツ交流ができなかった。その一方で、今までに経験できなかった新しい取り組みができたこともあった。その内容を項目だけ並べて書いておきたい。

- ・南ヘブロンでの支援活動
- ・現地の結婚式に参加
- ・岩のドーム 初めての見学
- ・ユネスコ世界遺産パティール村（古代ローマ時代から今も続く段々畑）の見学
- ・ゴラン高原の視察（後述）

1. スポーツ交流について

今回は以前よりも私の滞在期間が少し長くとれたので、それなりに現地の子どもたちとの交流はできた。中でも、シューファット難民キャンプ内のチャイルドセンターやチャリタブルセンターでの子どもたちとの交流は今まで以上にもつことができた。夏休み期間中ということもあって、午前中に（朝早くから）子どもたちは集まってくる、思い思いに遊んでいた。チャイルドセンターでは日本から持って行ったソフトバレーボールを使って、パスやスパイクの練習ができた。できるかどうかは別として、バレーボールの基本技術を紹介して、それをやってみる機会を提供できたことは良かったのではないかと思った。こうした場での交流は学校の授業ではないので、遊びとしてスポーツを楽しんでもらうのが大きな目的になると考える。（写真①：チャイルドセンターでのバレーボールの様子）

ガザ地区での今回の取り組みは、いつものような学校での活動ができな

かったので、今後の活動に向けて、UNRWA教育局の方たちとの懇談を行った。最初のスポーツ交流からお世話になっているジハーンさんや前回の活動でとてもお世話になった体育のスーパーバイザーであるカリマンさんとも再会できてとても嬉しかった。

（写真②：カリマンさん）

この懇談では、夏休み中にガザ地区で「サマーアクティビティー」が行われていることを知った。この取り組みは学校単位ではなく、地域ごとに子どもたちの参加を募り、スポーツや芸術などの分野の活動を行っている。ガザ地区には30万人の小中学生がいるが、その子どもたちに十分な教育をする施設も時間も無い。校舎が足りないため、1日を2部制にしているのが現状だ。当然授業も限定されるためにできない。この「サマーアクティビティー」の取り組みの狙いは、学校ではできないことを長い夏休みの期間に行うということにある。子どもたちに芸術・スポーツのいろいろな経験をしてもらい、個々人の興味や関心、適性を見つけたいということがあるということだった。こうして話を聞いてみると、この取り組みに私たちも協力することは可能であると思われる。もちろん計画段階からの参加が必要であり、その調整に難しい問題もあるが、新たな試みとしては非常に魅力的であると思う。今後の課題の一つで



写真①：チャイルドセンターでのバレーボールの様子



初めての岩のドーム

ある。

しかし、前回の活動を終えて課題として上がってきたこと ①学校教育との連携 ②スポーツ団体との連携・協力 については、進めることができなかったことが残念だった。

2. スポーツ交流の目的を考える

懇談する中でも感じたことであるが、私たちの活動の目的は何かをはっきりさせることが必要である。当然のことであるが、どんな活動でも目的によって内容は変わっていく。私を中心となって取り組んでいるスポーツ（バレーボール）交流は、何を目的に行うべきなのだろうか。

名前の通り北海道パレスチナ医療奉仕団は、「医療奉仕」（診療活動と運動療法の普及活動など）の活動

が中心の団体である。その活動が第6次支援活動（2015年11月）の「子どもワークショップ」によって活動対象を「難民の子どもを救おう＝save the children」まで広げることになった。具体的には、子ども支援として斎藤育先生を中心に、様々な取り組み（「平和の壁画＝ハトの手形づくり」「折り紙」「歌と踊り」）が行われた。この子ども支援活動の中に「スポーツ交流」が第9次支援活動から加わった。（実際には、第8次活動において、事前の準備が始まった。）私は、そのスポーツ交流の活動の中心にいる。スポーツ交流で私たちは何をしようとしているのだろうか。第8次報告では次のように書かれている。

「スポーツは、互いに尊重し公平なルールの下に種目を競いあうものです。その公平さを尊重するスポー

ツ活動を通して、「ガザ完全封鎖」、弾圧・虐殺などの「イスラエルの不正義」を乗り越えるため、心身共に強く健康なガザの子供たちの成長への手助けが少しでもできればと考えているのです。」

私にとって2回目の参加となった第11次活動の報告で私は次のように書いた。

「今回の支援活動の中で行われたベドウィンの子どもたちとの交流は、私に非常に大きな刺激を与えてくれました。それは、スポーツについての考え方です。最初は「遊び」から始まったものが「スポーツ」へと発展していくということです。ベドウィンの子どもたちの姿から考えたのは、好奇心から生まれる遊びが、ルールにより制限された中で行われる活動としてのスポーツに発展していくこと。その中で人間の可能性が追求されていく」「パレスチナの現状は、子どもたちの様々な可能性を押さえつけています。私はスポーツを通して、パレスチナの子どもたちの可能性を少しでも広げていききっかけを作りたいと思います。私たちの活動が、パレスチナの子どもたちに少しでも役に立つことができると考えて取り組んでいきたい」（写真③：ベドウィンの子どもたち－第12次支援活動の様子）

多くの方々の支援で成り立っている我々の活動は、単なる自己満足の活動に終わってしまうことは断じて避けな



写真②：カリマンさん



写真③：ベドウィンの子どもたち－第12次支援活動の様子



写真④：笑顔の子どもたち

なければならない。したがって、私の責任としては、スポーツ交流の分野で常に自分たちの活動について反省し、見直しを行い、今後の活動を考えていかなければならない。今回、ガザ地区でUNRWA教育局の担当者との懇談して感じたことの自分なりの答えを今後探っていきたい。ガザ地区という閉塞空間に住む子どもたち（実際のところ、子どもに限ったことではない。大人たちにとっても同じである。）にどのような教育が計画され、その中でスポーツ教育の位置付けがどのようになっているのか。それを踏まえた上で、私たちが支援活動の中でできることはどういうことなのかを考える必要があるということである。UNRWAの学校教育・スポーツ教育をうんぬんすることはもちろんできない。純粋に、子どもたちのためにできることは何かを考える。スポーツを通して子どもたちに少しでも変化を作り出したい。それはスポーツが持っている素晴らしさから生まれるはずだ。何よりもスポーツを通して、①世界中の人たちとつながることができる②仲間とのつながりを強め、互いを理解し合うことができる③自分の可能性を見つけることができるのだから。

3. パレスチナの子どもたちの心の闇

シューファット難民キャンプで出会った子どもたちが置かれている状況は、ほんのわずかな時間しかない私たちには到底理解できないことだと痛烈に感じた出来事があった。それは、チャリタブルセンターで斎藤先生が子どもたちと折り紙や工作をしているときだった。何人かの子どもたちが私のところに来て、工作で使っていた紙にイスラエルの国旗を書いて、それを床に置いて（ナント！）笑顔で踏みつけるのだ。しかも、そ

れを私にもさせようとしたのである。たぶん8～9歳の可愛らしい少年である。私もイスラエルを擁護する気持ちはないが、それにしても一国の国旗を足蹴にすることはさすがに気が引けた。しかし、彼らにとっての日常は、イスラエルによる差別と暴力・抑圧の中にある。小さな子どもたちの心の中にも、イスラエルに対する憎しみがし

み込んでいるのだ。笑顔の子どもたちの心の闇を垣間見た思いだった。それも当然で、私がパレスチナに来てからも毎日のように、たいした理由もなく青年や子どもがイスラエル兵によって射殺されるという事件が起きていた。大げさだと思うかもしれないが、それが現実なのだ。（写真④：笑顔の子どもたち）

4. ゴラン高原の視察

一度行ってみたいと思っていたゴラン高原に行くことができたのは、私にとっても奉仕団にとっても非常に有意義なことだった。とはいえ、私にはあまりゴラン高原についての基礎知識がなかったので少しだけ歴史的なことを調べてみた。

1967年 第3次中東戦争…この戦争でイスラエルは大勝利を果たした
その結果、イスラエルはシリア領「ゴラン高原」を占領（同時にヨル



写真⑤：ゴラン高原の豊かな自然

ダン川西岸地区と東エルサレム、ガザ地区、シナイ半島及を軍事占領下に置いた。)

1973年 第4次中東戦争…シリアの攻撃を撃退し実効支配を続ける

1974年 国連兵力引き離し監視隊

(UNDOF) 設立 停戦合意を監視…日本もPKOとして自衛隊派遣(1996~2013)

1981年 イスラエルが併合を宣言…国連(日本も)はイスラエルの主権を認めていないが、イスラエルは入植活動を進めている

2019年 アメリカ・トランプ大統領がゴラン高原の主権を認めるべきだとツイッターで主張。イスラエル・ネタニヤフ首相は、トランプ大統領に媚びて、ゴラン高原の新入植地を「トランプ高原」とすると表明した。

ゴラン高原の視察では、Human Rights Field Tourに参加して、ゴラン高原のアラブ人権センターのカラマさんから「The Syrian Golan 50years under Israeli occupation」の話の聞いた後、実際に現地を案内していただきながら、より詳しい説明を聞くことができた。

現地を見た私の率直な感想は、まずはこのゴラン高原が本当に自然豊かな素晴らしいところだということだ。冬には雪が積もる海拔2814メートルのヘルモン山(シャイフ山)があり、スキー場もある。(スキー大好きな私は、一度滑ってみたいと思った。)水資源にも恵まれており、地政学的にもイスラエルが欲しくてたまらない場所だったのである。現在、ここはイスラエルの人気のリゾート地になっている。(写真⑤:ゴラン高原の豊かな自然)

多少の同情心からいえば、世界各地に分散していたユダヤ人は「自分たちの国をつくる」という強い思いをもち、その思いをがむしゃらに押し通してきた。強力な軍事大国になること



写真⑥: 放置されている戦車(下)、シリアとの国境(上)

も、その思いを実現するための一つの手段だったろう。一つの民族が「自立」するために手段を択ばずに、突き進んできた結果が、今のイスラエルなのだろう。しかし、その犠牲になってきたのが、イスラエル国内ではパレスチナの人たちであり、遊牧民ベドウィンの人たちであり、ここゴラン高原ではイスラム教ドルーズ派の人たちである。

それにしても、ゴラン高原はどことなく日本と似た印象を持った。それは、ラーム湖が火山活動の結果できた火口湖であり、周辺の土地は火山灰から土壌が作られ、水資源にも恵まれて名産のリンゴ畑や野菜畑が広がっているとところからなのだろう。しかし、ほんの少し視線を北に向けると、そこにはシリアとの国境を示す鉄条網の壁がある。日本では決して見ることのできない光景である。ここは「戦争の地」なのだ。戦争当時の戦車も戦いの勝利を誇示するかのようになっている

し、多くの地雷も放置されている。

(写真⑥: 放置されている戦車、シリアとの国境)

1967年のイスラエルによる不当な占領により、13万人ものシリア人が国外退去させられ、彼らの家は破壊された。現在その場所は、入植地となっており、入植者が生活している。しかし、その中でイスラム教ドルーズ派を含む一部の人たちは、イスラエルによる様々な妨害がありながらもこの土地から決して出ていこうとはしていない。それはここが彼らの土地だからだ。

国際法上もイスラエルの占領は決して許されるべきものではない。アメリカ・トランプ大統領がイスラエルの主権を認めると発言して、多くの国々が激しく反対している。しかし、イスラエルはそのアメリカの発言を後ろ盾にして、ますます占領政策・入植活動を進めている。一日も早くゴラン高原に住む人たちの主権が回復し、平和なゴ



写真⑦：高校生の手形とガザの子どもたち

ラン高原が取り戻されることを心から祈りたいと思った。

5. 高校生・若者たちにもっと情報を

今回事前の取り組みとして、私が非常勤講師として勤務している高校で、3年生35名に「平和のハト」の活動に参加してもらった。前日の授業の中で15分ほど、以前の現地活動の映像を見てもらいながら、現地のパレスチナの人たちが置かれている現状と私たちの取り組みについて話を聞いてもらった。「これはもちろん私個人としてのお願いで興味や関心の無い人はテスト勉強をしてほしい」と前置きして取り組んでもらった。しかし、全員が快く取り組んでくれた。手形のハトにメッセージを書く段階では、日本語でも英語でもアラビア語でも良いと話した。さすが高校3年生、スマホとタブレットを使いこなし、アラビア語を調べて書いたものが多かった。1時間の授業を十分に使って、一生懸命に「平和のハト」づくりに取り組んでくれた。この経験が彼ら彼女らにどういう影響を与えたかははっきりとは分からないが、何かしらのインパクトを与えたのは間違いないと感じた。私が今まで中学生に取り組んでもらった時とは違う印象をもった。

そして夏休みが終わって学校が再開した時に、今回の活動の報告をさせてもらった。すでに18歳になっている人、これから18歳になる人がいるが、これからの日本を担っていく若者たちである。期待したいと思うのは私だけではないだろう。幸い私が今回協力をお願いした人たちは、十分に私の期待に応えてくれた。活動の報告に対して大きな関心をもって来ていた。自分たちが作った「平和のハト」が日本から約10,000kmの旅を経て、パレスチナの地に届き、現地の人たちの心に届いたという事実をしっかりと受け止めて来ていた。(写真⑦：高校生の手形とガザの子どもたち)「日本の高校生も捨てたものではない」という思いを強く思った。少し失礼な言い方になってしまったが、要するに普段の生活の中で、私自身が高校生たちに対して勝手に「高校生には現代社会の問題に対する関心はそれほどないだろう」という思い込みをしていただけなのである。これまでの活動の中でも、札幌の高校生たちが活動に興味をもって、パレス

チナの人たちに対して、寄せ書きを書いたりしてくれている。今後は、もっとこうした活動を高校生などの若者たちに広げていくことはとても大切な活動の一つになると強く考える。そのためにも、もっとこうした情報を伝える活動をしていきたいと思っている。

(ほそかわ よしゆき)



マックルーバ

第14次パレスチナ医療・こども支援活動に参加して

清末 国夫



この活動を通してパレスチナの子どもたちの笑顔をいっぱい見ることができました

私は、以前から世界中の人権侵害にかかわる話題に注目してきました。中でも特にパレスチナ問題に関心を寄せてきました。国際社会は、軍事攻撃など大きな事件が起きない限り、この問題に関心を持たずいつのまにか忘れしまうのではと危機感を持っていたからです。

私は、パレスチナ難民問題にすこしでも手をさしのべることができないか思案していたところ、友人から毎年パレスチナで、ボランティア活動をしている日本の団体のことを知りました。それが「北海道パレスチナ医療奉仕団」のこども支援活動でした。私は、このこども支援活動を是非サポートしようと思い立ち、今年の夏、この活動に参加しました。

以下、こども支援の活動内容とそこから知り得たこと、並びに、パレスチナ人に対する人権侵害の実態に触れ、考えさせられたこと、さらに、この体験を通して今後の活動にどう取り組んでいくかについて述べます。

現在、「天井のない監獄」とも呼ばれるガザ地区に住む子どもたちは、この地区を封鎖するイスラエル政府により、毎日不条理な生活を強いられています。周囲が高い壁で囲まれ逃げることのできない状況の中、イスラエル軍にいつ襲撃されるかわからない恐怖の生活に、子どもも大人も疲れ切っています。子ども支援活動の中には、「出張アトリエ」と称される絵画教室があり、子どもたちとともに絵を描くことで少しでも心穏やかになってもらうことをめざしています。

さらに子どもたちが、空爆、包囲、封鎖から生じる感情を、絵として吐き出し、ストレスを少しでも発散することをめざしています。

出張アトリエで一番気を付けたことは、一人でも多くの子どもが参加しやすい雰囲気をつくることでした。また、参加に迷っている子どもがいないように気配りしながら、絵を楽しんでもらえるよう努めました。具体的には、日本から持参した新聞紙で

「兜」、さらに折り紙で「鶴」を一緒に折り、親近感が沸いたところで、絵を描いてもらいました。絵のテーマは、太陽や木の描き方を示した本を手本として見せたりして自由に選んでもらいました。私はある男の子が、パレスチナ人がイスラエル兵に撃たれ出血し倒れる場面を描いたことに、とてもショックを受けました。

しかし、今回のこども支援活動の中で、嬉しいこともありました。会場となったガザ南部の診察待合室に作業用テーブルを並べ、絵画教室を準備していると、なんと母親たちも手伝ってくれたのです。中には自分の小さい頃を思い出しながら、楽しそうに何枚も絵を描いてくれた方もいました。子どもたちだけでなく、母親たちへの支援にもなったかもしれません。それでもなかなか意思の疎通が思うようにいかず、そのため次回は事前にアラビア語の単語ノートを作成し、自分の説明を伝えやすくしたいと思いました。

国際社会は、先の男の子の作品にあったような、悲惨な絵を描くことがない日常生活を送れるよう行動すべきだと思います。私は、この活動を通して、自分の将来の夢を語れる子どもが一人でも増えることを切に願っています。

なお、この「出張アトリエ」は3か所の難民キャンプ、難民キャンプの外にあるUNRWAのクリニック、民間の



ガザでの出張アトリエの様子



出張アトリエに参加した男の子による描写

幼稚園、そしてヨルダン溪谷の遊牧民のコミュニティの計6か所で実施しました。

さて、ガザ地区の若者たちの状況ですが、現在失業率が70%と非常に高いため仕事に就くことができず、15歳以下にいたっては戦争のことしか知らない有様です。このように若者たちは、想像以上に厳しい現実と心理的なストレスに苛まれています。

ある日、私はガザの汚染された海を確認するため、奉仕団の団員二人と歩いていると、公安らしき人から不審な外国人と間違えられ職務質問を受けました。私たちがその海岸に着くと、そこにいた若者たちが、私たちに興味を持ってくれたのか、嬉しそうにしながら何処から何のために来たのかなど、次々と質問を受けました。封鎖中のガザに、外国人がいること自体珍しく、話しかけようと思ったのでしょう。ガザ地区の海は、封鎖下の電力不足により下水処理を行えず、生活排水が直接海に垂れ流されています。

この汚れた海で子どもたちが遊んでいるのを見て、洗濯排水や工場から出る排水などの化学汚染水から子どもたちの健康が蝕ばれているのではないかと、とても心配になりました。電力事情は封鎖で経済がまわらず、極端な電力不足に陥り、毎日12時間にわたる計画停電が行われるなど、ガザの人々はとても不便な毎日を過ごしています。

また、イスラエル政府は、外国人に対しても「嫌がらせ」をしています。

例えば、ガザ地区の出入口であるエレッツ検問所では、スーツケースの中に入れた書類や下着など全ての持ち物がバラバラにされました。また、団員の荷物の中に見知らぬ人の携帯電話が入っていたり、別の団員のパソコンのCD引き出し口が開かなくなったり、レトルト食品に穴を開けられたりもしました。外国人はもう来るな！といわんばかりの嫌がらせです。ガザ地域に住むパレスチナ人は、地域外にほとんど出ることはできませんが、特別にガザを出る許可を得て出域するたびに、いつもこのような目に合っています。

さらに東エルサレムでは、イスラエル人がある土地を欲しいと思えば、裁判所がその土地の登記証明書に不備があるなどと難癖をつけ、「入植」希望者に居住を認めたりもしています。

インベーターのごとく、パレスチナ人の土地をどれだけ奪い取れば、侵略を止めるのか、それとも、全部奪い取るまで止めないか、とても危惧しています。

このように、パレスチナ人は、イスラエル政府から人権侵害を繰り返され、非常に理不尽な扱いを受けています。

ヨルダン川西岸地区のヨルダン溪谷に住むパレスチナ人は、元々は自分たちのものである水を今は高値で買わさ

れるようになり、生活は困窮を極めていきます。遊牧民もイスラエルがあらたにつくった道路で寸断され、そのため自由に移動できず生活に支障をきたしています。さらに豊富な地下水も奪い取られています。全く不平等な社会としか言いようがありません。

日を追うごとにパレスチナ人の生活は追い詰められています。

私は奉仕団の活動を通して、外国人の中にはパレスチナ人のことを決して忘れず支援していることを伝えたいと思います。

さらに、頑強なイスラエル政府に対し、地道にコツコツと小さな風穴を開けながら、やがて大きなものにしていくことをめざしていきます。

最後に、この活動を通してパレスチナの子どもの笑顔をいっぱい見ることができました。

この小さな笑みがとても嬉しかったです。今後の活動の大きな活力となっています。

(たかはし くにお)



ガザの海辺で遊ぶ子どもたち



ガザの海辺で話しかけられる清末先生

パレスチナとのかかわり方が 変わっても

山村 順子



持続的な支援として何が出来るかを考えると同時に、長くかかわることの重要性を痛感した

なぜ仕事からボランティアに？

「きみは、一生パレスチナにかかわる気があるのか？」と、2017年にNGOの駐在でエルサレムに着いてすぐ、パレスチナを長年取材しているジャーナリストの方に聞かれた。そのときはあまりに唐突で、「そんなこと急に言われても・・・」と困惑したが、駐在5年を終えた今、「一生かかわっていくんだろうな」という気持ちに変わった。イスラエルの軍事占領状態がいつまで経っても終わる兆しがない上に、現地の人たちとの縁を切るという選択肢が見つからないからだ。

元々、NGO駐在時代に、医者や保健師と一緒に「公衆衛生」や「保健」をテーマにしたプロジェクトを通してパレスチナ人の支援活動をしたことはあったが、「医療」というテーマでの支援、そしてボランティアでの支援は今回が初めてだった。ボランティアとして活動に参加する一番の魅力は、なんといっても活動の柔軟性にあった。その場で得た情報をもとに、すぐに予定を組んで動くことができる。私は今までの現地での駐在員としての経験を生かして、セキュリティやコーディネーションを担当しながら活動にかかわった。

今回、私が参加した活動地域は下記

の活動地である。その中から何カ所か抜き出して所感や体験したことを述べてみたい。

【東エルサレム】シェイクジャラ、シュアファート難民キャンプ

【西岸地区】アル＝アマリ難民キャンプ、ジェラズン難民キャンプ、ジャバリア難民キャンプ、ヨルダン渓谷、ヘブロン（H1 & H2 / 南ヘブロン）

【ガザ地区】ガザ市、ジャバリア難民キャンプ、ヌセイラート難民キャンプ、ラファ難民キャンプ

シュアファート難民キャンプ

もともと私はNGO時代に当地で事業を行っていたこともあり、全体の状況については知っていたが、UNRWAクリニックの中の様子は今回初めて詳しく知ることができた。診療の際の登録のお手伝いや、医師用のメモ取り、簡単なアラビア語の通訳や医師へ必要に応じた文化背景の説明などを行ったが、午前中は人が途切れることはなく、切り上げないと帰れない状況だった。現地は多産の文化であるため、度重なる出産で足腰を悪くしている女性も多く、医師、その中でも整形外科医の需要の高さが顕著だった。また、文化的に甘いものを好むため、

糖尿病やその予備軍の患者さんが非常に多かった。でもその患者数の多さから、深刻に捉える感じもあまりなかった。整形外科関連の疾患は日々のエクササイズで直す必要があるため（薬で早急に治して欲しいという要望も多かったが）、症状改善のためのエクササイズの表を配布した。当初英語のものを配布していたが、特にキャンプでは英語が理解できない人も多い¹ため、クリニックの方々に急遽アラビア語に訳してもらった。それらを配り、自分で行うエクササイズの重要性を伝えた。

アル＝アマリ難民キャンプ

廊下にも人が長い列を作って並んでいた。一人の患者さんが、身体の不調を訴えていたが、話を聞いているうちに、「息子が刑務所から出所予定日になっても出てこず、もう一週間も経ったの。心労で眠れないわ」ということを急に話し、泣き出してしまった。パレスチナでは、こういった心労からくる体調不良が非常に多いように感じた。6月に行った当団の講演会でもそういったテーマでパレスチナ人の医師にプレゼンをしてもらったが、パレスチナ人の健康状態がいかに占領から派生する出来事によって脅かされているのか、ということ再度、学ぶこととなった。

ヨルダン渓谷での占領の現実

一水のアパルトヘイト

印象深かったのは、ヨルダン渓谷に行った際、水源を使っていた時と比較すると、400%の金額を払ってタンクに水を貯めて生活するしかない、さ



アル＝アマリ難民キャンプで、診察に来た人たちの受付業務を手伝ってくれていた少年が撮影。



ゴラン高原のツアーの様子。エルサレムのパレスチナ人の運転手さんも熱心に聞く。パレスチナ人とシリア人の分断を予防する上でも、こうして一緒に聞いてもらうのはとても大事。



ヘブロン旧市街にて。先日、ユダヤ人入植者に焼かれてしまった店の息子さん。地元の人が手作りした商品もたくさん置いていた。少年の目が印象深い。

らにその水もエリアAかB²まで行って確保しなければならない状況にあるパレスチナ人たちの存在だった。その状況は「水のアパルトヘイト」と呼ばれていた。パレスチナ人は自分たちが使っていた水源を不法に収奪され、それをイスラエルが国家的に支持し、パレスチナ人たちが水にアクセスできない仕組みが作られていた。エリアC³に分類されるベドウィンの人たちが住むヨルダン溪谷では、イスラエルの軍法が適用となり、「入植者評議会⁴」からイスラエル軍が要望を受けて動くことができるということだった。入植者に襲撃されて重傷を負う人もいれば、自分たちの水源をイスラエル側に奪われたため、すぐ目の前にある水源すら利用することを許されない人たちもいた。3日ごとに生活用水代（家畜用も含む）として200シェケル⁵を払いながら、すぐ目の前にある水のパイプラインを使えず、遠くから生活に必要な水を持ってくるしかない（満水の水タンクを持って検問所を通らねばならず、都度イスラエル側に没収される可能性がある）、という現実があった。当地では絵画教室などを行ったが、ひどく暑く、その数時間でも水を飲めないのは厳しかった。「2年前、入植者評議会の人たちがここに来て、土地、車、農業トラクター、その他の機器を募集していったんだ」「私用の車を没収されて、2,000~7,000シェケル⁶を罰金として払わせて、あとで戻すんだ」と、案内してくれた方は言っていた。また、彼の車も2018年に没収されたという。今は入植者のものとされた水を盗みながら⁷暮らすしかないとのことだった。まさに、「抵抗とは存在すること」と、ここで聞いたが、そこに暮らし続けることこそが暴力や抑圧への

抵抗であることを示していた。

占領下ゴラン高原でのツアー

シリア人が住む占領下ゴラン高原では、同じ占領の枠組みの下で、シリア人たちが置かれている現状を見て歩き、学んだ。私は数回行ったことがあったが、猫塚団長と細川団員とともに訪れて再度、異なる視点から見るのができた。筆者たちにツアーをしてくれたシリア人のカラマ弁護士は、多くの占領下ゴラン高原の若者が選択する、ダマスカス大学に入学して学ぶ方法ではなく、イスラエルのテルアビブにある大学で、ヘブライ語で法律を学ぶ方を選んだ。これは自分たちを占領している枠組みを知るという点では非常に重要な経験である。実際に、彼はゴランの人々と土地を、イスラエルの法律上で弁護し、守っている。自分たちの祖国で母語のアラビア語で学問を学ぶ者もアイデンティティや文化の質を保つ上で必要であるし、それとは別に、自分たちを守るために占領側であるイスラエルのことを知る者も必要となる。これはパレスチナ人の中で起きていることとも似ていると感じた。

難民キャンプ全般に関して

患者さんの様子から、私たちが届けられているのは「医療行為」だけではないと感じた。占領下の生活においては、このように外国人がはるばる支援のために来て、一人一人のパレスチナ人と向き合うということが、現地に住む人たちの尊厳に少なからず影響を与えているように感じた。特に、普段から支援慣れしているパレスチナ人たちは、「ボランティアで来た」と言うより、「仕事で来た」というよりもポジティブな反応を示してくれたように思う。

パレスチナにおいて、援助関係者は良い家に住んで高い給料をもらっている、というイメージが現地の人たちの間に少なからずある中で、ボランティアで自分たちの時間とお金を使って来ているということは、自分たちを「裨益者」としてではなく、対等な存在として見ている、というメッセージとして受け止められているのでは、と思った。（もちろん、給料の有無に拘わらず、熱心に現地のために活動している人たちもいる。）

「医療」活動に参加してみても

今回、初めて当団体の活動に団員として参加したが、どこへ行っても大歓迎され、「本当に日本から私たちのために来てくれてありがとう」「ぜひ〇〇にも来て欲しい」など、現地の人たちから多く声をかけてもらった。誰にでも必要となる「医療」という切り口でパレスチナ人とつながるといことは、まさに、最もアクセスしにくいところにアクセスすることだった。NGO時代にはなかなか行くことが叶わなかった場所（特に、活動地以外の難民キャンプなど）へも多く出向くことができ、「占領の現実」を多面的に見た。特に、西岸地区におけるイスラエル人入植者と、そこに住むパレスチナ人の日常というものを最も多く見たと思う。どこへ行っても「占領」という根本原因は同じなので、結果としてそこにいる人々に起こることや、その人々から出てくる言葉には多くの共通点があった。今後、持続的な支援として何ができるかを考えると当時に、長くかかわることの重要性を痛感した。この場を借りて寄付して下さった方々、受け入れてくれた団員の皆様にも感謝したい。（やまむらよりこ）

1 当難民キャンプでは、ユダヤ人入植地で働くようになる人が多いのため、英語よりもヘブライ語教育に力が入れられている。

2 エリアAは、行政権も警察権もパレスチナ側。エリアBは、行政権はパレスチナ側、警察権がイスラエル側。

3 エリアCは行政権も警察権もイスラエル側。

4 Settler's Council と呼ばれている。

5 当団の滞在時期であった8/1のoanda為替レートだと、7,810円。

6 当団の滞在時期であった8/1のoanda為替レートだと、78,107円~273,377円。

7 もちろん、昔は自分たちが自由に使っていた水源なので、「盗む」というニュアンスはおかしいが、堂々と使えなという意味で使用した。

第14次パレスチナ・子ども 支援活動報告

相澤 依里



一日も早いパレスチナ解放、ガザ地区封鎖の解除を心の底から願います

出場していたため、疲れのせいではないかともいわれていましたが、検査で陰性であってもコロナ感染の可能性を否定できないため、できる限りの感染対策を行っていました。しかし、結局エルサレムに戻ってから受けたPCR検査で陽性となりました。もっとも近くで、常に行動を共にしていた奉仕団メンバーへの感染はありません。

新型コロナウイルスへの感染と私の行動により、多くの方にご迷惑をお掛けしてしまい、大変申し訳ありませんでした。

ヨーロッパからイスラエルへの入国

今回の渡航で初めてイスラエル到着前にセキュリティーチェックを受けました。私は8月21日にフィンランドを出発しスペイン経由（マドリード）でイスラエルと向かいましたが、マドリードで搭乗時にパスポートを提示すると突然セキュリティーチェックを受けるようにと別室へ誘導されました。「なぜ日本からではなくフィンランドからなのか。フィンランドでの滞在期間と何をしていたのか」「日本ではなに（仕事）をしているのか」「なぜイスラエルに行くのか」などの質問がされ、スマホ内の写真確認、手荷物をすべてチェックされました。さらに、バゲージスルーだったので預け荷物も確認すると言われスーツケースの鍵を渡すように要求されました。この時点で離陸間近で、スーツケースはスペインの空港でチェック後にイスラエルへ翌日（8月22日）送るから早く搭乗しろと指示されましたが、「それでは困る。ヘルシンキのカウンターでもイスラエル入国に必要な書類、目的など確認されてきた。」と抗議しましたが結局スーツケースを置いたままイスラエルへ向かうこととなりました。日付をまたぎ22日早朝に入国後、カウンターへ行き預け荷物の受け取りについて確認するとロストバゲージ扱いになっており、夕方の17時台までには届

はじめに

第14次現地活動は私にとって2019年4月ぶり3度目の活動となります。

私は活動の後半部分に参加するため8月21日にフィンランドを出発しましたが、新型コロナウイルス感染症の濃厚接触者になったと連絡がありました。

イスラエルについてすぐにPCR検査を受け陰性を確認し、奉仕団メンバー

と合流することが出来ました。その日の夜に発熱がありましたが翌朝には解熱し抗原検査を実施したところ陰性であったため、メンバーと一緒にガザ地区へ入ります。夕方になるにつれて発熱・咳嗽の症状がありPCR検査を受けることのできない環境であったことから、抗原検査を行いました。陰性判定となり1日休息をとると熱も下がり体調も元に戻りました。

フィンランドでウルトラマラソンに



取材をするパレスチナのメディア（左）と入植者の家の前にいるセキュリティー（右）



入植者の住む家（左奥）と見張りを行ったリーダーの家（ペイントされている家）

くとのことでしたが、結局20時過ぎに荷物を受け取りホテルで荷物を確認すると、ポーチの中身もすべて開けられぐちゃぐちゃの状態になっていました。

シルワン村（東エルサレム）

現地在住の活動家の方と一緒にシルワン村を訪れました。

シルワンは東エルサレム旧市街地の南側に位置し、細い路地が入り組み斜面に民家が建ち並んでおり、上部・中部・下部で各地区に分かれています。旧市街には多くの観光客が訪れ人の目に触れていますが、シルワンには観光客が訪れることは少なく、人の目に触れ難いことで旧市街地よりも厳しい状況にあると聞きました。

ここは歴史的に重要な土地で、遺跡観光地および入植地にする「再開発」の計画がありこの一帯の住民が立ち退きを迫られ入植者が入ってきています。

密集して建てられている民家の中には、カラフルなペイントがされた家があり、これはアメリカのNGOが連帯を意味してペイントしたものだということです。シルワン村の一番下側の地区に家屋破壊された家がありました。ペイントが施されたこの家は結婚式を控えていたようで、花嫁衣装もこの中にあったという事です。二階部分が大きく壊されていましたが、壊された部分に布を掛け、家の前にテントを張り今でも住人が住み続けていました。家の前では子ども達が遊んでおり、元気に手を振ってくれました。

シルワン村の住民は抵抗運動を続けており、そのリーダーの家を訪れました。

この家では、子どもがペッパースプレーを顔に浴びせられたり、兵士により怪我を負わされて病院へ行っている間に家の中に侵入されお金を取られるなど、日々嫌がらせや攻撃の標的となっています。そのため攻撃を受けないよ



破壊された家（上からの写真）



破壊された家の前で遊ぶ子ども達

うに、活動家が家の前で見張りを行うこともあります。この日は、パレスチナのメディアがシルワン村取材に訪れていたことと、パレスチナ側で殉職者が出たことで、イスラエル兵士が攻撃をしてくる可能性の高い日となりました。そのため私達は、家の前の椅子に座り見張りを行うことにしました。この家の横には入植者が住んでおり、監視カメラが設置されています。さらに、入植者の安全の為に常にセキュリティーが入り口におり、入植者が出入りする時には必ず護衛にあたります。見張りの間にも何度かトランシーバーで連絡を取りながら、セキュリティーと入植者が一緒に歩く姿を見ました。土地を奪い、家を奪った入植者が地元住民とのトラブルに合わないようにとセキュリティーが付いているのです。

日が落ちて暗くなってくると数名の兵士が銃に手を掛けながらやってきましたが、リーダーの家の前に座る私た

ちをうかがうだけで、通り過ぎて行きその後も戻ってくることはありませんでした。21:30を過ぎたころ「今日はもう大丈夫だろう」と見張りを行っていた家の住民に言われ胸をなでおろし、すでにバスのない時間でしたので歩いてホテルまで戻り1日が終わりました。

ワッフア病院（ガザ地区）

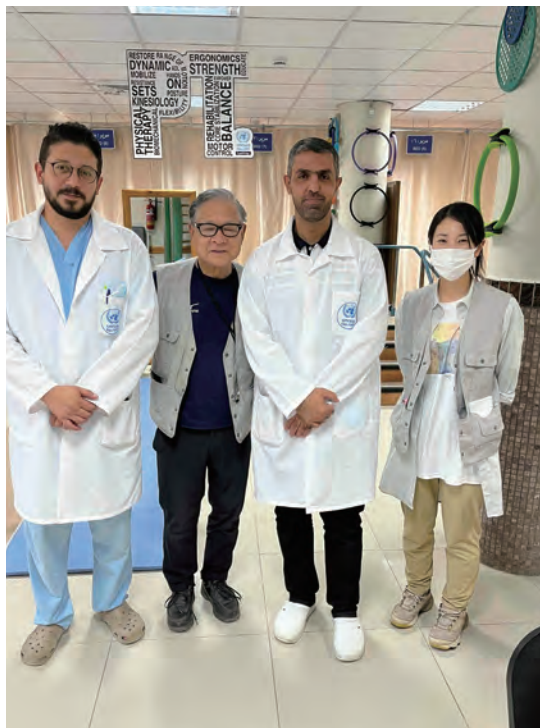
ワッフア病院はリハビリ専門の病院で、脳血管障害、認知症、外傷後の患者さんが入院されており、イスラエルの攻撃によって身体に損傷を受けた方も治療を受けています。イスラムの国では日本の病院のように、男性部屋女性部屋とは分けて女性病棟と男性病棟に分けています。ここでは、男女各50床あり、約100名の患者さんが、治療、リハビリを受けていました。

2021年5月にあったイスラエルによるガザへの攻撃で病院の一部が破壊さ

れており、今でも病院内の階段部分にはブルーシートがかけられ、痛々しい姿がそのままとなっています。各病室を回りながら、現地医師に症例紹介をして頂きました。病室の様子は8月の暑い季節の訪問でしたがクーラーを使用している様子はなく、窓から風を入



ワッフア病院での回診・議論



SABRA 診療所のリハビリ

れてはいるものの室内・廊下共にとても暑く汗が噴き出てきます。室内はとてもシンプルで個人使用できるテレビや冷蔵庫はなく、ベッドサイドに小さな床頭台が置かれ、私物も床頭台に収まるほどしかありませんでした。現在日本では、感染対策で家族の付き添いや病室での面会不可となっている病院がほとんどですが、この病院では面会が可能となっており、多くの患者さんがベッドサイドで家族と共に過ごされています。

シーツは病院のものを使用していましたが、掛物や体位交換用のクッションは家庭用のものが多くみられ、家族が用意をしているようです。

設備はナースコールの設置はありますが、中央配管方式で行う酸素療法や吸引を行うために必要な設備がありません。吸引が必要な方のベッドサイドにはポータブルや置型のサクションが設置され、各病室で共有して使用していました。酸素については、酸素ポンペと酸素濃縮装置（大気中の窒素を装置内で吸着させ、高濃縮の酸素を作り出す機械）を使用されており、7000ℓポンペ（151×23.2cm）の大きなポンペを必要時すぐに使用できるようにと病室前の廊下で管理されています。

回診時に現地医師が「褥瘡発生率が高く、なかなか改善されない」と話されていました。褥瘡とは「床ずれ」のことで、長時間の圧迫により血流が悪くなることで皮膚に発赤、傷や潰瘍が出来るしまう事です。

褥瘡は、局所の要因（圧力・摩擦・ずれ・局所の皮膚疾患など）、全身的要因（低

栄養・痩せ・基礎疾患・浮腫・排泄物や汗による皮膚のふやけなど）、環境・ケア要因（スキンケア・栄養補給・体位交換・マンパワーなど）というように様々な要因が合わさり発生します。

数名の患者さんの褥瘡を見せていただきましたが、すでに深い潰瘍になっている方が多かったです。褥瘡処置ではドレッシング材などを使用し傷を保護して、密閉することで湿潤環境を形成し治癒を促進させます。仙骨や臀部などの排泄によって汚染されやすい部位は特に創部の清潔が保てるように注意し保護を行う必要がありますが、ワッフア病院では創部の処置に洗浄＋軟膏＋ガーゼ保護が行われており、フィルム保護やドレッシング材の使用は見られず創部の乾燥や便による汚染も見られていました。

また、創部の治療の他に2時間おきの体位交換・1日2回の離床を行っているとのことでしたが、エアマットなどの体圧分散用具の使用は見られず、それぞれの体型や自力体動のあるなしに関わらずどの患者さんも同じ硬いマットレスを使用していました。

さらに低栄養状態であれば、褥瘡の発生リスクが高くなり治癒も遅く、悪



病室の様子（ワッフア病院）



化しやすいので個々の疾患に配慮しつつ適切な栄養管理が必要となりますのですが、経済的な理由から病院食の提供が出来ず、患者さんの食事は家族の差し入れに頼っています。

封鎖されているガザ地区では健康的な食事をとること自体がとても難しく、もともとの生活習慣や文化的な背景も合わさり生活習慣病が大きな問題となっています。貧困のなか食事を準備する家族の負担は大きく、身体を作り維持し生きることに必要な食事を、入院中でさえ摂ることのできない現状を再確認し改めて憤りを感じました。

最後に

軍事衝突があれば報道がなされ多くの注目と関心を集めますが、攻撃が終わると報道も終わってしまい「攻撃が終わって良かったね」という言葉を耳にします。しかし、ガザ封鎖・パレスチナ占領は途切れることなく今この瞬間も行われています。

ガザの貧困やパレスチナの厳しい状況は、占領者であるイスラエルによって意図的に作り出されているものです。取り戻すことのできない日々の生活が長い時間をかけて壊され続け、先の見えない現実の中に人々はいます。そして、ひとたび攻撃が始まれば一瞬で家族、友人、家など多くのものが奪われてしまいます。

ワッファ病院のスタッフの誰もが、人手不足・物資の不足の中、自分たちも安全や生活が保障されず多くのストレスを抱えながらも、イスラエルからの攻撃で一部破壊されたままの病院で激務をこなし、患者さんの治療とケアに当たっています。同じ医療従事者として言葉が見つからず、文章にすることが出来ませんでした。

一日も早いパレスチナ解放、ガザ地区封鎖の解除を心の底から願います。

(あいざわ えり)



病室に設置されていたサクション



廊下に置かれている酸素ボンベ

第14次パレスチナ医療・こども支援活動報告

齋藤 育



報告しきれない、たくさんの悲惨なパレスチナの現状を耳にし、目にしてきました。

1. はじめに

北海道パレスチナ医療奉仕団に所属して8年目となり、現地支援への参加は今回で5回目となりました。前回参加したのは、2018年の第11次支援活動のときでした。それから4年の月日を経て現地で取り組んできた活動や、支援活動を通して感じたことなどについて報告させていただきます。

2. 子ども支援活動について

(i) 平和を願う壁画制作

この活動は、2015年に初めて現地支援活動に参加し、子ども支援活動を立ち上げたときから継続して取り組んでいます。国連パレスチナ難民救済事業機関（以下UNRWA）が運営するクリニックの一面を借りて行っています。クリニックに来ている子どもたちに自分たちの手形を画用紙にかたどってもらい、それにメッセージやイラストをかいてもらいます。そして、完成した手形を平和の象徴である鳩に見立て、未来に向かって飛び立って見えるように壁画装飾をします。同様の手形を日本の子どもたちからも集め、パレスチナの子どもたちの作品と一緒に壁面に掲示してきました。

クリニックのスタッフ、患者問わ



ず、その場にいる方たちは快く活動を受け入れてくれ、活動を手伝ってくれたり、活動に関心をもって話しかけてきてくれたりします。特に、ガザ地区では、日常的に外国との（西岸地区とさえも）行き来が遮断されているパレスチナの人々にとって、外国人と関わる機会が希少であるため、手形を通じた子どもたちの国際交流はとても喜ばれます。また、大人たちからも外国人と関わりたい、自分たちのことを知ってもらいたいという気持ちをとても強く感じます。

そして、今回この活動を通して、一番うれしかったことは、西岸地区にあるシュファット難民キャンプ内にあるクリニックに2018年の活動で制作した壁画装飾がいくつか残っていたことです。クリニックを訪問した際、一番に教えてくれました。

機会があれば、これからもこの活動を続けていき、現地の人たちに遠い日本からもパレスチナを思っている人がいるというメッセージを届けていきたいと思います。

(ii) 子どもアクティビティ

この活動は、これまでUNRWAが運営する小学校や難民キャンプ内にある幼稚園などで行ってきましたが、今回は夏休み中であったため、西岸地区のシュファットにある、チャリタブルセンターや、チャイルドセンターといった、児童館のようなところでの活動となりました。活動内容としては、日本から持参する折り紙を通して、日本の文化について紹介したり、道具を使って工作をしたりしました。

折り紙を使った活動では、いつも日本の「こどもの日」と「ひな祭り」を

取り上げ、写真を使って文化を紹介し、そのあと、兜や鯉のぼり、雛人形を折り紙で作ります。また、兜を折るときには、パレスチナの新聞紙ではサイズが小さくて実際にかぶることが難しく、少しでも日本の文化に触れてほしいという思いから、日本から新聞紙を持参するようにしています。長方形の新聞紙を正方形にするところから兜折は始まるのですが、ここが、一番時間がかかります。まず、折るということや、角や辺を合わせるという経験が不足しているため、実際に見せながらやっても理解が進まず、子どもたちからは（自分の代わりに）「やって、やって」という依頼の言葉が飛び交います。そして、はさみを使う学習の経験も少ないため、切り始めるところに大きく開いた刃を合わせることや、刃を閉じたり、開いたりすることもままならない子どもたちがほとんどであることに驚かされました。

これらの背景には、子どもの数が多いパレスチナでは、それに対して校舎数が足りず、一つの校舎を午前部の学校と午後部の学校とで2部制、中には3部制で校舎を共有することによって、授業数が少なくなり、日本という音楽や図画工作、美術、体育などの情操教育が行われていない、もしくは減らされているという事実があります。この事実をどのように捉えるかは、個人によって異なるかとは思いますが、日本の教育を受けてきた自分にとっては、やはり情操教育から学んだことは多くあると感じており、日本で教育を受けることができたことに改めて感謝を感じました。

また、工作活動では、現地にある道具を使ってできるものであること、作って終わりではなく、作った後それをを使って遊ぶことができるものというコンセプトをもって取り組んできました。今回は、紙皿や割り箸を使った魚釣りや、紙コップを使ったロケットを題材とし、子どもたちだけでなく、指導者たちにも楽しんでもらうことが



できました。

(iii) 子ども支援活動で目指すこと

2015年に初めて現地支援活動に参加してから、この子ども支援活動で目指していることは、短い時間であるけれども、その中で子どもたちにたくさんの笑顔を作ることと、活動で取り扱った題材をそこにいた指導者が私がいなくても継続的に、または、発展的に教材として取り上げてもらうことでした。

一つ目は、いつも自分の目で見て目標の達成を確認することはできましたが、二つ目に関しては、なかなか結果が生まれることはありませんでした。しかし、今回の活動では、手形を取って壁面装飾をする活動を見ていた指導者たちが、子どもたちの手形をかたどって作品にしたものを壁面に装飾するという活動を行ってくれたという報告が帰国後に入り、とてもうれしくなりました。

これからも、短期間の現地支援でなにができるかということを中心に考え、子どもたちが楽しめるアクティビティを提案していきたいと思います。

3. パレスチナの変化

今回、4年ぶりにパレスチナを訪れ、たくさんの変化を目の当たりにしました。それらは、残念ながらよくないものばかりで、その現実を目の前にしたときには、とても心が痛みました。一つ目は、パレスチナの検問所の変化です。西岸地区のラマッラーとエルサレムとの境界線にはカランディア検問所があります。本来であれば、検問所があること自体がおかしいのです

が、検問所があることが日常であることのように思わせるよう、きれいに整備されていました。また、現地に長く生活していたメンバーの山村さんによると、クリスマスには、きらびやかに装飾され、音楽まで流れていたとのことでした。検問所を通る人々に対し、嫌なもの、あつてはならないものという疑念を抱かせないため、また、何も知らずに訪れる外国人に対して、占領のカモフラージュをしているイスラエルの姑息な手段に怒りを覚えました。二つ目は、これまで参加してきた2か所のデモンストレーションの在り方です。ピリン村というところで毎週金曜日に盛大に行われていたデモは、この4年の間に一人のパレスチナ人の若者の死によって、終息していました。このデモは、イスラエル軍は催涙弾や音響弾、ゴム銃といった過激な武器を使うのに対し、パレスチナの若者たちは投石という手段で対抗していました。大人と子どもの喧嘩ともいえるやり取りの中で、一人の若者が命を落とし、村の人々は落胆し、尊いパレスチナの若者の命を守っていくためには何年も続いたデモを終息するほかなかったそうです。もう一か所は、東エルサレムのシーフジャッラーファという地区のデモです。ここでは、たくさんの方々がパレスチナ人がイスラエルの裁判によって、不当に家を奪われ続けていることに抗議することにデモをしています。そして、数年前は、このデモに参加しているのはパレスチナ側の人ばかりでしたが、今回は全く違いました。イスラエ

ルが不当に占領している地区側にたくさんの方々がイスラエル人も集まり双方に正当性を主張していました。この状況を見て、この地区では、数年前とは比べ物にならない数の住居がイスラエルに奪われたという現実を目の当たりにしました。実際これは、この地区に限られたことではありません。エルサレムの旧市街を歩いてみてもこれまで目にしたことのなかった場所のあちらこちらの建物でイスラエルの国旗を目にしました。

今回取り上げたこと以外にも、ここでは報告しきれない、たくさんの方々の悲惨なパレスチナの現状を耳にし、目にしてきました。医療、子ども支援だけに限らず、これらの現状を伝えていくことが、現地支援へ行ける私たちの使命であるとも感じています。

4. 最後に

今回、4年ぶりに現地支援に参加させていただき、改めてパレスチナ支援の必要性やパレスチナの現状を世界に広く伝えていく必要性を深く感じました。私にできることは限られていますが、これからもパレスチナとの関わりを続けていきたいと強く感じる現地支援活動となりました。

最後になりますが、いつも私たちの活動を応援してくださっている皆様に、感謝の気持ちをもって、今回の報告を終わらせていただきます。パレスチナを忘れない気持ちが、パレスチナにとっての大きな力となりますので、これからも一緒にパレスチナを思い続けていけることができると幸いです。

(さいとう いく)





「後方支援チームとしての課題とやりがい」

香山リカ

精神科医という自分の専門性を生かした支援にはどんな形があるか、と考えるヒントとなった

を聴いたり、さまざまなメディアでの猫塚団長、清末副団長の発信を目にしたりしながら、「第15次派遣のメンバーには私も加わることができるだろうか」と今から夢想する日々である。

(かやま りか)

一昨年末、北海道パレスチナ医療奉仕団に入団した。昔から紛争地での医療に携わりたいという希望をもっていたのだが、勤務していた大学や医療機関での業務に追われ、なかなか実行に移す機会が得られなかった。またそのうち両親が高齢になってそれぞれ病を得て、日本を離れることじたいがむずかしくなった。

入団のきっかけとなったのは、父を10年ほど前に、そして母を3年前に見送ったことだ。母は、私が紛争地やへき地での医療に関心があると言うと、「そんな冒険はせずにいまの仕事を大切にしなさいよ」と眉をひそめたあとに、「でも、親が死んだあとにいつまでも落ち込んでちゃダメよ。自分に与えられた時間を楽しみなさいね」と笑顔になった。だから、母が亡くなったあと、私は「あなたが言った通り、自分の人生を好きに楽しませてもらいますね」と、北海道パレスチナ医療奉仕団に入団し、さらに2022年から北海道のへき地診療所で働くことを決めたのだった。

ただ、入団の年はコロナ禍で海外渡航したいが不可能となり、2022年、第14次派遣が決定した時は新しい診療所で働き出して間もない頃であり、結局、まだパレスチナに行くことはできずにいる。

とはいえ、団員として第14次派遣を見守ることになり、派遣の決定、準備、現地との調整、スケジュール決定、そして実際の渡航、今回初めての試みとなった現地からのオンライン報告会、猫塚団長をはじめとする団員たちの帰国まで、緊張感を持ちながら打

ち合わせにオンラインで同席したり現地からの連絡を待ったりする数か月が続いた。

現地での活動に関しては、これまで何度もパレスチナを訪れている猫塚団長、細川副団長、清末副団長らが中心となり、安全第一を心がけながら、実に内容の濃い医療支援や子ども支援を行い、こちらで行うべき"後方支援"はほとんどなかった。ただ、奉仕団がパレスチナを訪問しているという情報への社会的関心度は非常に高く、猫塚団長が時折り現地から更新するFacebookは広く拡散され、多くのコメントがついた。それを見るにつけ、第14次派遣についての専用サイトや専用動画チャンネルを立ち上げる必要があるのでは、と感じたが、一方で紛争地における活動状況や滞在場所を細かく発信することの危険性にも留意しなければならなかった。

「パレスチナについて知りたい」という人は多く、その人たちに向けて何をいつどのように発信していくかを、派遣団員の安全を最優先で考えながらも、後方支援チームとして今後、検討していかなければならないだろう。そんな課題を受け取りつつも、後方支援には後方支援ならではの意義ややりがいもあるのではないかとその一端を感じることができたのは私なりの収穫であった。

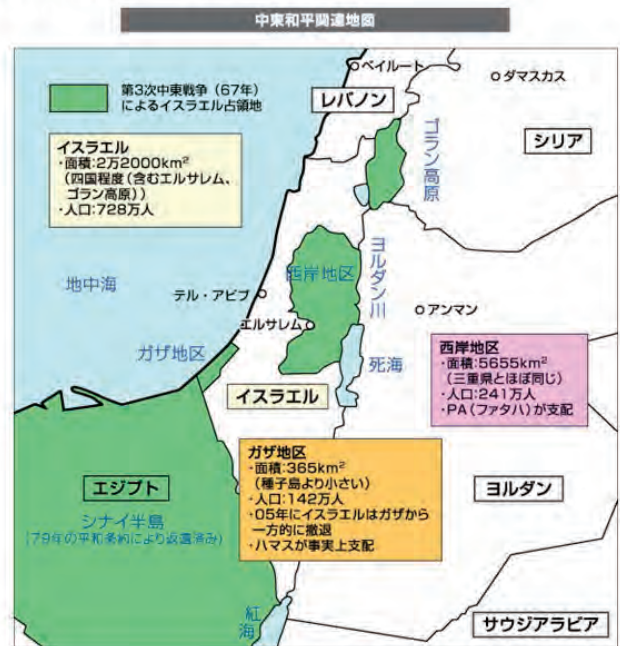
第14次派遣から戻った団員たちのレポートはそれぞれ示唆に富み、精神科医という自分の専門性を生かした支援にはどんな形があるか、と考えるヒントとなった。毎週のミーティングでいまだに団員から語られる現地での体験



資料

パレスチナ医療・子ども支援活動経過

- 2008～2009年 イスラエルのガザ侵攻
 2010年7月12日 「医療奉仕団」結成
 2011年01～02月 第1次 医療支援（視察）
 2011年11～12月 第2次 医療支援（視察）
 2012年11～12月 第3次 医療支援
 2013年11～12月 第4次 医療支援（ガザ）
 2014年7～8月 イスラエルのガザ侵攻
 2014年10～11月 第5次 医療支援
 2015年11～12月 第6次 医療・子ども支援（ガザ）
 2016年04月 第7次 臨時医療支援（ガザ）
 2016年11月 第8次 医療・子ども支援（ガザ）
 2017年11月 第9次 医療・子ども支援（ガザ）
 2018年07月 第10次 臨時医療（WHO）（ガザ）
 2018年10～11月 第11次 医療・子ども支援（ガザ）
 2019年03～04月 第12次臨時支援活動
 2019年10～11月 第13次 医療・子ども支援（ガザ）
 コロナ禍により日本からの支援活動
 2022年8月 第14次 医療・子ども支援（ガザ）



「第14次パレスチナ医療・子ども支援活動」実施要項（1）

「北海道パレスチナ医療奉仕団」 2022年7月19日

終息が見えないコロナ禍の中で、私達は2019年11月以降中断していた現地パレスチナ、ヨルダン川西岸とガザ地区での「第14次パレスチナ医療・子ども支援活動」を実施することになりました。

この間、パレスチナでもコロナ感染の拡大下にもかかわらず西岸ではイスラエルの軍事支配と入植活動が先鋭化し、17年間の封鎖が続く「ガザ地区」では2021年5月にイスラエルによる軍事侵襲が約300名の死者と多くの被害者が出されました。現地からは多くの支援要請の声が届けられ、私たちはこの度皆様のご協力とご支援で第14次の支援活動を行うことになりました。

期 間：2022年8月4日～9月1日

場 所：東エルサレム、ヨルダン川西岸、ガザ地区など

<活動内容>

- 診療活動：運動器疾患・総合診療・障がい者医療・
 ①東エルサレム・シェファット難民キャンプを中心に診療
 ヨルダン川西岸、ベドウィン集落への出張診療
 ②ガザ地区、国連UNRWAの診療所での診療
 ③両地区でのコロナ禍の状況と地域精神状況の把握へ接近する。

子ども支援活動：日本と現地の子供の共同作業

ガザ地区で現地教師との懇談

- ①「平和の壁画」、障がい児と交流活動、絵画・アート活動
 ②バレーボール指導とガザ地区のスポーツの現状視察

「第14次パレスチナ医療・子ども支援活動」実施要項（2）

「北海道パレスチナ医療奉仕団」 2022年7月19日

同時に、エルサレム旧市街地での定点観測をはじめ、西岸・東エルサレムでのイスラエルによる軍事支配の実態、イスラエルによる完全封鎖で「緩慢な死」を強制されている「ガザ地区」の人々の現状を報告いたします。

派遣メンバー：猫塚義夫（団長：整形外科医）細川佳之（副団長：高校教師）
 清末愛砂（副団長：大学教授）山村順子（副団長：通訳・安全担当）
 斎藤 育（中学校教師・特別支援）植村和平（総合診療医）
 相澤依里（看護師）高橋国夫（社会運動家）以上8名

在札幌本部：宮島豊副団長（本部長）、高崎幅弁護士、香山リカ、松本一敏、
 西岡利泰、井上智美、石崎龍之介、米林嶺、上西潤

E-mail: hokkaido_palestine@gmail.com

Tel: 011-780-2730 Mobile: 090-7516-8711

①総計 診療：約400名の診療とコンサルテーション
子ども支援活動：

西岸・東エルサレム	
難民キャンプ：シュファットRC	チャリタブルセンター 4回
	メディカルセンター 1回
アマリRC (ラマツラ)	1回
シャラゾーンRC (子ども検診)	1回
カランディアRC	1回
ベドウィン集落検診 (アフファラ地区 アウジャ村)	2回 (+1)
ガザ地区 UNRWA診療所 5か所	
ハイハス、ブレジ、サウ、ラファ、ジャバリア、各難民キャンプ	
Wafa病院 (回診・診療・懇談)	1回

②活動範囲の拡大と縮小

Salim先生の活動スタイルの変化
UNRWA退職後、慈善協会として活動範囲が大きく拡大
シュファット難民キャンプ以外のRCへ拡大
子供たちの「特別診療」
診療と子ども支援活動の開催

ガザ爆撃でGAZA (I)の短縮2日間で活動の制限・・・5か所
リハビリのコンサルテーション
子ども支援活動 (+2か所)

未達成：イスラム大学・看護学部訪問・連携

パレスチナ・イスラエルの状況：
内・外3方向への軍事的「入植地」支配

- 1) ヨルダン川西岸・東エルサレムの「入植地」軍事支配
ガザ地区の完全封鎖 2007年以降 17年目へ
- 2)) ベドウィン族 (砂漠の遊牧民)
生活基盤の破壊・貧困の進行
- 3) シリア領・ゴラン高原 (ドルーズ族) の占領支配

まとめ

- #ウクライナ戦争など武力による国際紛争が進む中、非武装・非暴力に立脚した「人道支援活動」の意義は大きい。
- #パレスチナでは、イスラエルによる軍事支配と人権侵害は、難民の貧困と健康破壊の進行を一層加速させています。
- #特に、2021年5月に行われたイスラエルによるガザ侵攻は、「封鎖下」に暮らすガザ住民の心に大きな傷を刻印しました。
- #今後、医療支援とともに、子ども支援活動も強化し、難民の社会精神的問題へのアプローチを検討しています。
- #また、国際的にはパレスチナ・イスラエル問題の早期解決に一層の努力を続けることが大切であると考えます。

アフガニスタン紀行

二〇二三年二月

「アフガニスタン紀行2023年2月」



「北海道パレスチナ医療奉仕団」団長
新川新道整形外科病院・院長
勤医協札幌病院・整形外科
札幌医科大学医療人育成センター・非常勤講師
猫塚 義夫

～タリバン暫定政権下のアフガニスタンを訪ねて～

アフガニスタン支援を続けているカレーズの会 (<https://www.karez.org/>)・理事長であるレシャード先生からアフガニスタン訪問の打診がありました。先生もコロナパンデミック下で3年ぶりの現地訪問です。昨年1月に先生にお会いしてからアフガニスタン訪の機会を探っていましたがその時が来たのです。

ある報告によれば、現在の世界で最も危険な国がアフガニスタンに上がっているところから、職場や家族から安全の危惧を表明されましたが何とか理解を得て訪問が実現されました。ご迷惑をかけた職場の皆様には深謝いたします。

メンバーは、以下の4名です。

カレド・レシャード：カレーズの会・理事長 医師

猫塚義夫：「北海道パレスチナ医療奉仕団」団長、医師（整形外科）

清末国夫：「北海道パレスチナ医療奉仕団」団員

内堀タケシ：写真家

アフガニスタンは、2021年8月15日、米軍の撤退と同時にイスラム組織タリバン暫定政権が樹立されました。それ以降、欧米を中心とする国際支援がほとんど引き上げられ、また国内の金融システムが崩壊状態にあり困窮と貧困が蔓延しています。一方、暫定政権の施策により、女子教育の禁止や女子労働の大幅な制限などが民主主義と相いれない行政が行われているのです。

今回の訪問に当たり、課題として以

下のことを考えていました。

1) アフガニスタンの歴史と現状を把握すること

① 特にタリバン政権の下での人々の暮らし、医療状況、治安状況について。

② ペシャワール会・中村哲医師の足跡と今日の状況の把握、用水路・農地、農業・学校などの現状。

③ カンダハールでの社会状況・医療視察と診療活動

2) パレスチナとアフガニスタンの類似性と相違性の把握

3) 今後のアフガニスタン医療支援活動への足掛かりをつける。

① カンダハール、レシャードクリニックを中心とした活動

② Mobile clinic での活動

③ 保健省との連絡など

2023年2月6日（月）に羽田をたち、一路中継地のトルコ・イスタンブールへ向かい、翌々日アフガニスタ

ン・カブールへ向かうことになりました。

2月8日（水）アフガニスタン 第1日目

午前1時にイスタンブール空港を発ち一路標高1,800mのカブールへ予定でしたが、遅れが出て午前02:30に発ちました。時差1時間半のカブールに到着したのは、午前06:00だったので

機内は満員、聞くところによるとほぼみんなが強制送還された若者たちなのです。機内は騒然とし、あちらこちらで大きな笑い声や呼び合う声が聞こえます。静かなのは食事の時のみです。彼らがどの国から送還され、この後の処遇がどうなるのかが気になるところです。また、機内のトイレは順次故障し、ついにはすべて使用不能となり到着するまで70分間の我慢を強いられたのでした。（こうした機内設備の不十分さは初めての経験です。）

右手遠くにいただきに美しい雪をかぶった山脈の頂を観ながらカブール空港に着陸しました。ニュースで見ている2021年8月15日の米軍撤退時の空港の混乱状態が思い出されるのです。

到着後、再度その場で滞在許可書の発行を受けなければなりません。ビザ申請書と同じものを記入し、顔写真2枚の添付を要求されました。国夫さん



カブール空港でサビルラさんのお出迎えをうける

が「写真をトランクの中にあり」で何とか通過しました。この手続きを通して、国際社会から「隔離」されタリバン暫定政権が権力を掌握しているアフガニスタンの現実がひしひしと感じはじめました。現地のガイド兼セキュリティーを担当するサビルラ氏らが我々を迎えに来てくれていました。かれは、元JVC（日本国際ボランティアセンター）の現地代表で、アフガニスタンにおける国際NGO活動をまとめている人物、190cmにならんとする立派な体格で、アフガン内の事情にも明るいとの理由で、レシャード先生が今回の行程の中でガイド兼セキュリティーとして24時間体制で私達と行動をとることにするのです。温厚で日本には10回以上訪問している大の親日家でもあるのです。

まづ、2台の乗用車に分乗し滞在する宿舎へ・・・Cedar House Restaurant・・・ここは、出入り口は自動車の突入を防止する鋼鉄製の二重ドアで、出入りに際し2重のチェックが行われるほど厳重なセキュリティーがあります。レシャード先生によれば、人の出入りの多い高級ホテルより、こうしたところの方が安全との指摘がありました。部屋は広くお湯も出ており私の基準では総合的に4星です。

その後の休憩中に内堀さんが外務省へ「取材許可証」の発行手続きに行くも不発でした。理由は、撮影される側の要請・許可が必要とのこと（つまり、「招待状」の要求？）ホテルに帰着後レシャード先生も含めて日本の永井カレズの会事務局長に電話連絡し、現地NGOか現地カレズの会からの書類の準備に取り掛かり、明日再度外務省へととなりました。

移動の途中、街中のタリバンの多いことに閉口。どこからともなく自動小銃を抱え、顔をマスクしたタリバン兵が歩哨しており、どこからでも監視されているのです。街角でも、車のかけ

でも・・・

写真撮影は禁止です。この間5回の検問を受けました。3回目に国夫さんが雪山の風景を撮ろうとしてスマホを向けた時、タリバンがとんできて尋問、国夫さんを詰め所へ連行・・・とっさにレシャード先生が足早に後を追ひ、スマホの内容チェック後にやっと返されたのでした。以前から聞いてはいましたがタリバン兵の監視の厳しさについて、活動初日に「経験」できたことは、後から考えるとよかったのかもしれません。

タリバンは、車を見ているのではなく、車の中を見ている。外人がスマホを向けては絶対不審を持たれてチェック・連行が待っているのです。タリバン下のアフガンで活動するためには肝に銘じなければならぬことなのです。

昼食後、公衆衛生省国家結核対策プログラム（NTP）所長、Dr. Khan Mohammadと面談。同じ建物にWHOやJICAの事務局がありましたが、日本人職員はいませんでした。

ここの建物の敷地の中に、感染症研究所、感染症総合病院（communicable disease hospital）も併設されています。

以前ここから2～3名が日本への留学（清瀬結核研究所）しているのです。

病院は、結核の他、エイズ、コロナの患者さんも入院しています。また、入り口通路には患者さん家族用に小さな小屋が30～40戸程度並んでいました。

8～9名の医師、職員や感染症所長・Dr.Khan氏、病院院長から一応に出される意見として、

ソ連侵攻以前に結核対策が行われていたが、侵攻後中止されてきた。

2002年東京会議からWHO、JICAから援助があ



街中で市民を監視するタリバン兵

り、現在薬は無償貸与だがその他の費用は有料で、無償ではない。タリバン暫定政権の発足ご国際支援がなく困窮化している。コロナをはじめ、他の感染症の増加で、結核自体も増加し、国際レベルでの援助が必要。

病院も視察しましたが、日本の援助で建設されており、多くの機器にJICAのマークがある。しかし、メンテナンスが十分でできず使用不可のものもあり、支援の方法に難があるように思えました。つまり現地の実情に合っていないことが多く、送ること自体が目的化されている感じがしたので



アフガニスタン感染症研究所・総合病院のスタッフ

す。送りこも自体が目的かしている。現地では、「その援助で利益が出るからだ」との意見もありました。

2月9日（木）第2日目

昨夜からの雪です。宿舎の部屋の窓から見る雪は、アフガニスタンの冬の厳しさを強く感じさせます。雪は、湿り気交じりの湿り雪です。ひさしからはすでに溶けた雪から水が滴り落ちています。

本日の行動は、健康保健省への訪問です。雪でごった返す信号なしの通りを保健省に向けて出発です。こうした雪降るカブールでもタリバン兵士の監視・検問は続きます。

交通渋滞で健康保健省へ車が乗り入れできないため近くで車を降りて徒歩で行きました。

持ち物と身体検査を3重に受けて、副大臣室の前で待機しその後大臣室に通されました。3回目の検査は女性タリバンでしたが、手指の爪には赤いマニキュアがついていました。

2021年タリバン暫定政権成立後、ほとんどの役人が代ってしまっただけレシャード先生が顔見知りの人はもういません。そうした意味では、彼にとって保健省へは第一歩でした。

10:50 顧問のDr. Mohammad Azeem Zamarial Kaharが出迎えてました。

10:55 タリバン兵が3名自動小銃をもって待合室で私達を監視していますが、互いに笑顔で挨拶を交わしました。

11:00 大臣室へ入り、顧問先生と会談の目的を調整

11:10 大臣が入室してきました。38~40歳の若手大臣、頭も柔く政府の中でも優秀な大臣とのことでした。

レシャード先生から参加メンバーの紹介、「北海道パレスチナ医療奉仕団」も紹介され私の方から経過と訪問目的を発言いたしました。

11:29 に副大臣や医師も参加。その医師はアフガンのポリオの責任者で

す。残念ながらここアフガニスタンではいまだポリオが発生するのです。

レシャード先生から学校保健の創設と発展を提案し、幼少時からの清潔教育をお始めとする予防医療にお必要性を話しました。大臣も賛成・同意しこれからの課題となりました。レシャード先生は、こうしたことをカンダハールですでに開始されているのです。

また、これには大臣もこれまでであった日本との支援関係を更に発展させたいとの希望が大臣から出されていました。

昼食後、ACBARを訪問、これは2月11日午後の予定でしたが、政府高官との会談がキャンセルされたため急遽実行に移したものです。

Ms.Fiona Gall 次期部長Richard Hoffmann Mangallm, TEOFazel Habi Haq beenの3名でした。（ACBAR : Agency Coordinating Body for Afghan Relief and Development）

レシャード先生から自己紹介と私たちの紹介の後ACBARの説明になりました。167のNGOをまとめて、集う内容が話されました。彼らのミッションは、参加団体を勇気づけることが中心任務であります。年間、500億ドルの税金を支払う相当大規模で、50のNGO団体をカンファレンスなどで集めているとのことでした。税金の規模から相当な規模の金銭を各NGOへ差配しているようです。レシャード先生も参加を薦められました但し同意いたしませんでした。



雪の降る朝、宿舎の庭でレシャード先生と



アフガニスタン健康保健省における大臣との会見



ACBARを訪問し、代表たちと意見交換

ACBARの活動内容は、NGO同士の連携のありかた、NGO組織の連携、Mobile Clinic（移動診療所）へも及んでいるとのことでした。P6

本日の夕食は、共同通信・新里環イスラマバード・カブール支局長、あの安井浩美さん、NPO法人Management Sciences for Health（健康管理科学）の笠原伯生さんご一緒でした。アフガニスタンに滞在する国連職員とともに数少ない日本人です。

安田さんは、2021年8月15日のタリバン暫定政権誕生時の混乱で、最後に派遣された自衛隊機でイスラマバードに脱出した日本人として有名になった方です。現在も30年目のアフガニスタン勤務となり様々なアフガニスタンの事情に精通しています。

3人から様々な感想が述べられました。

いつタリバンが家宅捜査・連行からず、暗い気持ちになる。

国連による支援・関与がなくなりアフガニスタンの人材が減少。

医療関係者が、タリバン政権になってから一時減少したがその後増加した。医療関係者の踏ん張りがここまでアフガニスタンを崖っぷちでこらえさせている。給料は、国際NGOから出ている。アフガニスタンの国民は、数多くの戦争にも関わらず、持ちこたえ

る強靱な国民性と感じている。

私が雪の中の子どもの靴磨きを見たことを話すと、それは収入を得るための「子どもの仕事」でもあり、極度な貧困とともに貧者を救うイスラムの習慣に依拠しているものだとの説明を受けました。その他、パレスチナと比較して女性のヒジャブについて結構緩い感じがあり、また予想に反して結構女性の外出もあるとのこと。しかし、教育への統制は依然として続いているとのことでした。

2月10日（金）第3日目

本日金曜日はイスラム教では休息日なのです。街中は昨日と比較して車の数も少なめです。

10:50に、宿舎の厳重なゲイトを開けてもらい、一路東部ジャジャラバードに向けて出発です。今日もタリバン兵士の検問が続けられていました。特に嚴重だったのは各国の大使館の集まっている地域です。数日前に「爆破予告」の様なものが発せられ、この周辺はいわゆる「Green Zoon」に指定され、なおさら厳戒な警備が敷かれているかもしれません。また、外務省や昨日訪問した健康保健省の周りもタリバン兵の歩哨が密に行われていました。

車は、通常道路から山岳の道路まで2台の車が疾走するのです。それでもその途中7回のタリバンによる検問・尋問が繰り返されました。カブール市内ほどではないにしても、郊外とくにカブール〜イスラマバードの幹線には厳しい目が向けられているのでした。

郊外のタリバン兵は、正式な「軍服」でないものも多く、どこにタリバン兵が監視しているのかそのチェックに気を取られていました。

お昼にはカブール川の中流で一休みです。川を見下ろすレストイランで、ここで捕れた川魚のフライをお腹いっぱい食べました。大変おいしいのですが食べ過ぎると胃にもたれるのが弱点です。昼食の準備中に近くの席の若者たちから「一緒に写真を撮ってほしい」と頼まれ即席の撮影会が行なわれ



雪のカブールで、歩道で靴磨の仕事を待つアフガニスタンの子供



カブールとジャジャラバード間の厳しい山岳道路



山岳道路の片側は、険しい谷となっている



元タリバン兵が自動小銃を持ってガードマンとして働く

たり、元タリバン兵のガードマンが自動小銃を持って立ち上がってくれました。

昼食も終了頃、近くの子供たちが食べ物物を物心したり、母親たちが余った料理を手にして別な場所での軒先で頬張っているのです。子どもと母親たちが昼食を貰いに来たり、残飯を口にしている姿とみていると、一見華やかなカブールの表通りと郊外の貧困の酷さが二極性に別れ、単なる貧困ではなく「極貧困」という状態がここアフガニスタンで作られているのが分かりました。こうした光景を見ると本当に胸が痛むのです。

これまで続いてきた周囲の山脈の冬化粧の美しさに気を取られたるうち

に、カブールをジャジャラバードをつなぐ峠に差し掛かりました。P9 道路の片面は谷へ真逆さまです。こうした峠越えの山道を優秀な運転手が巧みにコーナーを切ってくのです。

夜間の暗闇では、少なからずの交通事故が発生しているとのこと。

また、その曲がりくねった険しい幹線道路の中央に「交通整理」を名目にお金を稼ごうとする母子がいるのですから地方の貧困家庭の存在が伺われるのです。もし、事故があれば命を失いかねません。それほど命の危険と隣り合わせの日常があるのです。

さて、いよいよジャジャラバードに到着です。厳重なセキュリティーのホテ

ルに投宿です。

その時、1昨日からお願いしていたアフガニスタンの民族衣装が届きました。

夕食時にも話題になりましたが、中村哲さん虐殺の実行者は、パキスタン人武装勢力であり、原因の一つに「水問題」があることが語られました。クナール川での水の採取やダムづくりは、季節によれば、その下流にあるパキスタンの水不足を招くことになりはしないのでしょうか。それを十分考慮しない事業であれば、国境紛争の原因となるものです。それを解決するのが両国政府の責務であるはずですが、様々な理由でそれらの調整が進まぬ中で、中村哲殺害事件が起きたのも否



険しい山岳道路で「交通整理」でお金を稼ぐ母子



アフガニスタンの民族衣装に身をくるみ、中村哲先生のもとへ



「この運河は、人の命のためのもの」と PMS が表示している

定できません。事実、「水問題」でアフガニスタンとイランの国境紛争が起きそうなこともあったことも聞きました。

いよいよ明日は、PMS (Peace Japan Medical Service) の現場へ行くのです

2月11日(土) 第4日目

本日は、中村哲先生を支援していたペシャワール会に連絡を入れていたPMSへの訪問です。目的は①アフガニスタンにおけるNGO活動の連携を今後どのようにしてゆくか、②中村哲先生が主導したGreen Land Projectの実際を見る事でした。

09:10にホテルを発ち、PMSの本部を目指しました。途中は、ラッシュで交通渋滞、中でも多くの3輪車イエローキャブがところ狭しと動きまわり、その間にタリバン兵が銃をぶら下げてにらみを利かせていました。15分位の運転でPMSの本部に着きました。

中では、現地代表のDr.Ziaurahmanをはじめ5名の幹部職員が出向かえてくれ、各自の自己紹介の後、彼とレシャード先生のやりとりで議論が進みました。

代表は、当然中村先生の功績と感謝の意を述べながら、「中村先生がこれまでに様々な功績のあった人物に与え

た名誉市民権の第2番目だったこと、また、タリバンの復活をはじめ、様々な政変がありながらも、唯一中村先生はその立場を変えずに支援事業にとりくんできた。このため多くのアフガン人が心から感謝しているのだ。」と・・・

ここでレシャード先生が日本からの訪問の目的がNGO間の連携を模索していることであることを切り出しました。

これに対して代表は、「NGO活動の対象は人間の一人ひとりであり政治ではどうにもならないことを行います。NGOは国のためではなく、人のために活動しているのです。日本には、広島・長崎の経験があることも貴重です。アフガニスタンは、現在は低開発国ではありますが、将来的に日本を越えることを目指しているのです。

現在のペシャワールの活動は、2019年に決めた用水を建設をまづやり上げることに重点が置かれている。その他のprojectは明確になっていない」。

レシャード先生の意見「アフガンでのNGOがともに協力出来ることは何か?!」

代表はお互いに批判しあうかが心配とのことであるが、それぞれが活動し、かつアドバイスを言いあうことも重要であること。総じて、互いに意思を統一して意見や提案を積極的に統

一する方向で全NGOに呼び掛けては如何か?!

さて、レシャード先生に促されて、私が質問「中村先生はどうして医療から農業復興に力を入れたのか」と三段階があるのです。

第一段階、人間が動物と同じ水を飲んで

いた。それが感染症の発症や下痢の原因になる。これを見て、井戸をほり病気を防いだ。

第二段階、これらの井戸をすべての村々に設置、それでも足りなく・・・

第三段階、そして用水路建設へ進んだとのこと。

また、レシャード先生は、学校保健に関しての実績と提案を発言されました。

一方、代表は日本からトラクターや医療機器の寄付をいわれたが、同時に定期的なメンテナンスについても同時に考えなければならないことを指摘していました。

上記の会談後、建設された用水路の見学を予定していましたが、タリバン当局へそのことが伝わって、実施困難の可能性が出てきました。昼食をとりながら許可が下りるのか否か・・・待つしかありません。

日本のペシャワール会を通して、希望の予定を届けたがどこかで「中断」している可能性が出てきました。ここは、無理をせず場合によっては用水路視察は、安全最優先の立場から断念する可能性もあることを覚悟しました。

しかし、約1時間後に「用水路視察OK」の返事が届きました。

早速、ペシャワール会の用意したワゴン車にのり、Meeran Intaki用水路



用水路視察に向けて、タリバン当局が護衛を付けてくれました



用水路近くの松林、ここで青空教室も開かれる

(2014年10月～年10月) へ向かいました。現地代表をはじめ、先ほどの会談に出席したメンバーも同行しました。

途中、地区の文化情報局で経済・情報部長にお会いして我々の目的を説明し、また、ジャジャラバードでの医療の困難さが話されました。患者さんが多

いにもかかわらず、電気と水の不足など経済的問題を指摘し、特にコロナ後に一層悪化したことも指摘していました。

タリバン当局は、大変友好的で我々の行動の安全確保のため屈強な3名のタリバン武装兵士をセキュリティ対策としてつけてくれることになりました。彼ら武装車が先を走り、その後に続く我々をテロ攻撃や誘拐から守ってくれます。

30分ほどの走行の途中で中村先生の大きな看板が掲げられている道を通り、クナール側を右手に見て上流に向かって松林をぬって進みました。P14

実は、この松葉林のふもとで多くの青空教室が開かれたとのことでした。

徐々に車の両脇に緑の畑作地帯も垣間見える中で、中村先生のモニュメントのあるNakamura Parkに到着。きれいに整備された公園には中心に記念塔があり、中村先生の顔も描かれていま



中村哲先生の記念塔、万感の思いが胸に迫る



皆様、それぞれが中村哲先生に祈りをささげた

に迫ってくるのでした。参加した4名、ガイド、PMS幹部とともに静かに手をあわせて、イスラム式に追悼の心を捧げたのです。私は、思わず涙が出てきました。同時に平和と難民支援へのかかわりを一層推進する決意を胸に刻むのでした。

一帯を一望できる建物の屋上に上がり四方を見渡すことができました。実にきれいに整備された畑が整然と開発されているのを目の当たりにして、ここでも中村先生とそれを支えた住民の努力の結晶が見て取れました。北にはクナール川の水源地となるヒンズークシ山脈へ連なる山々は白雪をたたえ、我々を見ている姿は神々しくさえも感じるのでした。

その後、3名のタリバン兵とともに「記念撮影」、8番目の取水口であるMurwareed堰へ向かいました。そこでは、有名な斜め堰と取水口、両側を柳にかこまれた用水路がゆっくりとカーブを描いて伸びているのでした。勿論両岸の補強にはスチール製の石籠でしっかり補強されているのでした。

こうして、実際の「斜め堰」を見ると中村先生の偉大な発想と遂行する意思の強さを感じるのでした。

この地に建設した研修会館と研修室には中村先生の講義風景の写真が飾られ、後継技術者の養成に尽力していた姿にも接することができたのです。この素晴らしい施設もより多くのNGO関係者に門戸を開くべきとのレジャー



用水路建設後、緑の大地がよみがえる



クナール川から取水口へ水が貯留されている



用水路建設に使用される、護岸力の強い蛇籠



静かに水を運ぶ用水路

ド先生先生の言葉にも力がこもっていました。

こうして中村先生の偉業の一端を見て、その凄さを感じて今日の行程は終了いたしました。

多方面からの協力で、今回の行程で治安上最も危険な一日が終了しました。とはいえ、これからの活動でも一切気を緩めず目的を成し遂げる決意を固めて明日の活動に思いをはせるのでした。

PS:レシャード先生には心から感謝です。相手との交渉が実に粘り強いのです。決して急がず、怒りを出さずに静かに交渉の結果を見守りながら様々な可能性の道を探る姿を感じる事が多々です。そのベースにはアフガニスタンへのあふれる思いがあるのだと思います。また、日々計画変更を余儀なくされる中で複雑なやり取りをこな

し、更に会計への提案と実務をこなすこと、先生でなければできないものでした！！！！

また、ガイドのサビルラさんの働きとそうした人選を検討したのもレシャード先生でした。私が今回の行程の中で学んだ大きなことのひとつがレシャード先生だったのです。

2月12日（日）第5日目

今回の行程で、最も治安の悪化が懸念されていたジャジャラバードでの活動も今日が最終日です。確かにダウンタウンの混みようは半端ではありません。三輪車のイエローキャブがところ狭しと走り回り、何の遠慮もなく車の前方へ割り込んでくるのです。

また、信号がありません。少年が勝手に交通整理を行い交差点を通過できた車の運転手から料金をいただくアルバイトまで現れるのです。こうした状

況の中で2019年12月に中村哲先生が凶弾に倒されたのでした。一見無秩序な雑踏の中で以前は誘拐や殺人、強盗が横行していたのも頷けるのです。2021年8月15日のタリバン暫定政権が成立後、確かに治安が良くなり、テロや誘拐が減少しているのも事実です。しかし、そのタリバン政権を批判して諸外国からの支援がほとんど打ち切れ、経済的な窮乏状態に陥っていることも事実です。銀行が凍結され、今回の行程でも現地通貨のアフガニー（1AF=1.5円）か米ドルの現金でした支払いができません。しかも私たちが持ち込んだ米ドルを現地のアフガニーへ換金するのも道端の路地に開いている「青空臨時換金所」で行われているのです。

こうして、生活基盤や治安が良くないジャジャラバードでは、必然的にタリバンの検問・監視がきつくなりま



アフガニスタンでは、銀行が凍結され、換金業務は街中の歩道の屋台でおこなわれる



すでにカブール川には3か所のダムが建設されている

す。彼らは、バザールなどの人の集まるところ、車で込み合う交差点では必ずどこかにいます。一瞬、いないと思って次の瞬間にタリバン兵が現れます。しかもそれが私服の時もあるので、移動時にとっても緊張を強いられるのです。そのタリバンのほかにそれに反対する政治勢力やIS（イスラム国）が暗躍するので、その中を活動する私たちにとっては一時の気のゆるみも許されないので、何もなければそれで当たりまえ、何か起きれば何でもありの世界なのです。

しかし、様々なタリバンのいることもわかりました。自動小銃を肩から下げて車の窓をたたき、パスポートと入国許可証の提示を求められることが何度もありました。厳しい態度でチェックされるのですが、時には優しい目をしていたり、笑顔を返してくれたり、握手を求められることもありました。

一様にタリバンといっても地域によっても結構監視の基準が変化することもわかりました。タリバンも人間集団であるためあまりのイスラム主義に走らなければそれなりの対応も可能ではないかとも思えてくれるのです。

人権侵害、特に女性への人権侵害としての女子教育の否定・制限と就労制限を推進するタリバンには最大限の批判が向けられるべきです。と同時にタリバン下での治安の回復は、それ以前

の酷さと比較すると一定歓迎されるべきもののように思われるのです。

その批判と現状をしっかりと認識することを前提に、現在のタリバン政権であったとしても平和的国際支援を充実させ、早期にアフガニスタンの国際舞台への復帰を促すべきではないでしょうか。そうして、アフガンの生活・就労の安定、経済システムの復興、治安の安定を実現すべきと考えます。

その中でも直ちに取り組むべきは国際NGOの活動の再開・前進です。今回のアフガニスタン行の目的、①アフガンの現状を知り、我々にできる事は何かを見定める事、その②は、各NGO活動が連携し、お互いに提案したり援助しあったりするにはどうか・・・特に②の実践を始めることが重要であることもわかりました。

午前中に訪問したYVO (Your Voice Organization) は、JVCの後身で、現地のパートナー団体として多彩な活動をしていました。スタッフは21名（うち男性18、女性3名）です。タリバンから就業を禁じられている女性3名は在宅勤務でした。

主要な取り組みは、①Food Program ②孤児問題 ③識字教育（女子10クラス）④Peace projectionを中心に行われていました。

スポーツや集団教育、孤児支援（10

歳以下）や基礎学校教育が取り組まれ、IS系もタリバン系も同様に行われています。また同時にメンタルサポートや裁縫などの職業教育にも力を入れているのでした。

一方、移動途中にジャジャラバードでは2か所の広場とカブールの宿舎近くの公園でバレーボールを楽しんでいた若者たちを見ることができました。バレーボールは、「北海道パレスチナ医療奉仕団」がガザ地区における子ども支援活動の中のスポーツ活動の一環として行っているものです。アフガニスタンのスポーツでは、クリケットやサッカーが有力でしたがバレーボールを目にしたことは今後の支援活動での参考となりました。

ジャジャラバードからカブールへの帰り道は、カブール川に沿って上流に向かって車を走らせるのです。しかし、実際にカブール川には合計3か所のダムが建設され、電気発電と用水のために利用されていました。アフガニスタンと隣国・パキスタンやイランの間には「水問題」での紛争の引きかけていた事実もわかりました。

クナル川とカブール川はパキスタンとの間で下流に位置するパキスタンからの批判が、ゲルマン川でのダム建設ではイランからの猛烈な反対表明がありました。

パキスタンとの関係で考えるとア

フガニスタンによる既に3か所のダム建設で下流の水量が調整されてきました。クナール川では中村先生がガンベリ砂漠への治水事業が完成されてきました。中村先生が存命の2019年から2022年にかけて計画された取水堰が完成しています。この計画前にクナール川でのダム建設の計画が立てられていたのであれば、パキスタン側からの抗議が起こっていたとしても不思議ではありません。もし中村先生の虐殺にこうした「水問題」が関与していたのであれば、それ自身が政治の課題として解決しなければならないのです。当時のアフガニスタン政権の責任は重大なだけと考えるのです。今後の「水問題」が行かないようにするためにもこの原因を明らかにしてゆくことも大切な課題なのです。

2月13日（月）第6日目

今日は首都カブールから南部のカンダハールへの移動日です。アフガニスタン国内線を利用しての移動です。昨夜合流したレシャード先生の弟さんのTARIQ先生も一緒に行動です。当初タクシーで空港までの予定と聞き緊張しましたが、お二人の先生方がそれぞれに分乗して安全に空港へ着くことができました。お願いしたタクシーも空港内まで入って行けるもので、重い荷物を運ばないで済むことができました。空港では、入場するまで2か所、チェックイン後は最も厳しい荷物のチェックが待っていました。

ところが12時発カンダハール行きのフライトが6時間延期とのこととなりました。私たちは、入退出の煩雑さを避けるため再度空港から出ることはせず、6時間の待ち時間を過ごすことになりました。

17:00 過ぎにチェックインが始まり、最後の手荷物と身体検査が待っていました。これは結構厳しく行われました。厳しさと煩雑さはこれ自体飛行の安全性を確保するには必要なことと納

得させるのでした。

19:25 カンダハール到着。空港の検査が終わり荷物を待ってターンテーブル簿傍にいました。レシャード先生の言葉として……総合すると、「数日前に50名のアラブ人」が既にカンダハールに来ていること、テロ・誘拐の標的にならないように最大限の安全管理をもつことにしました。

さて、先日のYVOの訪問時のことについて、タリバン政権とその方針に異議を申し立てる事ができるのか……否、それは無理でないでしょうか。一つは、タリバン政権が国民からの提案に対して聞く耳を待てるのか、②タリバン政権の内部がどのようになっているのか、原理主義者は一部なのか……。また、国際社会とタリバン政権の対話を開始することが可能かもしれない。そうした対話の中で、女性の権利の回復など徐々に民主主義的な施策が定着すか否か……タリバン政権の批判点は批判しつつ、接点や協議を継続してゆくことが大切ではないでしょうか。

一方、国際関係の中でアフガニスタン問題を考えると……

2019年8月15日の米軍撤退・タリバン暫定政権誕生以降、ロシアと中国からのアフガン支援が目につくようになりました。ウクライナ侵略戦争を続けているロシアは、領土拡大へまっしぐらです。ウズベキスタンやタジキスタンから、旧ソ連時代の領土政策は、いずれその矛先がアフガンへ向くでしょう。また、中国は「一帯一路」路線の発展のためにアフガニスタンの持つ地政学的優位点を見逃さずにはいきません。

これらを見て、一度は「敗北」して2019年8月15日の政変で、表面上はアフガニスタンから手を引いたかのように見えますが、反タリバン勢力・北部同盟などにテコ入れすることは明確で

す。こうした反タリバン勢力へアメリカの目下の従属国である日本の立ち位置は明確です。アフガンには援助せずアメリカの出方を待っているのです。

もし、アメリカがアフガンへ攻撃を加えることがあるとすれば、「集団的自衛権の発動」があるかかもしないのです。ですから、日本政府と外務省は、アフガニスタンへのビザ発給の異常なまでの停止要請も合点がいきます。日本は、それまでアフガニスタンにかかわらないことが米国のアジア政策への追随あると思います。

この5年間軍事費はウナギのぼりの43兆円です。今、沈黙を決め込めれば、声を上げなければ、確実に穿刺鵝のみちへ進みます。『沈黙は、戦争応援勢力』と言い切っていると思います。

国際外交関係の「二重基準＝ダブルスタンダード」

1922年2月4日ロシアによるウクライナ侵略が始まり1年以上の経過を見ている。この間、欧米を中心に日本も含めて「ロシアの侵略戦争」反対世論が多くを占めてきました。

毎日のニュースでもウクライナ関連の報道が行われています。勿論、国連憲章を踏みにじたロシアのウクライナ侵略を認めることはできなし、一日も早い撤兵を強く要求します。

しかし、NATOを中心としたウクライナ支援国、中でもアメリカは自らが来

行った国際法違反のアフガニスタン戦争やイラク戦争の誤りを一度でも公式に謝罪したことがあるでしょうか。それを抜きにしたアフガニスタンからの撤兵、戦後の復興支援への非協力などを私は容認できません。

同じことが、私達「北海道パレスチナ医療奉仕団」が医療・子ども支援を行っているパレスチナ・ガザ地区へのイスラエルからのジェノサイド政策にもみられるのです。人口200万人が

「完全封鎖」の中に住むガザ地区では、数年に一度イスラエル軍による陸・海、そして空からの一斉攻撃が行われ、多くのパレスチナ難民が虐殺されていました。それに目をつぶるところかイスラエルを支援しているアメリカが、一方でウクライナ支援を言い出すのは、どうみても『ダブルスタンダード』の指摘を免れません。

ロシアのウクライナ侵略戦争反対と同時にイスラエルのパレスチナへのジェノサイド政策への反対、アフガニスタン戦争・イラク戦争への誠実な反省・謝罪と戦後の平和的復興への取り組みが行われることを強く要求するものです。

2月14日（火）第7日目

カンダハールの2日目は09:30結核研究所への訪問でした。車で5分程度の近くにあるとはいえ安全を考慮して2台に分乗して出かけました。まづ感染症病院を訪問。構内・病院内には武装兵士が治安を守っているのです。待つこと10:30にカンダハール県保険局長で感染研究所所長と面談しました。レシャード先生からカンダハールの学校保健の説明とその意義、また既に実践している健康教室やワクチン接種の成果などについて説明がありました。また、カンダハールの医療医の現状から私達NGOの果たす役割への問題提起がありました。これらを遂行する上で、お互いの信頼関係の大切さがレシャード先生からいただきました。

私からは、学校医保険の重要性を側弯症検診を例にとって説明し、またガザ地区での例をとり腰痛やひざ痛の予防の関して運動療法の大切さを強調しました。

局長からは、女性の腰痛や骨粗しょう症の予防のために県としてできる事があれば協力し、できる事なら協力を要請された。レシャード先生からすぐ可能な返事はせず、今後検討することにした。

その後、結核研究所で所長先生・医師・検査技師と懇談をした。依然として結核は増加傾向にあること、耐製剤の出現や家族感染も出ていることがはなされた。

また、カンダハールとして、経済の困難から新しい機器を購入できず、カレズの会と協力してゆきたいとの希望が出された。また、以下の悩みが出された。

JICAからの支援が止まりその後の仕事が継続できず。顕微鏡もなく購入すると中国製となる。検査キットが不足、医師・技師のトレーニングが出来ない。

その後、カレズの会・アソラマシャド総合医療センターを伺いました。お昼を過ぎていたため、比較的患者さんがすいていましたが、院長先生をはじめ34名の職員さんが出迎えてくれました。内科・小児科と参加よりなっています。しかし、薬剤が大変不足しており、そのやりくりも大変です。医療費は、基本的には無料を貫いています。

お昼ご飯をご一緒しましたが、いつもは全職員が同じご飯を食べているとのこと、医師

もガードマンも平等に同じご飯を食



待ち時間を活用して患者さんに健康教室を開催



診療所とその前に並ぶ患者さん

べるのです。

医師の給与は月額350ドル。分娩は女医さん1名、助産師さん3名（実習生2名）で運営され、多くの分娩をこなしているのです。しかし、彼女たちには全く悲壮感がなく明るいのです。むしろ彼女たちから写真撮影をお願いされる始末です。

また、ほかの看護師・事務員・レントゲン技師・薬剤師・検査技師・清掃担当の方々が底抜けに明るいのです。こうしたことがあるのは患者さんのために無料診療を行う「意思と思想」とそれを支える職員間の平等の関係性に大きな原因があるのではないかとおみしました。

それと、診療実績や疾病統計が見事に経年的に集計されていたのです。また、カルテも整然と保存されていたのです。患者の診療録を正確に記載し、保存しておくことは高い医療水準が保持されている証左なのです。

アフガニスタンという政治・社会状況の下で資金難で目指す理想を実現できない、そして今日の厳しい財政状態にもかかわらず診療を何とか維持していること自体が称賛されるべきと考えます。

2月15日（水）第8日目

本日は、カレーズの会・アソラマシャド総合医療センターでの整形外科診療です。

私たちの移動に使用される車の運転手さんであるラウドさんの右第2趾の感染性皮膚壊死でした。P創部の「湿潤療法」を施行・・・感染性肉芽部をメスで除去してゆき抗生剤軟膏を塗布してラッピングを行いました。今後基本的に毎日のドレッシングを来ない、その経過を看護師さんからメールで保国をしていただくことにいたしました。

その後、女性だけの患者さんを中心に診察・・・

主に、7名の女性は、腰痛や肩こり、膝痛などでした。また、リウマチ

の家族歴のある方は右胸鎖関節炎、頸椎症や右肘外顆炎などです。その他5名の男性の患者さんが見えました。腰椎、膝・・・頭痛に患者さんは腱反射

が亢進し過ぎで脳外科に紹介でした。

先週金曜日にクリケットで転倒し、右肩を打撲したクリニックの事務員さんは、右肩鎖関節亜脱臼でした。この



足趾感染性壊死の患者さんへの処置も



診療所で毎週開かれる全職員会議



カンダハール郊外の丘までピクニック、街が一望できる

事務員は昼食の後レントゲンを持参して私の席に見えたのです。

診療後34名の全職員参加の会議がありました。3年ぶりにレシャード先生が帰国して初めての全職員会議です。診療所改築事業が進まない中、低賃金の中で努力している皆様にレシャード先生や事務長さんから職員へ励ましの言葉が続きました。

私から、パレスチナのこと、職員の皆様が温かく受け入れてくれたこと、カルでの管理や様々な統計が正確なのは診療レベルの高いことを示していることを話しました。



5歳児に米軍の空爆で井戸に転落した女性、後遺症が続く

レシャード先生から以下の3点が話されました。

① 職員のトレーニング不足をどう補うか

② 建物の損傷が激しく、修復が必要…特に外来診察室

感染症部門を独立させたいが資金が不足

③ 患者さんが増加しているにもかかわらず、スペースが狭い…増築が必要だが、資金不足

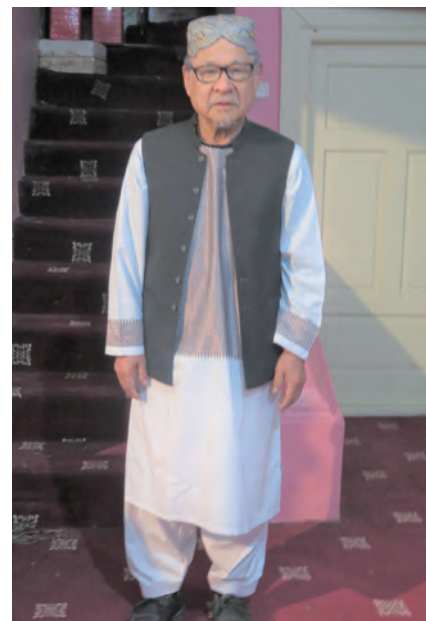
我々としては①に何とか努力したと発言をいたしました。

職員を日本に招き勉強し技術の向上と世界がアフガニスタンとともにあることを示すためでもありました。

その後、管理棟では貧困で栄養失調の5家族に4kgの食糧支援が行われていました。大麦、こめ、まめ、オリーブ油、砂糖などでした。

今日の昼は気温が29度Cまで上昇し、半袖のTシャツで、職員皆様と外で昼食をいただきました。ここで、川魚の焼き魚を吹く聞われました。ここでもすべての職員が平等な関係にいることが追及される姿を見ることができました。

夕方、郊外の岩原の登山でした。そこからカンダハールの町が一望できるのでした。



結婚式に招かれ、「正装」で準備した

帰り路昨日依頼した衣装を取りに行き、夕食を手に入れて宿舎へと向かいました。

2月16日(木) 第9日目

本日は、午前4時に起床し午後から日本をつないでオンラインで行われる「医療奉仕団」ミーティング・勉強会の準備・パワポづくりを始めました。

08:30 ホテルを発ち、レシャードクリニックへ・・・本日は、主に患者さんの診療です。昨日行ったラウドさんの左第趾の処置(湿潤療法)をはじめ、5歳児に空爆で時に井戸に転落した20歳の女性や元兵士で拷問に遭った52歳の腰痛の男性など計17名の患者さんが訪れました。最後にともに診察活動をしていた女性医師のお母様も受診されたのです。

こうしてみるとカブールもカンダハールも運動器疾患への要求は決して少ないものではなく、結核を中心とした感染症がありながらもパレスチナと同様な印象がありました。

02:30 から札幌で細川佳之先生の司会で「医療奉仕団」のZoom勉強会が開催され、現地から猫塚と国夫さんが参加しました。

内容はyou tubeで視聴できるようにしますが、治安状態、移動方法などへの質問、JVCがアフガニスタンから撤退せざるを得なかった事情、ペシャワール会の【独自路線】への評価、などを議論しました。また、中村哲先生の死をめぐり、水問題・ダム計画など、あくまでも噂話であり、正確な情報がこれまでも把握されておらず、課題として指摘されたのでした。

さて、今夜は事務長さんの息子さんの結婚式にお呼ばれを受けています。3人でお祝いの毛布を購入し、プレゼントです。そして、3人とも「正装」に身をくるんで出席いたします。P31

2月17日（金）第10日目

毎週金曜日は、イスラム社会は安息日なのです。昨日の結婚式に力を放出した翌日、レシャード先生のご親族とクリニック職員を合わせて20名以上でカンダハール郊外にピクニックとなりました。途中、国王の墳墓を見学しました。国王は、庶民に対して「国王ではなくお父さん」と呼ぶようお願いしていました。これらに象徴される国王への思慕がこのような荘厳な墳墓を作り出したのです。

その後、ピクニック場の公園へ到着。するとすでに先発隊が到着して料理を作って待っていてくれました。2月ということではほど混んではいませんでした。本来、このあたり一帯は緑

一面の風景でしたが、うち続く干ばつと水不足で土地が干上がっています。緑がほとんどない中で、これからのアフガニスタンの行く末を案じざるを得ませんでした。

同時に、うち続く戦乱により農作地の放棄でさらに農地が荒れてゆく、この悪循環がアフガニスタンの土地を痩せさせてしまったのです。

こうした郊外に行っても私服のタリバン兵が銃を構えてパトロールをしています。

ここへ来る途中に元米軍基地を横目に見ながら車を走らせましたが、道路を挟んだその前には、戦乱で命を落としたアフガニスタン人のお墓も立ち並び、2001年にアメリカが起こしたアフガン戦争の傷跡が痛々しいほど感じるのでした。

同時に、通り道や公園内での貧困化した子供たちの姿に心打たれました。国内には戦争孤児の施設はありますが、そこに収容できるのはほんの一部です。多くは、物乞いをしながらその日その日を生き延びているのです。ピクニックの食事が終了すると、レシャード先生はじめ参加者は、食べ物の残りを丁寧に集めてそれらの子供たちの下へ運んでいました。その様子を記録しに行くと、喜んでいる子どもの顔とともに、食べ物を運んでいるクリニックの若者たちの多少のはにかみの中にも笑顔が絶やさない姿が印象的でした。

帰り道、郊外の高級ホテル跡とその近くの礼拝所を訪れ、本日のイベントが終わるのでした。このホテルはアフガン戦争の中で爆撃破壊されたとのこと、ここでも私服のタリバン兵が警戒を強めていました。

アフガニスタンの医療保険制度は、基本的には無料診療です。しかし、薬や点滴薬剤は自己負担です。レシャードクリニックでも診察・薬剤は無料ですが、検査の一部、レントゲンの一部も有料です。

ここで、タリバン政権の考察として、タリバンとは何なのか・・・

タリバンの中に分断があります。

多くのタリバンは女子教育に賛同しているが、過激な勢力が強硬に反対している。

タリバン全体からするとこの過激派の意見と取り入れなければ、反タリバンのIS方向へ離脱する可能性があります。それは、前政権時にパキスタンに追放された時に援助してもらった関係上、パキスタン過激派の意見も取り入れなければならないとのことなのです。

前政権とアメリカの汚職構造

米は大量の支援金を当時のアフガニスタンに入れていたが、アフガニスタンと米軍ともに汚職構造になっていました。米側は、アフガニスタンや支援



米軍侵攻時の基地跡、現在はタリバンが使用



私たちの昼食後、残りを食事する子供たち



教室が足りず UNHCR のプレハブ小屋が教室として使用



プレハブ校舎の中は、夏は猛暑、冬は寒さに耐えなければならない

する国際NGOに実際よりも多額（例えば、\$ 200~400の支援を\$800か2~3倍と契約書を描かせて、浮いた金額を窃取するという汚職体質がはびこっていました。アフガニスタンやNGP側が断ると米軍に命を脅かされたこともあるとのことでした）

2月18日（土）第11日目

平日のため、クリニックは門前まで患者さんが順番を待ってあふれていました。

入構してすぐ右側にあるワクチン接種所へ、2名の職員が子どもと母親に医療教育をしながら8種のワクチンを接種していました。COVIT 19はPCR検査は外注で行い、抗原検査のキットのみありました。COVIT19のワクチンがタリバン政権下では不足し、1回目の接種しかできていませんでした。（国際社会の中でのワクチン格差なのです）

その後、腰痛を来し車いすで受診された患者さんの緊急診察・・・骨訴訟症での椎体圧迫骨折ですが採血などで悪性のものでないことを確認することにしました。

本日の主な活動は、カレズの会がカンダホールで運営するハジニカ小学校の訪問とその近くにあるヘルスポストの視察です。

この学校は国立学校で、いわば「公

立民営化」といったところです。これの目的は卒業生に正式な卒業資格を受理していただき、次のキャリアアップにつなげることができるのです。

職員は48人で、給与は県から出ているとのこと、生徒数が爆発的に増加し、設備不足と相まって3部授業になっていました。生徒数は1,600人（うち女子が524名）午前中は、まづ訪れたのは女子生徒に6年生の40名クラスで「女性の歴史」について学んでいました。二人の生徒が起立して挨拶です、その後生徒たちの希望職業を質問すると、圧倒的に医師、次が教師でした。先ほど起立した生徒は、「医師のみならず人の役に立つ医療職を考えている」と挙手して発言していました。

次に3年生の女子クラスです。ここは72名のクラスです（欠席者を入れると82名です）

みんな床にすわり黒板上では数学の考え方の授業中でした。帰り際に、私がメモ帳を落とすと前列の生徒たちが爆笑していました。本来こうした明るい性格の子供たちではないでしょうか、多少緊張気味でした。

一方、屋外ではUHNCR（国連難民高等弁務官事務所）から寄贈された10個のコンテナを教室代わりにしているのが現状なのです。2009年に設立された同校も翌年には手狭になっていました。コンテナでの教室は、夏は内部



アフガニスタンでは数少ない路上の遊戯道具

が42~42°Cにまでなるのです。その後も生徒は増加の一途をたどり施設の劣悪化は深刻です。また、校庭には青空教室で使用する机のペンキ塗りが行われている真っ最中でした。

ここでレシャード先生から二つの提案がありました。

① 3年ぶりに訪問した学校で、単に来ただけにとどまらず生徒たちと夢を共有するため形になる者を寄贈すること。具体的には各生徒に2000人分の鉛筆と

60ページのノートを現地で購入することになりました。また、教育を支える先生方にバッグをひとつづお渡しす

ることになりました。その費用は4人で\$800(一人\$200)といたしました。

② 手狭な施設をとりあえず緩和する手段として、別棟を建設しそこに図書館などを映しその分を教室に使用する。また、職員室でもいいかもしれません。そのため建設費\$2000~3000も4人で保証することにいたしました。(しかし、これは後ほどタリバン当局の許可が必要なが分かりました)

一方、校内には保健室があり学校保健の拠点となっています。ここ専用の先生とクリニックからの担当職員がいて、ここを訪れる生徒の健康管理を行っています。簡単な投薬と必要であればクリニックへの紹介もしています。ワクチン接種や健康教育も含めて今後HPとして発展させる計画があるとのことでした。

その後、Haji Aziz村にあるHP(ヘルスポスト)を訪問・視察です。土堀で囲まれたこの村にあるHP(全部で14個ありますが、その11番目です)は、民家の一室で開かれ、担当職員(ここは薬剤師)がいて、患者さんの紹介(リストの作成が凄い)や子供たちへのワクチン接種と証明書の発行などを行っているのです。この日もワクチン接種が行われていました。また、



モハムド国際病院(MIH)、アフガニスタンでは最先端の設備を誇っていた

救急箱に当面の置き薬がありました。

こうしたスケジュールの合間をぬって整形外科患者さんの診療とラウドさんの足趾の処置を行いました。総計12名です。依然として腰痛・肩こりが多かったのですが、事務職員の右小指末節骨のグローム腫瘍もありました。また、職員・その家族(特に母親)、最後にこの間の診療の通訳を行ってくれた若手女性医師本人が腰痛の診察と相談を受けたのです。

その後、車は郊外にあるAino Maina



モハムド国際病院の駐車場と病院を監視するタリバン兵、戦闘が未経験で優しい目が印象的だった

病院を訪問しました。ワリーアジズ院長が院内の案内と説明をしてくれました。350床のうち現在し使用されているのは、内科・一般外科・小児科・産科でした。1日の手術は6~10件、この日は9例の手術が行われていたとのことでした。医師は8名(男性7、産科の女医1名)です。視察には麻酔科・小児科・内科のDr.が切れくれましたが、最後にハマス政権から派遣された「院長」が出てきてラシード先生と挨拶を交わしていました。こうしたところまで、タリバン政権の影響力を広げているのを感じました。

ワリーアジズ院長からは、2028年に整形外科を開設するので指導に来てくれないかとのプロポーズを何度も受けたのです。

夜は、近郊にある酪農とブドウ畑を経営しているラシード家の友人宅で食事をいただきました。結婚式に似た豪華な食事をいただきました。

2月19日(日) 第12日目

今日は朝から病院視察です。行き先は、Mohammad International hospital(MIH)。200床の民間病院です。新築らしく威風堂々の構えです。現地でレシャード先生と合流の予定でしたが若干早く到着。PAでタリバン兵士に遭遇、写真撮影を訪ねるとOKサイン



地域住民の健康を守るヘルスポスト、ボランティアで自宅が提供されていた



贈られたノートとボールペんに子供たちに笑顔が広がった

でした。兵士がセキュリティーに連絡し、写真撮影も行院内事務長室に案内してくれました。そこに、レシャード先生が到着、するとそのセキュリティー氏は、学生時代に先生特別講義を受けて知っていたとのことでした。先生はアフガニスタンでも著名人なのです。

麻酔科の院長が院内を丁寧に案内していただき、内科、外科、小児科、産婦人科整形外科、救急などがあり、手術室も各科ように備えられていました。トピックは先日初めて心臓外科を開設し、第1例目の手術に成功したとのことでした。

その後、理事長にお会いしましたが、先代がホテル建設よりも人の役に立ちたいと病院建設に踏み切ったとのこと。また、以前のような平和なアフガニスタンになることを希望していると述べていました。

この訪問で意外と時間が経過しましたが、ここからまっすぐ小学校の児童にノートとボールペンの送呈を行うために急ぎました。

小学校に到着し、UNHCRのコンテナ内で勉強していた男子3年生の40数人にそれぞれを想定いたしました。生

徒たちは最初は緊張感ありありでしたが、徐々に笑顔がほころんできました。また、教師にはバックを送り日ごろの労に感謝いたしました。

ところでこのコンテナ、冬は寒く、夏は暑い環境で机もなく文字通り「すし詰め」状態です。それを解消するために、校舎の改築・増築に行政当局の許可を次第、私達も資金援助することにしました。

取って返してクリニックへ戻り、患者さんの診察が待っていました。本日は

13名の患者さんでしたが、大変優秀な女医さんのSitara Niazai先生の通訳と援助が大変助かりました。パレスチナでもそうですが、現地の言葉と英語との通訳は患者さんとのコミュニケーションをとるうえで大変重要なのです。

関節リュマチから始まり、右脛骨fibrous dysplasiaの少年、ラウドさんの親戚の肘部管症候群の女性…最後に、ホテルの私の部屋でラウドさん本人の右肩関節周囲炎で診察でした。3日間で合計41名の患者さんでした。

本日の昼食は事務長さん宅で「最後の昼食」をいただきました。野菜中心で日本人のくちにもよく合う絶品をいただくことが出来ました。感謝です。

その後、クリニック恒例の表彰式が開催されました。この1年間、優れた仕事をした職員を全員の投票で決めています。レシャード先生から100ドルの送りものがありました。その後、全員で写真撮影を行い、また全職員とお別れを告げました。

しかし、その後タリバンがクリニックにやってきて「女子の写真を撮ることはまかりならぬ」との指摘が・・・一瞬緊張が走りましたが、ついでに診察をというタリバンの希望を受け入れ



行程最後の日に診療所職員の皆様と記念撮影



1747年にカンダハールに建てられた神殿、モザイク模様が美しい

て、注意勧告だけに終わったのです。

ということは、厳格に言うと男性医師が女性患者さんを診てはならず・・・ましてや撮影などは・・・との疑念がわきます。

ところで、どうしてタリバンがクリニック内のイベントや女子職員の写真撮影が分かったのか・・・誰が通報したのか・・・疑念がわいてきます。この疑念の湧き様が今日のアフガニスタンにおけるタリバンによる支配の根底にあるような気がしました。

また、レシャード先生が在アフガニスタン日本大使館へ連絡し、明日4人で訪問となりました。この大使館訪問とビザ発給、日本のアフガニスタン政策など深く複雑な内容が含まれていますので、項をあらためることにいたします。

宿に引き上げた後、レシャード先生からあすのカンダハール～カブール便の欠航が知らされました。インフラ整備が遅れているアフガニスタンではこういうことは当たり前ですが、治安悪化の改善とともに銀行業務再開を含めた国内インフラ不備は、アフガニスタンの発展にとって越えなければならな

い課題です。

明朝は、これからの予定変更の相談です。事務長さんの先をよんだ綿密な計画とチェックがなければこうした支援活動は現在のアフガニスタンでは、まったく困難です。

2月20日（月）第13日目

初期の予定であれば、本日カンダハールからカブールまで移動しているところです。しかし、登場予定のフライトが欠航になりました。（その原因は不明）昨夜は、レシャード先生が多方面に連絡を取り、2月21日の便をとるために多大な努力をいたしました。

そのかいあって、21日09:30発ジッタからくるサウジの航空機FG-270をとることができました。こうして、現在のアフガニスタンでは、治安が不安定な他に生活に必要な諸システムがスムーズに進みません。勿論、銀行のシステムが働きませんので、すべてアフガン紙幣による現金払いです。（1アフガニー=1.5円）

街中は活気にあふれ、特に旧市街地と県庁の前は平日にもかかわらず車・バイク・タクシーなどでごった返しています。タリバン政権下のアフガニス

タンと聞けば、軍政の敷かれ、強権的な弾圧があるかと思いがちですが、庶民の生活力は遅しく感じるのです。

また、子どもの物乞いも時々遭遇し、「同情」と同時に彼らに「生きる力」を見ることができるとのことです。

しかし、これはカブールやカンダハールなどいわゆる「大都市」でのことです。地方や山岳地帯に行くと、激しい貧富の差の下で厳しい生活を強いられているかもしれません。今回は、治安の関係上地方への視察は危険なので実施できませんでした。また、薬物依存患者さんの実態把握はできませんでした。いつかはきっと実行したいものです。

さて、レシャード先生の案内で、遺跡の見学が組まれました。1747年に建てられた神殿です。美しいモザイクがなされているのもでした。

その周りを写真を撮りながら一周していたところ、タリバン兵士に我々6人が呼び止められ、我々の行動への説明を求められました。この直前までタリバンの車両の写った画像のある可能性のあった私には、一瞬緊張感が走ったのです。7人のタリバン兵士に囲まれ、レシャード先生が事情を説明し、内堀さんが取得していた「取材許可証」を提示いたしました。しかし、そのなかには「写真を撮っていいとは書かれていない」「動画は決して取らないように」などの指示をうけその場でのさらなる尋問はありませんでした。私に聞いてきたタリバン兵士は、私の国籍を聞くなり中村哲先生を知っているかななどの話に移り、中村先生を知っていると答えると、前記の注意事項を繰り返しその場から離れることができたのです。・・・ああ、また中村先生に助けられたと感謝を胸にしました。

その後、旧市街地を回りクリニックへ直行です。

この日も9名の患者さんが待っていて、我々の当直を待っていました。中



中村哲先生記念公園へ案内・護衛をしてくれたタリバン兵と



アフガニスタンの街中に掲げられているタリバンの旗

には、昨日訪れた小学校の校長先生のご両親や、38歳のタリバン兵士が持続する腰痛でやってきました。

今回の訪問での診察患者さんは50名前後になりました。終了後、「奉仕団」がPalestine用に作成したDVDや指導パンフをON—LINEで送り、ここでの診療に役立ててもらうことにいたしました。

タリバンの多様性

過激派・・・現在の主流 2001年のアメリカの進行とガニ政権から逃れてパキスタンに逃れた。その先で、パキスタン・タリバンに面倒を見てもらい、深いつながりを形成。

穏健派もいるが、現在は少数派となっています。両者の拮抗関係で政策が実行され、2021年タリバン暫定政権が女性の権利容認、「民主化」をうたいましたが間もなく過激派が力をつけて、今回の女子教育制限を提示・実行されているようでした。

一方、「評価」できる面として、前政権と比較して治安は抜群に改善…誘拐・拉致、自爆テロ、レイプなどは激減しています。また、貧困児童に食糧の配布など一定の福祉政策が始まっていることがあります。企業に最低賃金を事業者へ指導したり、輸出入の促進をお行い、韓国製製薬会社の進出も見られます。



アフガニスタンでは街中を走り住民監視を続けるタリバンの車両

中には目の優しいタリバン兵もいます。アメリカ軍との実践的な戦闘経験を訪ねるとそうした実践なしのもの、警察官的なタリバンへ兵のいることもわかりました。

中村哲先生を

通したタリバン兵による日本への見方は、おおかた日本へは友好的の様でした。しかし、今後は政策内容やその実践度合いで行き先は楽観できません。私は、わが国が先に述べた「外交の二重基準」からの脱却が大切ではないかと考えています。

2月21日（火）第14日目

いよいよアフガニスタン・カブールを離れる日です。最後の最後まで安全最優先の閑雅は堅持しなければなりません。

カブール空港での出国時に一言、モンゴル系のハザーラ人の帽子をかぶっていた私に対して「あなたはドクターナナカムラに似ているね・・・」と言われ、何とも言えない幸せな気持ちになったと同時に帰国後の諸課題が次々に湧いてくるのでした。

フライトは、燃料補給のためイラン経由でトルコ・イスタンブールへ向かったのです。

(ねこづか よしお)



アフガニスタン視察

清末 国夫

かつてのように多くの外国人旅行者が自由に訪れる日が一日も早く訪れることを夢見ています

私が今回初めてアフガニスタンに行くことになったきっかけは、昨年（2022年）1月に島田市で開業されているアフガニスタン出身のレシャード医師に会いに行ったことが始まりです。先生は19歳の時に来日されて以来53年間日本に住んでおられます。若い時に母国を離れているにも関わらず今でもパシュート語を流暢に話されるのには大変驚かされました。

ソ連軍が1979年に侵攻する以前を想像することは難しいですが、外国人観光客が溢れる平和な良き時代を過ごされた1950年生まれです。再びタリバン政権が支配を開始してから初めて、そして3年ぶりの帰国に同行させて頂きました。2月6日に出発し23日に帰国するまでの間で特に印象に残ったことを書きます。

ペシャワール会訪問のため、ジャラバードに行く途中に幼い二人の子供とその母親が道路の中央で座って、大穴の危険を知らせて小銭を得る行為にビックリしました。あたりには民家が見えない場所で何処からどのようにしてきたのか、正に命がけの行為です。

その場を通過する誰か一人でもわき見運転した場合、崖下に遺体が飛ばされ誰からも発見されないかもしれません。それ程までに生活が追い込まれていることを思うと心が痛みました。また、途中で立ち寄った店からカーブル川の景色が良く見える屋外席で昼食を取りました。私たちが食べ終わった時物乞いする子どもたちに対して後かたづけする店の子との間でパンなど我々の食べ残しものを取り合いしていました。この時も現実の厳しさを知りました。

カーブルでは日本の厚生省に当たる公衆衛生国家省で、事前に補佐官にアポイントを取って会談中に大臣と副大臣が加わり、子供たちの健康管理のために学校内に保健室を設置する必要性についての話題で話が盛り上がりました（私は現地語が分からず、後ほどの説明で理解する）。カーブルとカンダハールの両市で結核施設を訪問した時、止まっている支援金の再開を熱望されました。日本の国会議員が海外で支援金を依頼されて、あたかも自分のお金の如くイーカッコーシーで「よっ

しゃー！」と税金を配りたくなる気持ちが分かるような気がします。しかし、現在の日本はそんなことが出来る状況からはほど遠くなりました。

次にタリバンについて語らないわけにはいきません。街の中はあちらこちらで自動小銃を肩にかけたタリバン兵が目につきました。多くの場所で車を止めてチェックするためかえってそれが経済発展にブレーキをかけている反面、治安が良くなったことやウィロを撲滅することが国民から歓迎されていました。日本の岡田大使の説明によると、イスラム原理主義を目指す少数派の武闘派は「女性は家に居れば良い、男性は髭を剃ったら駄目とする」と主張しますが国造りと福祉を目指す多数派は国際社会との関係性を考える現実路線で国民のための国家、教育へのアクセス担保し、ものが言える国造りを目指しています。この二つの方向路線の対立が内部崩壊につながりかねないことを案じていました。

残念ながらタリバンの内情は誰にも分かりません。何かしたらそれに対して何をされるか分からない恐怖が支配しています。レシャード先生が運営されている病院がカンダハールという古都にあります。そこで助産婦を含む11名の女性スタッフと23名の男性スタッフと我々との集合写真を中庭の様な屋外で撮影した時のことです。誰がどのようにタリバン兵に密告したのか知りませんが、「女性と一緒に写真撮影した」ことが大騒ぎになりました。また、私がカーブルに着いた初日に車で移動中に山の斜面に建つ住宅街が珍しくて写真を撮ろうとした時に、運悪くタリバン兵と目が合ってしまうスマホを取り上げられ近くの詰め所に連れて行かれました。何を話しているのか全く分からず5、6人に取り囲まれ私が写した写真を1枚ずつチェックされました。その時同乗していたレシャード先生が駆け付けてくださり説明してくださったので、どうにかこうにか解放されました。その時より解放された後



で、もしも知らないうちにタリバン兵が軍事施設を写していたら今頃はどうなっていたかと考えると恐ろしくなりました。

また、車に乗るときに身内でも男女席を同じくせずで、パンの場合女性は荷台に乗せていました。私は身の危険回避のために現地の服シャルワール・カミーズを着て少しでも目立たないようにしていました。

中村記念塔や山田堰を見学するために現地のタリバンの役所で訪問許可を得た時タリバン兵3名が行き先を先導兼護衛として付けてくれました。しかし、移動の際テロ対策のため猛スピードについて行かなければなりませんでした。

カーブルからカンダハールの飛行時間は1時間ですが、行きは6時間半遅れで出発し、カーブルに戻る時は乗客数が少ないため欠航となり、1日遅れで戻りました。しかし、お詫びの一言も無くそれ以前に空港内でアナウンスがありませんでした。また、トルコ経由で帰国した時、イランで給油のため1時間停止しました。

Dr.中村の名前は尊敬と親しみを込めて賛辞され知れ渡っていました。ジャララバード周辺は勿論のこと、首都カーブルや南部のカンダハールでも皆に愛されていました。私には中村先生と同じ日本人であることが心強く感じられました。ガンベリ砂漠を緑地化した広い畑の中に中村先生のメモリア



ル記念塔が建てられている姿や山田堰を見た時改めて先生の偉大さや業績に脱帽しました。ペシャワール会を訪れて懇談会の席でレシャード先生が「お互い連帯してアイデアを共有しましょう」と持ち掛けた時に事務局長が「そんなことをして何になるの」と返答され、それには驚きました。

カンダハール市にレシャード先生の病院と小学校があります。その病院ではどの職員も一生懸命患者のため働いていました。今回の視察に参加した猫塚先生も、50名の患者を診察されていました。更に地域住民の健康管理のためのネットワークとしてヘルス・ポストを形成していました。また小学校では定員数をはるかに上回る1,556名の生徒（その内女子525名）を日中三交代で同じ先生が教えていました。国連UNHCR協会から寄贈されたテント教室10個を使用しても足りない状況でした。

見学したプライベート病院はアフガニスタンとと言われるだけあって、欧米の病院と比べても見劣りしない各種の検査機器が整っています。有料のため残念ながら一部のお金持ちしか行けません。

レシャード先生の弟である現地事務所長シェルシャー・レシャードさんの三男の結婚式に出席する機会がありました。廊下でつながっていますが、男女別々に別れた式場で大勢の出席者の一人として参列しました。



さて、トヨタ以外の車を目にすることが少ないことや、信号機がほとんどない道路を人やオートバイが行きかう中を車が縫うように走る、その中を横断する人など活気溢れる街中を生きるアフガニスタンの人々の最大の魅力は、お客に対するおもてなしだと思います。

レシャード先生からお聞きしたお言葉として、「自分たちでできることからやれ」と「1本のペン一人の教師一人の生徒が世の中を変える」が特に印象的でした。

パレスチナは残念ながら占領のため、国はありません。アフガニスタンは、タリバン政権が国を守っていると云う大きな違いを感じました。将来、独自の発展の可能性を大いに秘めていることに期待し、かつてのように多くの外国人旅行者が自由に訪れる日が一日も早く訪れることを夢見ています。

(きよすえ くにお)



「第14次パレスチナ医療・こども支援活動」報告集

発行日 2023年4月

発行 北海道パレスチナ医療奉仕団

発行責任者 団長 猫塚 義夫

〒065-0019 札幌市東区北19条東22丁目5-13 ☎090-8274-3163

<http://www.hms4p.com> E-mail : hokkaido.palestine@gmail.com

支援募金振り込み先

振替口座 : 02720-9-100675 振込先口座 : ゆうちょ銀行 二七九店 (279) 当座 010067